

### III 総括

#### 1 今回の調査結果から読み取れる回答の傾向と課題の整理

西田芳正（大阪府立大学）

##### はじめに

この報告書の「I 調査の概要」と「II 調査の結果」では、今回実施された第8回堺市人権意識調査の実施方法とその結果についての丁寧な紹介がなされており、それぞれの質問に対する回答と性別や年齢別の集計結果をグラフで示し簡潔な文章で説明している。こうした記述は調査報告書としては必要不可欠な内容であるが、特定の分野、問題について高い関心を持っている人でない限り、これらのグラフや説明文から堺市民が抱いている人権に関する意識やその背後にある具体的な経験のあり様、それらを踏まえての教育・啓発活動や相談支援の取り組みについてどのような課題が浮かび上がるのかについて考える手がかりとすることはハーダルが高いものだろう。

そこで「III 総括」では、あらためて今回の調査結果から見い出せる傾向や課題をできるだけわかりやすいかたちで整理する。多くの市民の方に読んでいただきたいが、特に日々の業務を通して市民生活に関わり市としての施策を策定し推進している堺市職員、さらに小中学校、高校や保育所・幼稚園・認定子ども園、社会教育の場で子どもや親、市民に接している方々に対して、日々の業務・実践と市の施策を問い合わせ改善の道筋を考える手がかりとしていただきたい。

詳しくは本論に譲るが、5年前に行われた同じ人権意識調査の結果と比べた時、同様の課題が確認されたことに加えて、人権問題に関わっての前向きな変化が起きていることをうかがわせる結果も得られている。今後の取り組みにおいて、こうした傾向とその背景を踏まえ、さらなる働きかけや体制づくりが必要であろう。

総括の前半部分では、一部の質問を除いた調査全体について扱い、自由記述欄の記載内容について触れた後に調査結果の活用の方向について整理している。

さらに総括の後半部では、今なお重要な人権課題である同和問題と、近年注目を集めつつあるSDGsに関わる質問、さらに世界規模で拡大し堺市民にとっても深刻なかたちで健康被害や人権課題として現れている新型コロナウイルス感染症についての質問への回答結果の分析と課題の提示を行っている。前半と後半は、それぞれ独立したものとして読んでいただきたい。

##### （1）回答者の基本属性

質問への回答結果の整理、検討に先立って、今回の調査に回答いただいた方の基本属性を整理し、結果を読み取る際の留意点を確認しておこう。

回答者1,165人の性別をみると6：4の割合で女性が多くなっている。堺市の人団構成でもやや女性の方が多いが、それよりもさらに女性の比率が高い結果となった。

年齢については（属性図表1-2）、60歳代以上が回答者の47.5%を占め、そのなかでも70歳代と80歳以上を合わせた比率が33.9%と全体の3分の1を占めている。市全体の年齢構成（60歳代以上が38.3%、そのうち70歳代と80歳以上で25.9% 属性図表1-2-2）よりも多くなっており、回答結果を解釈する際に、比較的高齢な市民の意見がより強く表れたものとなっていることに留意する必要がある。

年齢別の意識や経験を正確に踏まえることは非常に重要な課題であるため、今回の調査では若年層について対象者を追加して調査を行っている。16歳から29歳までの若年層500人に郵送した追加調査の回収率は3割で予想通り低いものではあったが（仕事や友人と過ごす時間が長く家にいる時間が短い、

転居している場合が多いなどが理由で、一般市民を対象とする今回のような調査では若年層の回答率は低くなる傾向にある）、それら追加分の対象者を加えることによって、属性図表1-2-1に示したようにおむね市全体の年齢構成に近い回答を得ることができた。なお、追加分を含んだ回答（1,334人）は各質問の年齢別の集計結果についてのみ示していることにも留意されたい。

回答者の職業については（属性図表1-3）、5年前の調査と比べて大きな違いは見られないなかで、「派遣、パート、アルバイトなど非正規雇用で働いている」については13.2%から17.8%へと増加している。

職業については性による違いが大きく、属性図表1-3-1の通り「民間企業の正社員」で男性28.6%、女性17.0%であるのに対して「非正規雇用」では男性11.3%、女性22.4%と逆転している。また、女性の3割弱が「家事専業」であるのに対して（男性は0.2%）「無職」は男性の30.7%、女性の18.6%となっている。

前回調査では、日本社会全体で貧困の拡大が注目されている事態を受けて「暮らし向き」をたずねる項目を設けた。今回も同じ質問をしており、1年前から続くコロナ禍により経済不振が深刻化している時期に実施したことから、さらに生活の厳しさが増していることが予想されたが、「大変ゆとりがある」と「ややゆとりがある」を合わせた率が16.2%で5年前から4ポイント減少しているのに対して、「大変」「やや」を合わせて「苦しい」と答えた人が33.6%、5年前の29.1%から4.5ポイント増加するという結果となった（属性図表1-4）。

コロナ禍がもたらす経済的な影響は、この問題が起きる以前から不利な状況に置かれていた人々に対して、より深刻な形で表れており、パートの仕事を失った母子家庭の母親や親からの支援を得られずアルバイトで生活を支えていた大学生のバイト収入が激減するなどがその具体例である。そして、生活保護申請数、自殺者数の増加がその帰結であると議論されている。暮らし向きが「苦しい」とする回答の増加はそれほど大きなものではないとはいえ、非常に厳しい生活を強いられている人々が増加しているという現実を踏まえて、迅速に、必要とする人たちに的確に届く支援の提供が求められる。

以下、質問の順番に合わせて結果を整理していく。

## （2）人権についての考え方について

### 「人権に関する宣言、法律、条約等の認知状況」（問5 p11参照）

問5では、人権に関する宣言や条約、法律や制度を「どの程度知っていますか」とたずね、認識（「どんな内容か知っている」と認知（「内容は知らないが名称は聞いたことがある」）について答えてもらつた。

日本国憲法については、「知らない」という回答が4%で大多数の人に知られているものの、「内容を知っている」という回答は45.4%にとどまっている。「基本的人権の尊重」を大原則とし、自由と権利、生活がさまざまなかたちで守られていることを明示した基本法である憲法について「内容は知らない」とする率が半数を超えるという結果については、人権問題の教育・啓発という観点から重く受け止めるべきであり、憲法の内容が認識されていない実態の改善が求められる。年齢別の集計からは（図表1-1-1）学校教育を受けてからあまり年数が経過していない若い年代でかえって「内容を知っている」率が下がっていることも気がかりな点である。学校教育における憲法教育のあり方についての再検討が必要ではないだろうか。

つづいて、憲法以外の17の項目を3つに分けて認知状況を整理していこう。

まず「世界人権宣言」「国際人権規約」「女性差別撤廃条約」「子どもの権利条約」の4つは、国際連合で採択され日本を含む世界各国で人権を守るために大きな役割を果たしてきたものである。このうち「世界人権宣言」は6割の認知と15%の認識、「女性差別撤廃条約」「子どもの権利条約」も認知については半数程度だが認識は15%前後という結果となった。「女性差別撤廃条約」はその批准のための条件整備と

して「男女雇用機会均等法」が制定され、「子どもの権利条約」も日本での子どもの権利についての認識と施策の進展に大きな影響を与えたものである。他の多くの項目に比べ認知率がやや高くなっているとはいえ、その内容についての知識が多くの人々に共有されることが求められる。

次に、1965年に内閣に提出された「同和対策審議会答申」から「大阪府部落差別事象に係る調査等の規制に関する条約」「人権教育及び人権啓発の推進に関する法律」「配偶者暴力防止法」、2002年に制定された「プロバイダ責任制限法」、そして2016年に制定され「人権三法」と呼ばれている「部落差別解消推進法」「障害者差別解消法」「ヘイトスピーチ解消法」までを、日本国内の差別・人権問題の解決に向けて設けられた法律や制度として一括りにしそれぞれ的回答をみると、夫婦間の暴力（ドメスティックバイオレンス）という身近な問題に関わる法律（配偶者暴力防止法）の認識・認知がやや高くなっているが、多くは認識が1割未満で認知を合わせても半数に届かず、数年前に制定された「三法」についても同程度的回答にとどまっている。

最後に「堺市男女平等社会の形成の推進に関する条例」「堺市平和と人権を尊重するまちづくり条例」「戸籍謄本や住民票の写しなどの本人通知制度」「堺市パートナーシップ宣誓制度」という堺市での取り組みについては、上記した2群の項目よりもさらに低い回答率となっている。なかでも直近に制定された「パートナーシップ宣誓制度」については、周知期間の短さが影響しているとしても、市の人権施策を象徴するものとして周知活動に力をいれるべきだろう。

質問に列記された17項目の法律、条約、制度の多くに「知らない」と回答した人が5割から7割にのぼるという結果から、認識や認知を高める取り組みが求められる。そのための方策については、他の質問項目への回答を踏まえたうえで、最後にあらためて考えてみたい。

### 「人権に関する考え方」(問6 p21 参照)

「人権について、いろいろな考え方」を示し賛否をたずねた問6の12の項目のうち、肯定、否定が最も明確に示されたものが「人権問題とは、差別を受けている人の問題であって、自分とは関係がない」であり、86.6%が「どちらかといえば」を加えた「そう思わない」という回答になっている。「そう思う」は「どちらかといえば」を合わせても1割にとどまり、人権問題は「他人事ではない」という意識が大多数の人に共有されていることがわかる。また、「思いやりややさしさをみんなが持てば人権問題は解決する」という個々人のこころの問題を重視する意見に7割を超える肯定的回答が集まっている。(煩雑さを避けるため、以下の多くの質問について、肯定、否定ともに「どちらかといえば」を加えて「そう思う」「そう思わない」の2つにまとめた数値を使って整理している。)

他の項目について肯定、否定のいずれかの回答率が高いものからみていくと、「権利ばかり主張して、がまんすることのできない者が増えている」と権利主張の行き過ぎを非難する意見を7割が肯定し、「競争社会だから、能力による差別が生じるのはしかたがない」「学校では、権利より、義務を果たすことを教えるべきだ」という、「能力による差別」を容認し権利主張より義務の遂行を優先する考えについても賛成的回答が上回っている。さらに、否定する回答の方が上回ってはいるが、「個人の権利より、地域のみんなの利益が優先されるべきだ」「差別する人だけでなく、差別される人にも問題がある」の2項目の回答からは、個人より集団を優先し、差別を受ける側にも責任があるとする意識が4割前後の人々に分け持たれていることがわかる。

「福祉制度に頼るより、個人がもっと努力すべきだ」「介護や介助を受ける高齢者や障害者が、あれこれ自己主張するのはよくない」という、福祉制度の利用やサービスを受ける側の自己主張を抑制する考え方については、それを否定する回答の方が上回っており(否定が5, 6割、賛成が4, 3割)、「差別を禁止する法律が必要」「人権問題解決の責任は行政に」に同意する回答は半数前後であった。

これらの結果からは、個人が権利を主張することよりも集団の利益を重視し、個人には義務の行使を

求める、差別される側にも問題ありと考える人々が半数おり、特に権利主張について否定的にみなす意識は多数が抱いていることがわかる。

ところで、この問6については5年前の調査でもほとんど同じ内容の問を設けていた。両者を比較すると、大きな規模ではないとしても重要な変化が生じている可能性が示唆される。回答傾向に変化がみられた項目について、賛成反対の率の増減を以下に示した。

項目	賛成	反対
差別をなくすには、差別を禁止する法律が必要	+14.5	-16.2
差別する人だけでなく、差別される人にも問題がある	-15.9	+15.1
学校では、権利より、義務を果たすことを教えるべき	-11.4	+10.6
競争社会だから、能力による差別が生じるのはしかたがない	-10.1	+9.6
介護介助を受ける高齢者や障害者が自己主張するのはよくない	-8.5	+7.1
権利ばかり主張して、がまんすることのできない者が増えた	-7.4	+6.9
個人の権利より、地域のみんなの利益が優先されるべき	-6.9	+5.5

\*設問の表記は簡略化した。「差別を禁止する法律」については今回が「法律が必要だと思う」、

5年前の調査では「法律が必要だ」という表記である。

5年前と比べたとき、不利益や差別を被っている人たちの存在に共感し、苦境についての訴えや権利の主張に耳を傾けようとする意識の高まりという変化が生じていると言えそうである。

こうした変化が実際に生じているとすれば、その背景にある要因はどのようなものだろうか。近年日本国内や世界で起きている出来事を想起すれば、まずはコロナ禍がもたらした事態があげられるだろう。感染者や医療従事者の苦難、その渦中にいる人が差別の対象となるなど理不尽な経験、仕事を失った人々、休業要請を前に途方に暮れる飲食店主の姿などが報道されている。他にも、女性へのセクハラを告発した当事者への連帯を示す運動や黒人差別事件と抗議の映像が繰り返しテレビなどで流されることもあった。

ここでは推測の域を出るものではないが、上記した意識の変化にはこうした動きが影響を及ぼしているのではないだろうか。

### 「人権問題への関心」(問7 p28 参照)

問7では、21個の人権問題について「関心のあるものに○をつけてください」と複数回答（あてはまる項目すべてに回答してもらう形）でたずねている。

回答率の高いものから10項目を並べると以下のようになる。

項目	割合
1 新型コロナウイルスに関する人権問題	61.5%
2 子どもの人権問題	61.4%
3 高齢者の人権問題	54.4%
4 インターネット上の人権問題	53.6%
5 障害者の人権問題	47.9%
6 労働者の権利に関する問題	47.6%
7 女性の人権問題	46.8%
8 若者の労働問題	44.1%
9 拉致問題その他北朝鮮当局による人権侵害問題	39.2%
10 犯罪被害者やその家族の人権問題	38.4%

「新型コロナウイルス」が及ぼす甚大な被害と不安、生活苦が回答率の高さに表れているのだろう。また、「労働者の権利」「若者の労働問題」が比較的高かったことは、コロナ禍によって仕事を失う人が

増加しているという事態に加えて、近年注目を集めている「ブラック企業」や非正規雇用労働者が被る不利益と困難状況についての認識の広がりが影響しているものと考えられる。

21の項目のうち11個の人権問題については、関心の程度を答えてもらうかたち（「関心がある」、「少し関心がある」、「関心がない」の3択）で5年前の意識調査でも問うており、そこで「関心がある」という回答率の高い項目は「子ども」「障害者」「高齢者」「犯罪被害者等」「女性」「インターネット」の順番となっている。設問の形式が異なるために厳密な比較はできないが、前回の結果と比べて目立つ変化としては、「インターネット上の人権問題」が回答率の最も高い一群に加わっていることがあげられる。インターネットの利用拡大にともない、それに関わる人権上の諸問題がさらに身近なものになりつつあることの表れと考えるべきだろう。

さらに、「同和問題」について「関心がある」という回答は25.2%、21項目の中では16番目という結果であった。関心の高さという点では順位の低いものである一方、今回の人権意識調査では43の質問のうち11問が同和問題に関連するもの構成されており、その扱い方について疑問を抱く方がいるかもしれない。後に触れる自由記述欄でも「同和問題が特別に扱われている」という指摘がある。この点については、総括前半部分の末尾であらためて触ることにしたい。

### （3）自分自身に関することについて

#### 「人権を侵害された経験と相手・場所」（問8・9 p30～35参照）

「日常生活の中で、過去5年ほどの間に人権を侵害されたと感じたことはありますか」とたずねた問8の回答結果は、「ある」が18.0%、「ない」が77.8%であった。経験があるとする回答を年齢別にみると（図表2-1-1）、20歳代で最も高く（30.5%）、30、40歳代で25%前後、50歳代で2割、それよりも高齢の層で1割前後、最も若い20歳未満では18.7%となっている。若い年代から高齢層に至るまで、1割から3割の人が、言葉による、直接的な暴力による、あるいは個人情報を侵されるといった人権侵害を経験しているという現実を重く受け止めるべきである。

その経験がどのようなものであったのか、「ある」と答えた人に対して10の項目をあげてたずねた問9の結果をみると（図表2-2）、「噂、悪口、陰口」が56.2%で最も多く、「パワー・ハラスメント」（50.0%）、「不平等な扱い」（46.7%）、「いじめ・嫌がらせ・仲間はずれ」（38.6%）、「プライバシーを侵害」（21.4%）と続いている。体罰、セクシャル・ハラスメント、暴力や虐待はいずれも1割前後であった。

問9ではさらに、「誰（どこ）から人権を侵害されましたか」とたずね、人権侵害が起きた場所や相手について選択肢から選んでもらった。その結果から、職場と家庭が、人権侵害が起きる主たる場となっていることがわかる（図表2-3）。特に職場については、パワー・ハラスメントの9割が職場で経験されていることに加えて、不平等な扱い、いじめや嫌がらせ、セクシャル・ハラスメント、悪口などでも職場での経験率が飛び抜けて高い。さらにプライバシーの侵害や暴力・虐待までも職場で経験したとする回答が少なくないことも合わせて、職場が人権侵害が起きやすい場となっているという実態が浮かび上がってきたことの意味は大きい。職業は人間の生活を経済的に支えるだけでなく社会とのつながりや自尊感情の土台となるたいへん重要なものだが、同時に、そこから逃れることができ困難な場もある。そこで厳しい人権侵害が多く発生している事態を重く受け止め、改善のための手立てが求められる。

さらに注目すべき点として「体罰」と「暴力や虐待」を受けた人の多くが「家族・親類」を選択していることである。「家族」についてはさらに、「その他」の経験をしたと答えた6人中4人が「家族・親類」を選択しており、そこに回答者本人が記した内容には「配偶者からのDV」「配偶者からの暴言」というものがあった。児童虐待、配偶者への暴力、そして高齢者への虐待など、身体的・精神的・性的暴力が家庭内で生じていることが近年注目を集めているが、コロナ禍による経済的困窮、ストレスや不安の高まり、そして学校の休校やテレワークにより家庭の外にある「逃げ場」が失われることで家庭の危険性がより

高まっていることが予想される。

他に、「学校」で受けたという回答率が高いのは「体罰」「いじめ」「噂」、「近所の人」からは「噂」「プライバシーを侵害」、「友人・知人」からは「噂」「いじめ」「インターネット」がそれぞれ高い率であげられている。

#### 「人権を侵害された時の対応」(問10 p36 参照)

それでは、人権を侵害された場合に、経験した人はどのような形で対応しているのだろうか。問10は、問8で「ある」と答えた人に12の選択肢を用意してたずねている。その結果(図表2-4)、「友人・同僚・上司など身近な人に相談した」(38.6%)、「家族・親類に相談した」(31.0%)の2つが主たる対応策であり、「何もしなかった」との回答が4分の1であった。

対処法について性別の集計結果(図表2-4-1)からは、身近な人、家族・親類に相談した人が女性に多いこと、逆に「何もしなかった」とする回答が男性に多いという対照的な結果となった。男性には、相談や支援を求めるつながりをつくりにくく、悩みを一人で抱えてしまいがちな傾向があるという研究成果が蓄積されているが、今回の結果は、その表れとして考えることができる。

相談先の選択肢として多様な専門職や地域の役職、団体をあげておいたが、相談した相手として回答される率は低いものが多い。そのなかでは、「大阪府や堺市など地方自治体に相談した」人が7.1%と相対的には高い選択率となっている半面で「自治会長や民生委員に相談した」とする回答はほとんどなく、後者については身近な存在であるが故に相談相手とされにくいのかもしれない。広く市民が利用可能な区役所など公的機関での相談や問題解決のための支援が拡充されるべきだろう。また、男性が悩みを抱えてしまうという傾向を踏まえた相談先の設定と情報発信も検討すべき課題である。

#### 「身近な人について」(問11 p38 参照)

問11では差別や人権侵害を受ける可能性のある人達を選択肢にあげ、身近にいるかどうかをたずねている(図表2-5)。その結果、「家族や親類」「親しい友人」「知人」のいずれかに「いる」と答えた人の率が最も高いのが「障害のある人」(44.4%)、ほとんど同じ率で「高齢で介護を必要とする人」(43.5%)であり、「日本に住む外国籍の人」と「いじめや虐待を受けた人」がそれぞれ2割、「同和地区出身の人」13.0%、「同性愛者、両性愛者、または自分の性に違和感を感じる人」の9.6%がそれに続いている。

年齢別の結果(図表2-5-1~7)からは、「いじめや虐待」「外国籍の人」「同性愛者、両性愛者、または自分の性に違和感を感じる人」が身近にいると答えた人が若年層で多くなるという傾向がみられる。いずれも、近年になって改めて注目されている人権課題の当事者との間に実際の関係が若い世代で持たれているということを示しており、多様性を認める、他者が直面している困難について共感的に理解する姿勢、意識が広がる前提ができつつある、ということを示しているものといえるのではないだろうか。

#### (4) 同和問題について(総括の後半部分を参照)

#### (5) 女性の人権について

##### 「女性に対する人権問題についての考え方」(問23 p82 参照)

問23では、女性に対する人権問題についての10の考え方を示し、それぞれへの賛否を答えてもらった。旧来の性役割分担に対して異を唱える回答が同意する回答の何倍に当たるか、という数値の大きなものから並べてみる。

項目	倍率	賛成	反対
女性は理系の大学に行く必要はない	34.6倍	2.4%	<b>83.0%</b>
「女のくせに偉そうなことを言うな」などというのは、言葉の暴力だ	13.7倍	<b>83.4%</b>	6.1%
男性は人前で泣かない方がよいが、女性は人前で泣いてもよい	13.1倍	5.1%	<b>66.7%</b>
女性は結婚や出産により、仕事をやめがちなので採用に男性を優先してもしかたがない	5.1倍	12.6%	<b>63.7%</b>
共働き家庭で夫婦が残業しなければならない時は妻は家庭を重視し夫よりも早く帰宅した方がよい	3.4倍	15.6%	<b>53.6%</b>
昇給・昇進など、職場における男女の待遇の違いはやむをえない	3.3倍	16.8%	<b>54.7%</b>
女の子は家の手伝いをしないといけない	1.4倍	28.4%	<b>41.1%</b>
結婚したら妻は夫の姓を名乗るのが自然だ	1.2倍	31.4%	<b>38.7%</b>
女性の方が男性より育児や介護などに向いている	0.6倍	<b>42.6%</b>	25.6%
女性と男性で役割に差があるのは差別ではなく区別である場合が多い	0.4倍	<b>47.5%</b>	20.7%

これらの結果からわかつることは、まず第一に、「女性である」ことを理由に、教育や仕事の機会、昇給・昇進に男性との格差が設けられることについて、これを不当だとする考え方がすでに多数派となっている点である。「女らしさ・男らしさ」についても、旧来の規範にとらわれない意識が広がっていることがうかがえる。

一方で、育児や介護について「女性の方が向いている」とする見方が根強く、「役割に差があるのは差別ではなく区別である場合が多い」とする見方の方が優勢なままであることも浮かび上がってきた。ただし、共働き家庭で「妻は家庭を重視し夫よりも早く帰宅した方がよい」という見方に反対する声が5割を超えていたことに注目すれば、男女格差のない、職場におけるダイバーシティ&インクルージョンの推進が求められていること、それぞれの家庭や個人の事情に合わせた「合理的配慮」の提供が求められていることがうかがえる。

なお、性別でみた場合、男性と比べて低くなる傾向はあるが女性の側にも現状の役割の違いを認める意識が分け持たれている（図4-1-1～19）。ただし、年齢別にみた場合（図表4-1-2～20）には、多くの項目について旧来の男女観、役割を否定する回答の比率が若い世代で高くなっていることも重要な変化であり、今後時間の経過とともにそうした意識の持ち主がさらに多くなっていくことが予想される。

さらに、「夫婦別姓」を認めるかどうかが社会的に注目を集めているが、「結婚したら妻は夫の姓を名乗るのが自然だ」に反対する意見の方が多くなっている。20歳代以下ではすでに過半数を超え、夫の姓を名乗ることが自然だとする意見は2割に満たないことを付記しておく。

### 「性別によって差をつけられた経験」（問24 p93参照）

問24では、「あなたは、過去5年ほどの間に、性別によって役割を決められたり待遇に差をつけられたりした経験はありますか。もしそのような経験があれば、どのような内容であったか、覚えている範囲で記入してください」とたずね、空欄のなかに自由に記述してもらった。「特になし」といったものを除外し、何らかの経験について記されたものが64例あり、内容別に集計した結果を図表4-2に、年代別に集計した結果を図表4-2-1に、具体的な記述内容の一覧を94～95ページに示した。

以下、記されたメッセージから読み取るべきポイントを整理していく。

#### ○職場での性役割の押し付けと不利な待遇

男性の記入は12例で、大半は女性からのものである。ここでは女性の記述を整理していくが、その半分以上を占める34例が職場、仕事での経験に関わる記述であった。「お茶を出す、電話対応をする、掃除をする、同じ職場でも女性・男性の役割が自然に決まっていること」（20歳代・女性）など、職場のなかで女性にだけお茶くみ、掃除等の「雑用・庶務」や電話対応が割り当てられるなどを記したもののが合わせて10例みられた。「（昼休みのご飯の準備や片付けは女性だけ当番であるなど）男女の差別や偏見は昭和のまま」（40歳代・女性）という職場の状況は、20歳代という若い人にも経験されている。

給与、待遇、昇進面の格差や発言に耳を傾けてもらえないなど不利な扱いについての記述は11例あり、「女性なので管理職につけない」（40歳代・女性）、「職場で同期は昇級、昇進がはやい」（40歳代・女性）

などの記述がある。「定年退職した後、再雇用してもらえなかつた。男性は再雇用で働いている」(60歳代・女性)など、不利な処遇は定年後にも続いているという。

出産・育児を理由とした退職については3例あり、そのうち40・50歳代の女性は「退職を迫られた」と記し、30歳代の女性は「出産・育児で退職したこと。その後、仕事を再開するのが難しいこと」と記している。「女性は出産するから、と採用をためらう会社があった」(30歳代・女性)と採用時点での不利についての記述の他、職場に産休・育休の制度はあっても「マイナスイメージ」があるという記述もみられた(30歳代・女性)。

#### ○家庭・親類内での性役割の押し付けと差別

家庭・親類内での経験を記したものは17例ある。

そのうちの10例が、「家事はほとんど女」(30歳代・女性)、「育児は母親がすべきと世間の目がある気がする」(30歳代・女性)など家事・育児を女性だけが担う状況について記している。また、夫、父親が家事・育児をしないことについても触れられるが、「男性が家で育児をしていると“すごい”“いい人ね”と言われ嫌な気持ちになった」、「育メンなどと取り上げられることに不満を感じる」という記述はともに20歳代の女性である。男性の参加に対して社会から高評価がなされるが、それはごく限定的なものであり、女性にとっては逃れられない役割としてあるという現実からのいら立ちの表明であろう。

「(家事は女性がやるのが)あたりまえという考えの中で育ったので・・・自分がするものだと今でも思っているのでよくわからないです」(40歳代・女性)、「(田舎で育った母にとって)女性は家事をし、男性におしゃくをつぎ、お風呂も一番最後というのが当たり前です。そんな中で母は育っているため、女性は何事も我慢し男性をたてなければならないと言います。(娘である自分は)兄弟の中では優先順位が低いです」(20歳代・女性)という記述からは、旧来の性役割分担が当然とされたなかで育ったことでそうした考え方を内面化し、自分の子どももそのように育ててしまうという構造があることを読み取ることができる。先の問23について、若い世代の女性にも旧来の性役割分担に賛成する意識があることを指摘したが、家庭の中での生育経験やドラマ・CM、その他マスコミ等で示してきた家族の姿から引き継がれるメカニズムが存在することがわかる。

「夫から仕事と家事ができて当たり前と言われ、こなしていたが身体をこわした」(40歳代・女性)という記述からは、男女雇用機会均等が推進されるようになって以来、常に指摘され続けてきた「〈男は仕事、女は家庭〉から〈男は仕事、女は家庭も仕事も〉へ」という、女性にさらなる負担を強いている状況が浮かび上がる。また、「妻、母親という立場を、さげすまれ、虐げられてハラスメントを受けた」という50歳代の女性は、少額の生活費しか渡されず、外出を禁じられ、子どもの前で罵られたという経験を記しているが、それは典型的なDV(ドメスティック・バイオレンス)の例である。DVには、身体的な暴力のみならず、精神的・心理的DV、そして経済的DVが含まれる。

「家族間、親類同士の付き合いにおいて男女の差別は残っている。介護、法事等で経験あり」(70歳代・女性)と親類関係についての指摘があるが、「田舎での法事等での立ち振る舞い」(30歳代・女性)、「嫁ぎ先で旦那がミスを犯すと“嫁がちゃんとしていないから”となぜか嫁のせいになる」(30歳代・女性)などからは、比較的若い世代においても同様の状況が続いていることがわかる。

また、「夫の姓を選ばされたこと」を記しているのは30歳代の女性である。

#### ○自由記述に記された女性の生きづらさについて

職場と家庭・親類づきあいでの経験の他、地域社会でも裏方、サポート役として女性が役割を担っている状況が記されている。「町会等の集まりの時、お茶を入れたり、配ったり、洗ったりは、絶対に女がしているのはおかしい」(60歳代・女性)、「学校のPTAでも、女性は副であるのが多かった。お茶くみは女性の仕事だと思われていた」(60歳代・女性)という記述がそれであり、場面についての限定はないが、「女だと、ここっていう時になめられたりする」、「女性だから見下されたことがある」(ともに30歳代・

女性) といった経験が記されている。さらに「ホームヘルパーの仕事をしている時、男性ヘルパーには暴力はしないが、女性ヘルパーに(介助対象者からの)暴力行為があり退職した経験あり」(50歳代・女性)との記載例もみられた。

それでは、ここに記された経験と思いつから読み取るべきポイントは何だろうか。

先の問23で、女性は家事・育児に向いている、差別ではなくて区別だ、とする意識が半数近い率で分け持たれていることが明らかになった。そして、女性の側だけにそうした役割が課せられている現実と、それを負担、理不尽な制約と受け止める女性の切実な思いが見えてくる。

さらに、男性と同様に教育を受け仕事をすることは認められても、実際の職場では家のなかでの「家事」に当たる仕事が割り振られ、給与や昇進で差をつけられ、結婚や出産に際して退職を強いられる、余儀なくされるという現実がいまだに続いていることが記されている。

問9では、職場や家庭で人権侵害を経験していることを示したが、女性については性役割の構造がその背景にあることが指摘できる。

こうした現実に、男性はどれだけ気づいているだろうか。実は、12例ある男性側の記入のうち「男性であるがゆえに力仕事などは任されることが多い」(50歳代・男性)など、男性ゆえに「力仕事や責任のある仕事」を任されることを嘆くものが数例みられた。その背後には、旧来の性役割構造が男性の側に強い負担、重圧もあるはずで、その改善を考えられるべきである。しかし同時に、職場や家庭でともに働き暮らしている同僚、パートナーの苦しみを理解しようとする姿勢がどれほどあったのかを男性が自ら問い合わせることも必要だろう。なお、今回の男性からの記載のなかにも、「女性が働きにくい環境が多く残っている。考えが古い」と現状を批判するものが2例みられた。

5年前の人権意識調査でも同様の自由記述欄をもうけているが、ここで紹介したものと重なる、苦しみや叫びのような書き込みが多数記されていた。女性が置かれた状況は変わっていないという実態を踏まえ、市の人権施策、啓発活動でも力を注ぐべきテーマであり続けているのである。

## (6) 子どもの人権について

### 「子どもに対する人権問題についての考え方」(問25 p96参照)

問25では、いじめや体罰、プライバシーなどをテーマに子どもの人権にかかわる考え方をあげ、賛否を問うている。6つの項目すべてで、反対とする回答が多数となった。その率の高いものから並べたものが以下である。

項目	賛成	反対
子どもは、大人になるまで家庭や学校の決まりごとに口をだすべきではない	5.2%	<b>69.4%</b>
子どものメールや手紙などを勝手に見てもよい	14.3%	<b>57.6%</b>
競争の激しい社会だから、遊びの時間を削ってでも塾や習い事に行かせるのはやむを得ない	13.9%	<b>52.6%</b>
教師が子どもを指導するために、ときには体罰を加えることも必要だ	24.9%	<b>46.5%</b>
いじめはいじめを受ける子どもにも問題がある	17.4%	<b>46.5%</b>
保護者が子どものしつけのために体罰を加えるのはしかたがない	26.7%	<b>40.4%</b>

この結果からは、子どもが自分に関わることに発言権を持つべき、親であっても子どものプライバシーを尊重すべき、現在の子どもの生活の充実が優先されるべきであるという、子どもの権利についての理解が広まっていることがわかる。

しかし、「教師が指導するために」、「保護者がしつけのために」体罰を加えることについて「必要だ」「しかたがない」という考え方については反対する回答が4割から5割弱にとどまり、賛成する回答と「どちらともいえない」がほぼ同じ率で分かれる回答となった。「保護者の体罰」については「教師の体罰」よりも容認する回答がわずかに多くなっている。

これを年齢別にみると（図表5-1-1～6）、「学校・家庭での体罰」「メールや手紙を見る」「決まりごとに口をだす」など自分自身が権利を侵害、制約されていることを実感する若い年代で反対する回答が多くなる傾向がみられるが、子どもの権利を制限する考え方への賛成を示す意識が多くの年代で一定数抱かれていることがわかる。

特に、教師や保護者による体罰について「必要だ、しかたがない」という考え方を否定しない、積極的消極的に容認する意識が5、6割を占め、なかでも小さな子どもを育てている時期にあたる30歳代で、保護者によるしつけのための体罰を容認する回答が最多となり、反対する回答が最少という結果は重要である。児童虐待の通報件数は増加しているが、いまなお「しつけの範囲内だ」とみなす意識の広がりが子どもの苦難を放置することにつながっていることに留意しなければならない。また、子育て中の保護者にとっては子育てを手助けしてくれる資源（夫、親族、近隣のネットワーク）が乏しいなかで「しかたがない」ものとみなされているという背景もあるのかもしれない。

いずれにせよ、理解が広がりつつあるとはいえ、子どもの人権についての大人の側の認識の深まり、広がりが求められることが明らかとなった。

## （7）障害者の人権について

### ○「障害者に対する人権問題についての考え方」（問26 図表6-1）

問26では、障害者的人権についての6つの考えを示し賛否を訪ねている。以下の表に、賛否いずれかの回答率の高いものから並べて示した。

項目	賛成	反対
レジャー施設等の管理者が、「安全の確保」を理由に、耳の不自由な人の利用には「聞こえる人の付き添い」を条件とすることは「差別」にあたる	8.8%	<b>61.9%</b>
企業は利益が第一なので、障害者の雇用が進まなくてもしかたがない	12.9%	<b>53.7%</b>
多動の子どもは、じっとしていることができるようしつけなければならない	12.4%	<b>52.4%</b>
障害者への配慮は、多数の障害者に共通するバリアを取り除くための配慮をすればよく、障害者一人ひとりの配慮の申し出に応じることは、やり過ぎだと思う	13.2%	<b>46.9%</b>
精神に障害のある人に対しては、なんとなくこわいというイメージがあり、不安を感じる	<b>41.8%</b>	25.5%
障害者関連施設を建てる場合、周辺住民に同意を求めるなくてよい	21.6%	<b>41.3%</b>

障害者への配慮は、多数の障害者に共通するバリアを取り除くための配慮をすればよく、1人ひとりの配慮の申し出に応じることはやり過ぎだ、との考えには反対、つまり「やり過ぎではない」という回答が半数近くあり、共通のバリアのみ考慮すればよいとする意見は1割強であった。多数の障害者に共通する社会的バリアの解消は大切であるが、障害者差別解消法は、差別解消のために、障害者一人ひとりに対して合理的配慮の提供を求めており、こうした理解が広がりつつあることがうかがえる。また、「企業は利益が第一なので、障害者の雇用が進まなくてもしかたがない」ことに対し反対意見が半数を超えていている。ここからは、民間企業に対し障害者の雇用を義務付けていることについての理解が広がっていることが読み取れる。

他方、安全の確保が理由であれば、利用を制約する、特別な条件を課すという対応もやむをえないとの考えは、なお根強いものとして残っている。たとえば、レジャー施設の管理者が、事故の危険・安全確保を理由にして、耳の不自由な人の利用には「聞こえる人の付き添い」を条件とすることについては、回答者の多くが差別にあたらぬとしている。「安全のために」と「善意」のもとに回答された場合が多いのではないだろうか。しかし、それは障害のない利用者には求められない特別な条件を課すことで障害のある市民の利用を阻むという権利の侵害であり、こうした状況を解消すべき差別と捉えて「筆談や読み上げ、手話通訳」など問26の下欄に例示された合理的配慮がなされているのである。こうした取り組みや背後ある考え方方が広く知られることが、課題として提起されているといえよう。

「精神に障害のある人」への「こわいというイメージ」があり不安だとする回答が4割という結果については、精神に障害のある人による重大犯罪がインターネットやマスコミ等によって取り上げられることが影響しているものと思われる。精神障害者は危険であるとの憶測・固定観念から、社会防衛的な発想をもって社会から排除・隔離することは、明確な人権侵害にあたるものである。

また、「障害者関連施設を建てる場合、周辺住民に同意を求めなくてよい」については、反対が賛成を上回っている。こうした意見が、ただちに障害者関連施設を建てるには反対する立場の表明とはいえないが、障害者関連施設の建設に対する住民の反対運動などの「施設コンフリクト」は、地域社会から障害者を排除しようというものであり、障害者が地域で普通に暮らす権利を侵害するものという意識が薄いことを意味している。

最後に、「多動の子ども」を抑えつけることに反対の意見が多いことは評価できる。身近なところで、ADHD（多動性症候群）の子どもについての情報にふれる機会が増え、市民の適切な理解が広がっていることがうかがえる回答となっている。

障害のある人たちは私たちと同じ尊厳と権利をもった市民であり、地域に住まい、働き、周囲の人たちと関わり、様々なサービスを利用して充実した生活を送ろうとしていることを、さらに、障害のある人が経験する生きづらさは無理解や偏見を含む社会環境のバリアに原因があり、それを取り除いていくための取り組みが広がりつつあることを、広く市民が学ぶ機会が提供されるべきである。

#### （8）高齢者の人権について

##### ○「高齢者に対する人権問題についての考え方」（問27 図表7-1）

問27では、高齢者的人権問題に関する考え方を示して賛否をたずねている。以下の表は、賛成反対いずれかの回答率が高いものから並べたものである。

項目	賛成	反対
福祉施設などの職員が高齢者に暴言を浴びせたり、無視するのは高齢者にも問題がある	11.0%	<b>59.7%</b>
高齢者が一人暮らしを理由に、アパートやマンションなどへの入居を拒まれてもしかたがない	14.6%	<b>50.9%</b>
判断能力が下がっている高齢者の行動を、家族が制限してもしかたがない	<b>50.7%</b>	16.4%
悪質商法や詐欺などによる被害が多いのは、高齢者の注意が足りないからだ	25.5%	<b>49.9%</b>
障害のある高齢者は、危ないのでなるべく出歩かない方がよい	23.9%	<b>37.7%</b>
高齢者が働く場が少ないのはしかたがない	34.0%	<b>35.5%</b>

サービスを受ける立場であっても人間らしい扱いがなされるべきであり、一人暮らしであっても部屋を借りる権利があるといった、高齢者の権利が守られるべきだとする意見が多数となっている。

年齢別でみると（図表7-1-1～6）、「障害のある高齢者は、危ないのでなるべく出歩かない方がよい」という考えに70歳代で同意しないとする回答が43.7%という結果が注目される。たとえ障害があったとしても、必要なサポートを得て外出する権利を持っている、という当事者の声だと解釈すべきだろう。また、「詐欺被害が多いのは、高齢者の注意が足りないから」では70歳代、80歳以上で賛成する回答が高くなる傾向がある。

##### ○「高齢者が安心して暮らせる社会についての考え方」（問28 図表7-2）

「あなたが高齢者になったときに、安心して暮らせる社会はどのような社会だと思いますか」（高齢者には今の状況について答えてもらった）とたずねた問28については（図表7-2）、経済面の保障、福祉面のサービスが十分であることが必要だとする回答が多い。これを年齢別にみると（図表7-2-1）、若い世代では経済的保障が必要だとする声が最も高いのに対して高齢になるほど保険、医療、福祉サービスへのニーズが高まり、さらに70歳代、80歳以上になると「家族や親族と一緒に暮らす」「親しい友達や知

り合いが周りにいる」という関係面の要望が相対的なウェイトを増している。この結果からは、高齢者向けの福祉サービスだけでなく地域づくりや社会教育面での働きかけの充実が必要であることが導き出せる。

#### (9) 日本に住む外国籍住民の人権について

##### ○「外国籍住民への差別についての考え方」(問 29 図表 8-1)

関西圏でも外国人の姿を目にすることが珍しくなっており、職場や地域で外国籍住民とのような関係を形成するのかが大きな課題となりつつある。問 29 では外国籍住民の人権についての考え方をたずねた。以下の表には賛否いずれかの回答率が高い項目から並べたものを示している。

項目	賛成	反対
自分の地域に住んでいる外国人とはかかわりをもちたくない、または住んでほしくない	5.5%	<b>64.0%</b>
働いている外国人に、雇用者が、職場で通称名(日本名)を使うように求めるのはしかたがない	6.6%	<b>63.3%</b>
就職活動や職務内容、待遇面で不利な扱いを受けてもしかたがない	11.9%	<b>56.7%</b>
多文化共生の社会をめざすのがよい	<b>48.6%</b>	10.3%
家主が部屋を貸すのを拒否しても、家主の自由だと思う	<b>44.6%</b>	20.7%
結婚に対して、相手の周囲が反対するのもしかたがない	20.1%	<b>38.2%</b>
日本の生活習慣、しきたりや習慣に従わせるべきだ	29.2%	<b>33.5%</b>
選挙権がないのは問題だ	<b>32.5%</b>	26.7%

自分の住む地域に外国人が住むことをいやがる、外国籍住民とはかかわりをもちたくないとする意見に対しては反対が 64%と多数を占め、同意する回答は 5.5%にとどまる。雇用者が外国人の従業員に通称名(日本名)の使用を求めるときに反対する回答が 6 割、「多文化共生の社会をめざすのがよい」については賛成が半数近く、反対する回答は 1 割となった。仕事の面での不利な扱いについても容認する回答は 11.9%にとどまり反対する回答が 56.7%となった。これらの結果から、外国人が日本社会で暮らし働くことについて受け入れる姿勢、意見が多数派となっていることがわかる。

「多文化共生」を良しとし労働者として外国人が日本国内にいることを認める考え方が多数派となっているわけだが、他の項目の結果からは、外国人を共に生きる人間としてどこまで認めようとしているのか、という点で課題が残っていることがわかる。

まず、外国人住民の選挙権については賛否と「どちらともいえない」がそれぞれ 3 割ずつに分かれる結果となった。居住する権利については、「部屋を貸すのを拒否する」ことを家主の自由として認める回答が 44.6% (反対する回答は 2 割)、「日本の習慣やしきたりに従わせるべき」(29.2%)、「結婚に対して、相手の周囲が反対するのもしかたがない」(20.1%) といった結果は、外国人に対する権利の制限、不利益、差別を認め日本社会・文化への同化を求める意識が根強く残っていることを物語っている。

年代別にみると (図表 8-1-1~8)、「家主が拒否するのは自由」とする回答を除いて、年齢が低いほど多文化共生社会に賛成し多様性と権利を認める回答が増える傾向にあることも確認され、こうした方向への意識の変化が徐々に拡大していくことが予想される。

##### ○「戦前の植民地政策についての認知状況」(問 30 図表 8-2)

外国人住民との共生が課題としてクローズアップされたのは近年になってからであるが、100 年以上も前に朝鮮半島から日本に移り住み、生活を続けている人々がいる。問 30 では、「戦前、日本が朝鮮半島などにおいて植民地政策をしていたことを知っていますか」とたずねた。その回答は、「よく知っている」が 2 割、「少しあは知っている」が 5 割、「ほとんど・まったく知らない」を合わせた回答が 4 分の 1 という結果であり、年齢別で見ても (図表 8-2-1) 年代間で大きな差はない。若年層にとっては一世紀も前の時代の出来事であり、それにもかかわらず若い世代にもある程度の認知がなされていると評価するこ

とができるだろうか。

植民地支配を受けた韓国では、今日なお「慰安婦問題」「徴用工問題」が大きな関心を集めている。過去において植民地支配の当事国であり、今後も隣国の国民同士として交流を続けていく日本の側でも歴史を学び続けることが必要である。その際、「知っている」と回答した人たちがどのような内容、情報をもとにそう回答したのかについても留意する必要がある。それは、次の問で扱うヘイトスピーチについて、少数ではあるが「正しいことを言っている場合もある」と理解を示す回答が寄せられていることを受けての課題である。

#### ○「ヘイトスピーチについての考え方」(問31 図表8-3)

在日韓国・朝鮮人だけでなく、日本国内で差別を受けているマイノリティの人たちをもターゲットとした攻撃的・差別的な言動を公の場で激しく発する行動が社会的な注目を集めている。問31はこのヘイトスピーチに関わる質問である。

その回答は、「不愉快で許せないと思う」が36.1%、「日本に対する印象が悪くなると思う」(25.5%)という理由でヘイトスピーチに反対する回答が多くみられた。その一方で、「表現の自由」の範囲内のものだと思う」9.5%、「自分には関係がない」7.9%という回答は、「表現の自由」や「関係ない・他人事」という理由で容認する見解であり、それぞれ1割弱となっている。さらに4.1%と高くはない率であるとはいえる「ヘイトスピーチをされる側に問題がある」を選択する回答がみられた。

この質問は、平成29年12月に内閣府が実施した「人権擁護に関する世論調査」と同じ内容の項目でたずねたものであり、回答の傾向はおおむね同様であった(ヘイトスピーチについての説明文や回答の形式は異なっている)。しかし、用意した選択肢でヘイトスピーチについての市民の受け止めを十分捉えられているのかについては再考が求められる。

選択肢の一つに「その他」を用意し、そこには空欄のカッコを設けて考えを書き込んでもらえるようになっていたが、その記述のなかには「人の命を脅かす行為で、許されないと思う」、「印象が悪くなるとか、不愉快になる等の理由ではなく、ヘイトスピーチはよくない」という指摘がみられた。「帰れ」「日本から出て行け」という叫びに加えて「死ね」という言葉までもがマイクを通して発せられ、子どもたちが通う学校の前でも繰り返されるという行動は、まさに対象とされた人々の生命と存在を脅かし人権を踏みにじるものであり、それに対して「許されるものではない」という選択肢が独立して用意されるべきであった。また、「知らなかった」「周りにないのでわからない」という記述もみられることから、そもそもヘイトスピーチについて広く知られていない、知っていたとしても断片的なニュース報道程度で、どのような場でいかなる言葉が用いられているのかについての知識が共有されていないという点も重要だろう。「表現の自由」として認める回答も、ヘイトスピーチの内容が理解されたならば、それが「表現の自由」のうちに含めて考えてよいものなのか再考を促されることになるのではないだろうか。

さらに、「その他」の欄には「相手側が悪い場合はされても仕方ない」「正しいことを言っている場合もある、内容による」「一理ある場合もある」といった記述がみられ、それらは選択肢のうちの「ヘイトスピーチをされる側に問題があると思う」という回答と重なるものである。ここでいう「される側の問題」「悪い場合」「正しいこと」がどのような内容を指しているのかについての把握と必要な情報発信が必要である。

#### (10) さまざまな人権について

#### ○「インターネットについての考え方」(問32 p119参照)

問32では、多くの市民にとって日常生活のなかでなくてはならない情報入手、発信の手段となっているインターネットについて、いくつかの考え方を示して賛否をたずねた。以下の表は、賛成する回答率

の高いものから項目を並べたものである。

項目	そう思う	そう思わない
知り得た個人情報を、本人の同意を得ずに流すのは許されない	<b>84.9%</b>	1.5%
友人が写った写真を掲載するときは、友人の承諾を得る必要がある	<b>80.6%</b>	2.0%
自分がインターネットやテレビなどで情報を得たときには、その情報だけで判断しないようにしている	<b>72.3%</b>	1.9%
差別を扇動する書き込みを行った者を処罰する法整備が必要	<b>69.4%</b>	4.3%
ネット上の差別的書き込みを行政が把握し、行政が情報停止・削除を求めるべき	<b>68.6%</b>	5.8%
ネット上の誹謗中傷を規制したり、書いた人を特定・公開することは、政治・社会批判の意見を封じ込める可能性があり、危険だ	27.5%	<b>29.7%</b>
表現の自由に関わる問題なので、安易に情報の規制は行うべきではない	20.6%	<b>31.9%</b>

この結果から、まず、個人に関わる情報、写真などをインターネットにアップする際は本人の同意が必要だ、という認識が大半の人に共有されていることがわかる。また、自分が得た情報について鵜呑みにしてはいけない、差別を扇動する者に対して法による処罰を求める、行政によるチェックと措置が必要だ、という意見にも7割の同意が得られている。これらは、インターネットが有する危険性についての認識が広がっていることを示すものだろう。

同時に、誹謗中傷の規制や発信者の特定・公開などの対抗策が政治や社会への批判を封じ込める可能性がある、表現の自由を侵す危険性があることを指摘する意見については、賛否がそれぞれ3割ほどで分かれ、「どちらともいえない」とともに3分される結果となった。人権を脅かす情報の抑止が同時に健全な社会の維持にとって不可欠な自由を脅かす危険性を孕むという、判断することが非常に困難な問題ではあるが、今後広く議論がなされることが求められる。それと同時に、次に触れる問33も含めて、インターネットを通した人権侵害が実際に広がっているという現実が今回の調査でもいくつかの質問的回答から明らかになっており、その救済策や予防策の整備が急がれる課題であることは言うまでもない。

年齢別の結果からは（図表9-1-1～7）、「友人が写った写真を掲載する」際に本人の承認が必要だとする意見への同意が若い年代で減る傾向が注目される。日常的に行っていることで自制することは煩わしいという意識の表れなのかもしれない。「その情報だけで判断しないようにしている」についても、肯定率が高いとはいえる「そう思う」と肯定する回答をしない若年層が2割いるという点も気になる。利用が頻繁で、被害者となるだけでなく加害者となってしまう可能性も高い、さらに新聞やTVでニュースに接することが少なくなっている若い世代に対して、学校教育において、さらにはインターネットを通じた経路も活用して、メディア・リテラシーの重要性が繰り返し伝えられることが不可欠の課題である。

### ○「インターネット上の誹謗中傷などを助長・誘発する書き込みを目にした経験」（問33 p124参照）

インターネット上で誹謗中傷や差別を助長・誘発する書き込みを見た経験の有無とその内容について問33でたずねた。その結果、「日本に住む外国籍住民に関すること」15.0%、「障害者に関すること」13.8%、「性的指向や性自認に関すること」11.6%と続き、「同和地区や同和地区出身者に関すること」については7.9%の回答者が「見たことがある」と答えている。さらに、友人、知人、教師など「身近な人」に関する誹謗中傷を目にしたという回答が4.5%という結果も注目すべきだろう。

なお、「その他」という回答が15.6%を占めているが、その隣に具体的な内容を書き込んでもらうために用意したカッコのなかには「インターネットをしない（のでわからない）」という記述が30例ほど、「なし（ありません）」という記入が70例ほど、「見たことがない、見ないようにしている」などが20例ほど見られた。ここでいう「なし」や「見たことがない」についてインターネット環境や使用がないことを意味するのか、誹謗中傷や差別に関わる書き込みを見たことがないのかについて判別することはで

きないし、30例ほどはカッコ内に記入がない。これらのことから、「その他」と回答した15.6%のうち、他の選択肢で用意した対象ではない何者かへの誹謗中傷や差別を目にした、というケースは少数であると考えることができる。

ただし、「その他」のカッコ内の記載内容からは、ネット上で発信される誹謗中傷の書き込みの内容を捉える手掛かりにすることができる。その記載内容は、「芸能人・有名人（に関わること、私生活を暴く内容）」といった記入が14例、「外国籍住民」「在日韓国人」「芸能人が韓国人だと暴露するもの」「生活保護受給者に対する事」「容姿についての差別」「職業についての差別」「政治的意見の相違による差別的書き込み」「野党政治家」などであった。

図表9-2で示された「誹謗中傷・差別の書き込み」を目にした経験の実態に戻ろう。無回答と「その他」のうち大半を占めると予想される「経験なし」という回答を合わせると、全体の7割弱が経験していない、逆にいうと3割以上の市民がネット上で誹謗中傷や差別につながる書き込みを見ているという状況が浮かび上がってくる。

なお、インターネットの利用率が年齢で大きく異なるため、こうした経験の有無についても年齢ごとに大きな違いがみられる（図表9-2-1）。若い世代では経験率が各項目で高くなっている、特に「身近な人」に関する書き込みを見たことがあるとする回答が2割近くにのぼっていることは注目すべき結果である。

ところで、この問33では、「誹謗中傷や差別を助長・誘発する書き込みを見たこと」があるかどうかをたずね、それに対する回答について整理してきた。しかしながら、あるメッセージが「誹謗中傷や差別を助長・誘発する」ものであったとしても、そう認識できていないケースも相当数あるのではないだろうか。こうしたメッセージが、「正しい」「一理ある」「普通」の情報として発信され受け取られている実態が広がっている可能性についても留意する必要があるだろう。この問題については、メディア・リテラシーについてだけでなく、出会ったことのない誰かについて、そして「身近な人」も含め、他者の存在とその人たちが被る痛みや苦難についての想像力や共感力を喚起する働きかけが求められる。

また、「同和地区や同和地区出身者に関する」書き込みを見た経験は40歳代で14.7%と最も高くなっています、20歳代未満の5.7%から徐々に高くなっていく。この結果をどう解釈できるだろうか。これについては、総括の後半部分で同和地区問題を中心に分析を行っており、そこであらためて検討されることになる。同和地区問題を知らない、教えられた自覚がないままに成長した若者たちが、その後にネット上で同和地区問題について初めて目にする、知るという傾向がこうした数値にも現れていると読み取れるのではないかだろうか。

同和地区を含め、さまざまな差別問題、人権課題に関わる情報に、「差別を助長・誘発する」形で出会う、接するという経験が無視できない規模になっているという現実に、教育・啓発を進める立場からの現状把握と対策が急ぎ求められている。

### ○ 「性的指向や性自認についての考え方」（問34 p126参照）

近年、性的指向や性自認を理由とした差別や権利の制約について注目されつつあり、堺市でもお互いを人生のパートナーとし、日常生活において相互に協力し合うことを宣誓した方に市が宣誓書受領証を交付する「堺市パートナーシップ宣誓制度」を2019年4月1日より導入している。

項目	賛成	反対
どの性別の人を好きになるかは個人の自由であり、社会で受け入れられるべき	<b>67.2%</b>	6.2%
同僚に同性愛者や性同一性障害の人がいる職場では働きたくない	7.2%	<b>65.0%</b>
パートナーシップの宣誓をした人は、行政サービス利用の際、家族と同様の扱いを受けるべき	<b>63.8%</b>	5.1%
自分の子どもが同性愛者であっても力になる	<b>53.1%</b>	8.1%
同性同士の結婚も認められるべき	<b>49.5%</b>	15.5%
企業は社員の同性パートナーも配偶者として処遇すべき	<b>46.4%</b>	9.0%

今回の調査では問 34 でこの人権課題について取り上げている。表は、LGBTQ+の人々の存在や権利について認める立場の回答が多いものから並べたものである。

結果をみると、すべての項目で LGBTQ+の人々の存在や権利を認める回答が認めないとする回答を大きく上回っている。自身の家族のなかにいたらどう考えるか、また結婚制度についての判断では賛成する数値はやや低くなるが、全般的に理解が広まっているといえる結果である。

なお、年齢別の集計（図表 9-3-1～6）からは、こうした意識が若い年代でより高まるという明確な傾向が確認される。

### ○「さまざまな人権問題についての考え方」（問 35 p130 参照）

問 35 では、これまでの質問でとりあげたもの以外のさまざまな人権問題についての考え方を問うている。以下の表は、賛否いずれかの回答率の高い項目から並べたものである。

項目	そう思う	そう思わない
報道によりプライバシーが公表され、取材により私生活の平穏が保てなくなるのはしかたがない	5.8%	<b>69.2%</b>
ハンセン病元患者（回復者）の宿泊をホテルが断るのはしかたがない	6.0%	<b>61.5%</b>
HIV感染を理由に解雇されるのはしかたがない	12.3%	<b>48.3%</b>
ニートや引きこもりになることは本人の責任が大きい	<b>39.9%</b>	19.9%
ホームレスになるのは本人の責任が大きい	<b>39.7%</b>	19.7%
若者の貧困をなくすために高齢者向けの社会保障予算を振り分ける	17.2%	<b>32.0%</b>
災害発生時の救助に備え、障害者や高齢者などの住所、氏名を本人同意がなくても地域内に知らせてもよい	<b>30.4%</b>	30.3%
刑を終えて出所した人が、近所に住むことになったら、関わらないようにする	<b>35.6%</b>	14.9%

犯罪被害者が被る人権侵害が話題になっているが、こうした報道によるプライバシーの侵害と私生活への侵入に反対する回答が 7 割と多数にのぼり、ハンセン病元患者や HIV 感染者への差別扱いについても、それを許さないとする意識が 5 割から 6 割で容認する意見は少数にとどまる。

問 35 の一連の項目についての回答は、かつては気付かれなかった人権侵害、人として当然の暮らしが理不尽に制約され差別を受けてきた人たちの存在について多くの人びとが関心を向け、人権侵害や差別を許さない方向での意識が持たれるようになりつつあることを示しているといえるだろう。

しかし、「本人の責任」によるものだとみなされ差別や非難の対象とされてきた「ホームレス」や「ニート」と呼ばれる人たちについては、雇用の変化や支援体制の不備が生み出したという側面が大きいにもかかわらず、従来からの「本人責任論」が根強く抱かれていることがわかる。この傾向は年代別にみてもかわらない（図表 9-4-3、4）。

さらに年代別にみたとき特徴的な点として、「刑を終えて出所した人が近所に住む」際に警戒し関係を持とうとしないという意識が 30 歳代で最も高くなっている（図表 9-4-7）。子育て世代が安全な環境を求めていることの表れとして読み取れるだろう。更生保護についての理解を高め、体制の整備が求めら

れる。

また、「災害に備え、障害者や高齢者の住所氏名を本人同意なく地域内に知らせる」という項目については（図表 9-4-8）、高年齢層で賛成する回答率が高くなっている。地域活動の担い手にとって悩ましい問題の一つであるが、高齢者自身に容認する声が比較的多いことを踏まえて、ただし少数とはいえ拒否する意識の持ち主もいる点も考慮しつつ、それぞれの地域で対応策を進めることが必要である。行政からの指針の提示も求められる。

もう一点「若者の貧困をなくすために社会保障予算を高齢者向けから若者向けに振り分ける」という意見については、30 歳代までとそれ以上の年代で明確に分かれている（図表 9-4-5）。若者向けの社会政策が手薄な点が日本の特徴であることが研究の世界では指摘されてきたが、若者本人にも意識されつつあるということだろう。世代間の対立ではなく対話と理解を深める方向での議論が求められる。

## ○新型コロナウイルスについての考え方・SDGs（持続可能な開発目標）の認知状況・SDGs の目標に繋がっていると思う普段の行動（総括の後半部分を参照）

### （11）人権問題の啓発活動について・堺市の取り組みについて

#### 「人権についての学習の経験」（問 39 p 145 参照）

「学校で人権について学んだ経験」をたずねた問 39 への回答をみていく。「小学校で」「中学校で」「高校・高等専修学校で」「短大・大学・専門学校で」それぞれ「学んだ」という回答率が 41.8%、31.8%、14.2%、6.5% と続き、「はっきり覚えていない」という回答は 32.5% であった。

人権についての学習が学校教育のなかで行われるようになったのは同和教育が盛んに取り組まれるようになって以降である。年齢別の集計結果（図表 10-1-1）を見ると、30 歳代から 50 歳代では、小学校で 7 割前後、中学校で約 4 割が「学校で人権について学んだ」と答えており、それより上の年代と比べて高い回答率となっている。また、記憶がより鮮明であるはずの 20 歳未満の回答を見ると、それ以上の年代より「小学校で学んだ」「中学校で学んだ」がいずれも高くなっているが、それでも 71.5%、76.4% に留まっており、3 割弱が「学校で人権について学んだ」と答えていないことに留意する必要がある。

#### 「学校で学んだ人権問題の分野」（問 40 p 147 参照）

それでは、学校での人権教育で学ぶ内容はどのようなものだろうか。問 39 で「学んだ」と答えた人に對して、続く問 40 で学んだ分野をたずねた。結果は、「同和問題」が 81.0% と飛び抜けて高く、「障害者」36.3%、「女性」27.4% が続いている。他のさまざまな人権課題についても、それぞれ回答率は低いものの幅広く学校で取り上げられていることがわかる。

先に学校での人権学習について年齢による違いの大きさを指摘したが、それは時代による変化を表したものだというべきである。そして、学校で学ばれる人権問題の分野には時代による大きな変化が見て取れる。図表 10-2-1 の 50 歳代と 20 歳未満の回答結果を比べてみよう。「学校で人権問題を学んだ」50 歳代のほぼ全員が「同和問題」をあげ、「障害者」や「女性」の問題が 2, 3 割という回答であるのに対して、現代の学校で学ぶ 20 歳未満の若年層について見ると「障害者」63.6%、「女性」59.1%、「インターネット上の人権問題」54.5% と続き「同和問題」は 50.9% となっている。「子ども」「HIV 感染者等」「性的指向や性自認」「高齢者」「外国籍住民」について学習したとする率も 5 割～3 割の回答となり、現代の学校では幅広い人権分野が取り上げられていることが評価されると同時に、学んだ分野として「同和問題」をあげる率が半数にとどまるという結果は重く受け止めるべきだろう。

### 「人権に関する講演会や研修会での学習経験」(問41 p149参照)

問41では「過去5年ほどの間に、人権についての講演会や研修会などで学んだ」経験をたずねている。その結果は、「参加していない」人が62.7%、「無回答」が10.6%となり、何かの学習経験を持つ人は全体の3割ほど、ということになる。経験がある人のなかでは「市の広報紙など」12.6%、「職場での研修会」10.0%の2つが比較的多い回答であり、市府国、学校や自治会、市民団体などが主催する講演会、研修会などの参加率はおしなべて低い。学校教育以外での人権教育・啓発に接する機会は非常に限られており、職場の研修会を除けば、「市の広報紙など」を読む程度にとどまっているという実態が明らかになった。

そのうち「市の広報紙など」で学んだ人を年齢別にみると(図表10-3-1)、40歳代以上、特に高齢層で2割前後まで高まるが、逆に若い層にはほとんど読まれていないという結果となった。また、「職場での研修会」で学んだ人について年齢別にみると30~50歳代でやや多くなってはいるが、しかし2割にも満たず、さらに「職業別」でみると「公務員または教員」のうち67.6%が「職場での研修会」を経験しているが、「民間企業の正社員」では18%にとどまっている(図表10-3-2)。

広報の充実と啓発、学習機会の幅広い提供が大きな課題であることが明らかとなった。

### 「人権への理解を深めるために役立った機会や手段」(問42 p151参照)

問42では「人権について、理解を深めるために役立ったと思うもの」についてたずね、あてはまる項目すべてに○をつけてもらった。

問39の結果から、多くの人が学校で何らかの人権教育を受けていたことがわかるが、「人権について、理解を深めるために役立ったと思うもの」として「教師による講義」と答えた人が16.4%にとどまる結果であった。ただし、学校教育を受けてからの年数が短い若い年代では20歳未満で40.7%、20歳代で35.1%とそれぞれの年代のなかでは最も高い回答となっている(図表10-4-1)。いずれにせよ、先生方の人権を扱う授業への姿勢が重要であることはいうまでもない。

「差別を受けている当事者や支援団体による講演」の回答率は14.2%とそれほど高い数値とは言えないが、参加者に対して訴える力の大きな「共感型」のスタイルで学ぶ機会がより広く提供されるべきだろう。また、「参加体験型の学習」「フィールドワークや施設の見学」など参加者が自ら体験することで興味関心を喚起し考える契機となる新しい学びのスタイルの有効性が注目されているが、今回の結果ではともに5%前後とまだまだ低い率にとどまっている。社会教育だけでなく学校教育を含め堺市内での人権学習の場に積極的に取り入れられることを期待したい。

選択肢のうち最も回答が高かったのは「テレビ番組や映画」の34.5%であった。そのなかには、差別や貧困問題を扱った映画やドキュメンタリー、ニュース・報道番組、人権啓発を目的として作成された映画、バラエティ番組のコーナーや地域情報の発信を目にしてといった多様なものが含まれているだろう。市民が日常的に接している影響力の高いメディアであるという今回の結果を踏まえ、「テレビ番組や映画」で伝えられる情報のうちどのようなもの(媒体、内容)が「理解を深めるために役立った」と感じられているのかについてのさらなる把握が必要だろう。「DVDやビデオなどの映像媒体」も13.8%が「役立った」と答えている。個人で視聴したものか研修会等で接したものかはここではわからないが、これについても「テレビ番組や映画」と同様、内容にまで踏み込んだ把握が求められる。

また、「インターネットを利用した学習」が5.8%の回答率であり、若い世代では1割を超えていることも重要である(図表10-4-1)。先に問33について整理したところで指摘したことだが、インターネット上では多様なたちで人権を侵害し差別を助長する情報が流されている実態がある。それを踏まえると、この問い合わせの回答が「人権への理解を深めるために役立つ」機会となっているのか否かの実態把握の努力と、その方向での情報発信の強化が大きな意味をもつ課題である。

### 「堺市の人権に関する事業についての認知状況」（問43 p153参照）

問43では、「堺市が実施する人権に関する事業や人権に関する施設を知っていますか。また、過去5年ほどの間に参加（利用）したことがありますか」とたずねた。まず、事業についての回答について整理する。

先にみた問5で、堺市が定めた条例や取り組みについての認知度の低さが明らかになったが、ここでも同様に、「参加（利用）」は数%から1%に満たないものもあるほど低く、「知っている」者も2割から1割程度であり、大半の回答者が「知らない」と答えている。

年齢別の集計からは年齢が上がるにつれて参加、認知ともにやや高まる傾向がみられるとはいえ、最も高い「人権教育セミナー」の60歳代の参加、認知がそれぞれ5%、34%でしかなく、若年層では合わせても2割に届かないものがほとんどである（図表 10-5-1～7）。「多文化共生楽習会」等については年齢を問わず低い回答率となっている。周知の手法、参加しやすい事業の持ち方などの工夫が求められる。

ここでは特に「人権相談事業」についての回答に注目しておきたい。「知っている」という回答が27.3%、「利用したことがある」人は全体の0.4%しかいないという結果である。今回の人権意識調査の回答結果から見えてきたのは、少なくない市民が人権にかかわる問題、「生きづらさ」とも呼ぶべき経験をしているという現実であった。それに対して身近な相談の場が「人権相談ダイヤル」「各役所での人権相談」という形で設けられていることが多くの市民に知られ、利用されるよう、一層の努力が必要である。

### 「堺市の人権に関する施設についての認知状況」（問43 p158参照）

問43の最後の3項目は人権に関する市の施設をあげている。「人権ふれあいセンター」の利用が4.6%、認知が32.8%とやや高く、若年層の回答が他の年齢層と変わらないという傾向は、学校を通しての利用や周知などがなされていることの表れかもしれない。「平和と人権資料館」「舳松人権歴史館」については利用と認知を合わせても2割に届かない。市民に対して関心を喚起し利用を促す取り組みが求められる。

## （12）自由記述に記された市民の声を読み解く

### ◎自由記述欄に記された市民の思いをてがかりに

調査票の終わりのページに枠で囲った空白のスペースを置き、「最後に人権に関することで、何かご意見・ご要望がありましたらご記入ください」として自由記述欄を設けた。この欄に記入いただいたのは1,334人中の223人（16.7%）であり、回答者の一部にとどまる。さらに、記された内容は多岐にわたるもので、その内容から市民の経験と意識を数量的に捉えることはできない性質のものである。

しかしながら、自発的に、そして自身の言葉で書かれたメッセージであることから、本人が強く伝えたいと考えている内容であり、市民の意識と経験を把握するための素材として重要な手がかりとすべきものである。本論中でも、「その他」のカッコの中に書き込まれた内容からその間に関わる経験について考えるヒントとしてきたが、自由記述欄の記載内容からも、本論で扱ったそれぞれの質問から得られた知見に関わる具体的な経験例として読み取ること、また、理解を深めたり捉え直す契機とができる。

ここでは、追加分の若者対象のケースも合わせて扱っている。なお、記入のあった223人を年齢で分けると70歳代の方の記入が47人（21.1%）でやや多くなるが、これは高年齢層の回答者が多いことの表れであり、各年代別に書き込みがあった比率をみると、15%から20%でほぼ同じ割合で記入があったことがわかる。

## ◎同和問題に関する記述

自由記述欄の記載内容についての整理は5年前の調査でも行っている。その前回調査でも、そして今回も多く見られたものが、同和問題に関わる記載である。同和問題については、総括の後半部分で今回の調査結果をもとにした検討がなされるが、ここでは自由記述欄に記された内容に即して課題を整理していく。

5年前と同様に記載例が多かったものが、同和地区の住民は行政から特別な扱いを受け利益を得ておらず、差別が続く原因となっている、という内容（11例）であり、他に「教えなければ部落差別はなくなる」といういわゆる「寝た子を起こすな」という立場での記載が10例、そして「同和地区に住まず分かれて住めば差別されない」という「分散論」と呼ばれてきた考え方を記したもののが5例であった。

「分散論」と「寝た子を起こすな」の典型例としては以下のものがあげられる。

「同和地区の人々が同一の地区に住むのではなく、分散して住み、他の人々と共に暮らすことが大事だと思います。」70歳代

「部落差別は私にとって馴染みのないことであり、こうして問題を取り上げることで余計に差別意識は生まれるのではないかと思う。」20歳未満

「同和問題は触れなければよいと思う。今の若い世代はほとんど知らない。このアンケートで余計意識させられる。」20歳未満

「さわぎ立てると気にする様になる。・・・少しずつ知らない人、気にしない人がふえている。」80歳代

このうち「同和地区から出てしまえば差別されない」という考え方については、差別する側の姿勢が変わらない限り、身元調査によって同和地区にルーツがあることを暴き結婚に反対するなどの差別事例が今日なお起きていることから、その誤りを指摘できる。

それでは、あえて教えなければ自然に差別はなくなる、という見方についてはどうだろうか。今回の調査でも、そして他の自治体で行われている調査結果からも、同和問題についての知識、同和地区を否定的に捉えるメッセージを家族や友人、職場の人といった「身近な人々」から伝えられた、という率が高いことが報告されている。さらに、インターネット上で同和地区や同和地区出身者に関する「誹謗中傷や差別を助長・誘発する」書き込みを目にした人が1割弱いることが問33で明らかになった。そして同時に、学校で学んだ人権問題の分野として「同和問題」と答える率が若い年代で半数程度であるという今回の調査結果も気がかりな点である。

2016年に制定された部落差別解消推進法でも、「現在もなお部落差別が存在する」との認識のもとで教育・啓発活動の重要性を明記している。現在のこうした状況を踏まえ、同和問題、部落差別について、行政からのメッセージ、学校教育、社会教育や企業の研修の場などを通して伝えることの意義が今日さらに高まっているのである。そして、そこに組み込むべき内容として、「特別扱い」に関する根強い誤解を解くためのメッセージが不可欠であることを次の記述内容から指摘できる。

同和地区住民が特別扱いを受け、それ以外の住民が逆に差別を受けているという「逆差別」について指摘する記述の例を以下に示す。

「部落地域に対する手当てが多すぎると聞いています。それこそが差別！」20歳代

「同和出身だから差別されるのではなく、同和枠の縁故採用があつたり、家賃が安かつたり、保育園に優先的に入れたりするのが問題なのではと思います。」30歳代

「同和地区は現在優遇されすぎていて逆差別だと思う。それを正して欲しい。」50歳代

部落差別がもたらした劣悪な住環境、教育面の格差、職業の不安定性を解消する目的で同和対策特別措置法が制定され、1969年から同和対策事業が進められた。そして、大きな成果があがったとして根拠となる法律が失効した2002年をもって特別対策事業は終了している。先にあげた「逆差別」に関する記述内容は、かつて行われていた同和対策が今日なお継続しているという誤解にもとづくものであり、特に若い世代については、先に引用した「＊＊と聞いている」という記述のように、誤ったメッセージをもとにした認識からのものである。

年長世代の人にとっては、その当時に見聞きしたことがそのまま意識の中に残っているのだろう。同和対策が終了したことについて一般の住民に伝えられることはほとんどなかつたはずであり、誤解が根強く残っていることは当然の事態と言えるかもしれない。同和対策事業を進めた行政の側から、同和問題の解決が国の責務、国民的課題として位置づけられ、同和対策が進められ終了に至る一連の経緯について、加えて、差別を解決するための取り組みが現在も必要とされていることについて明確なメッセージを発信することが、現時点で求められる課題ではないだろうか。

## ◎権利主張への非難と「不当な利益」を得ている人へのバッシング

つづいて、同和問題とは別の記載内容の整理に移る。問6で「権利ばかり主張する者が増えている」、「権利より、義務を果たすことを教えるべき」という考え方を肯定する回答が多くなったことに触れたが、こうした内容の記載が7例みられた。以下はその一部である。

「人権を声高に主張し、過度な要求をする少数派が報道で目立つ。」30歳代

「権利は義務を果たした先にあるのが本来であると考えている。「働く者食うべからず」の言葉どおりなので、個人の努力で権利を勝ち取るのが第一。」30歳代

「権利を主張し、義務を果たすことをしない人が多くなっている今の時代」60歳代

今日の日本社会で、「権利ばかり主張し過度な要求をする」、「義務を果たそうとしない」人たちとは、具体的に誰を想定しているのだろうか。先に同和地区住民に対して「逆差別」だと非難する意識を持たれていることを指摘したが、それと同様の構図で、「義務を果たさず、権利を主張し、保護され利益を得ている人がいるために、自分たちが不利益を強いられている」と多様な人々が非難、攻撃の対象とされているのではないだろうか。その具体的な例と思われる記述をあげよう。

「外国人は日本からいなくなつてほしい。特に生活保護は即廃止を！！財政が厳しいなら納税者を守れ！一人親家庭優遇制度もうんざり。ピントがズレた施策は見直しを！」50歳代

「生活保護の人も自分が受診する医療費は支払ってほしい。必要な人にはきちんと保護をしてほしい。しかし何かと手当があると聞きます。税金・保険料なしで家賃補助もあるのでしたら、それらをはらうと生活保護の人と大差はないのに、優遇されている感じがある。この考えはおかしいでしょうか。よくわかりませんが普段思っている事です。」70歳代

この2人の書き込み内容を、「ヘイトスピーチと重なるものだ」、「生活保護の切り下げは福祉全般の低下につながり、かえって自分たちの生活を脅かすものだ」と非難することはたやすい。しかしながら、記された言葉からは、その背後にそうした思いを切実なかたちで抱かざるを得なくする生活の現実があることが予想できる。

ヘイトスピーチや逆差別意識の背景には、他にもいくつかの要因があるという研究が蓄積されているが、ここでは、生活の厳しさが自分と同様に困難な状況に置かれている人々に対してのバッシング、「義務を果たさず権利を主張し、優遇されている」という意識につながることを指摘しておきたい。

## ◎生活の苦しさ、直面する困難、人権侵害と当事者への共感を訴える記述

自由記述欄には、先の引用と同様に生活の厳しさについて記述したものの他、コロナ禍での経験、出産や子育てに関わる負担、ネット上での経験などさまざまな困難が記されている。

「低年金・低所得、生活保護申請したくなる状態。年金補助打切り、どのような仕組か不思議に思う。生活の為必死で働いている高齢者もお忘れなく。」70歳代

「新型コロナウイルスの影響により、差別や偏見が増えたのは明らかだ。」30歳代

「コロナ病棟ではありませんが、多くの高齢者や持病を持った患者様と関わる仕事をしています。職場の規定で生きがいであった音楽コンサート、ライブへの参加が禁止されており、友人も同業が多く、3月以降は直接会う事をしていません。・・・在宅ワークや時差出勤、フレックス出勤に非協力的な社会や、外食先でマスクも付けずに話す隣客などを見ると、自分の人生が不当に制限されたように感じます。人権問題も特定の人が不利益を被るのではなく、みんなで少しづつ努力して、変えていけたらと感じております。」20歳代

「現在妊娠初期です。体調が優れないときにマタニティマークをつけていても電車で優先座席を譲ってもらえない事がよくあります。・・・人権というほどではないかも知れませんが、子どもの数が少なくなった現代、妊婦や子供も社会的弱者、マイノリティとして社会全体で支えていくようになれば良いのにと感じます。堺市は待機児童も多いのでぜひ引き続きご支援のほどよろしくお願ひします。」20歳代

「子どもの人権を守ってほしい（0～3歳）。とくに子育て母を守ってほしい。1日中、1人で子どもをみるのはつらい。産後うつになった。今は仕事復帰し保育園に通わせリズムができてきたので少し安定しているが、待機児童問題で、満足な（良い）保育園にあづけられない。」20歳代

「最近、ネット上での誹謗中傷が多いと感じる。」20歳未満

ここで引用したものは回答者本人の経験である一方で、子ども、女性、生活保護受給者や障害者、LGBTQ+の人々、日本にいる外国人の置かれた状況を想起し、支援や権利の保障を求める声も記されている。

「このアンケートでも子どもの人権に関することが少なかった。子どもは未来の希望です。貧困からも守ってあげて欲しい。生活保護受給者へのヘイト対策も必須。国からも国民からもしめつけられているように思う。国や自治体が精神障害者を差別区別しているので国民市民が差別するように助長している（福祉において）。」50歳代

「シングルマザーへの配慮をもっと手厚くして欲しい。・・・DV被害者の対応も慎重に扱って被害を拡大させないためにしてあげて欲しい。」40歳代

「パートナーシップ宣誓制度があったことも知らなかつたのですが、とてもよい取り組みだと思った。家族と同じ法的権利を得られるようになってほしい。なるべきだと思う。」20歳未満

「技能実習制度が実質的な人身売買の様相となっている。国同士で実習生の身分を保障する抜本的なシステム変更が必要である。」50歳代

## ◎「知ることができた、考える機会になった」という声

前回、5年前の調査の自由記述欄についても報告書の総括部分を執筆するにあたってその内容を細かく検討した筆者の印象として、他者の苦難についての言及は前回にもあったはずだが、今回はより目立つようと思われる。そしてさらに印象深いことは、この調査に協力し多くの質問に答えていくなかで、これまで人権問題について意識していなかった、知らないことばかりだったことに気づき、もっと学ばないといけないと思った、考えるきっかけになった、などの記述が33例にのぼり、多様な年代の人が記していることである。

「このアンケートを通じて自分の知らないことが多いと感じた。」20歳未満

「あまり深く意識している内容ではなかったけどある程度理解しておかないといけないことだと再認識しました。」20歳代

「差別することはいけないことであると考えていますが、問い合わせてみると、本当に生活するなかで差別はしていないのか?、また、深い意識の底で「差別」「人権を守る」「自由」ということについて、整理しきれていないと考えるときがあります。ありがとうございました。よい機会を得られました!!」60歳代

問6での回答傾向から、権利主張を抑え義務の行使を優先する意識の広がりがみられると同時に、困難な状況に置かれた人々の声や権利の主張を聴こうとする意識が高まりつつあるのではないか、その背景に、自分や他者の置かれた状況、困難や不安の高まりがあるのではないか、という解釈を提示した。そうした解釈をした手がかりの一つが、ここで指摘した他者の困難な状況への共感や人権課題について知る、学ぶことへの前向きな姿勢の表明であった。

先にみたとおり、生活の苦しさは他者の人権を制約する方向に向けられてしまう危険性をはらんでいる。それを防ぐために重要なのが、より一層の教育・啓発の取り組みであろう。

## ◎教育・啓発への期待

自由記述の欄にも、教育・啓発の意義や期待について多数の声が記されている。

そのうち学校教育については21例あり、その一部を以下に示す。

「小学生ぐらいからの教育で人権問題の授業を増やして自分自身で考えて積極的に取り組む教育が必要だと思います。」  
40歳代

「私自身部落差別について小学校で初めて知りました。その時に、差別はいけないものとは教わりましたが、同時に何か恐い印象を持った記憶があります。教えるのであれば教え方をきちんとしないと新たに差別意識が生まれる様な気になります。」40歳代

「子どもの時から色々な人権問題について学ぶのは大事だと思います。小学生の時、道徳の時間に『にんげん』で部落問題について学びました。子どもの頃は、こういう問題を学ばなければ、知らないまま部落問題はなくなるのではないかと思っていましたが、大人になって差別というものはなくならない問題なのだと思うようになり、それなら正しく学んで理解すべきだと思うようになりました。まず、小学生の時から学んだ方がいいと思います。教える教師の育成も問題ですが。」60歳代

学校教育での人権教育、部落問題学習の必要性についての記述では、教える教師の育成が重要であるとの指摘もなされている。

学校外での啓発、講習等についての期待や要望については15例の記述があった。そこでは、機会が少ない、曜日などの設定で参加しやすいものにしてほしい、広報を充実してほしい、といった要望がみられた。また、企業での研修が有意義であったこと、TV番組を興味深く観ている、などの記述もある。

「このアンケートのおかげで人権に関することがこんなに沢山有るとは思ってもみなかつたです。新たに考えさせられました。仕事のため土日など講演セミナー等に参加しにくいです。平日が休みなので残念です。」50歳代

「会社に勤めていると人権問題にかかわる機会が少ないように感じる。企業向けの講習会などがたくさんあれば良いと思う。NHKの“バリバラ”を観ているととても勉強になる。」30歳代（“バリバラ”はNHKのEテレで放送されている障害や差別問題をテーマとしたバラエティ番組である。）

「堺市が人権に関する事業をたくさんやっていた事を知りませんでした。当事者でなければ能動的に情報を得ようとする

人が少ないので…私もそうです。情報番組（テレビ、ラジオ）や、ユーチューブ等 興味のない人に情報に触れてもらえるようになれば良いなと思いました。私は会社でLGBT問題について研修を受けました。学校や企業に人権問題について啓発活動を行って欲しいです。」40歳代

「私は4年前に関東から堺市に引っ越してきて、人権に関する話を聞く機会を得ました。今まで聞いた事がなかったので（同和問題等）知ることができてよかったです。堺市は転勤で住む方も多いので、私のような転入者にも人権に関するお話を聞く機会が増えれば、と思います（多分住んでいた地域により知らない人も多いと思うので）。」40歳代

「子ども達は純粋で、学校で習っても、家庭の影響は大きいものです。親世代以上の人たちへの啓発を今後も辛抱強く続けていって戴きたいものです。」70歳代

## ◎多様な他者と自身について知ること

自由記述欄には、「相手の立場になって、その人の気持ちになって考えることが大事だ」といった考え方を記したもののが7例ほどあった。そこでいう「相手」とは誰か、そして「気持ちになって」はどのようなことなのかについて考えてみたい。かつての日本社会であれば、「同じ日本人同士」だから「相手の気持ち」を理解することはそれほど難しくないことだと考えられてきたのかもしれない。しかし、今回の調査で取り上げられたさまざまな人権課題からは、知ろうとしなければ、学ぶ機会がなければ気づきにくい「立場」、困難さや切実な願いを持っている多様な人々が自分たちの周りにいることが浮かび上がってくる。障害のある人がサービス利用を阻まれている現実、高齢者が行動を制約され、子どもたちが虐待にさらされている状況、外国人の置かれた苦境、同性のパートナーと共に住むことや病院の付き添いまでも制約されているという実態があり、それに対して、当事者の活動の成果としてたとえば「パートナーシップ宣誓制度」のような改善の手立て、当然の権利を守る取り組みが進められている。今回の調査に回答することを通して「知ること」、「考えること」を促されたのは、まさにこれら多様な他者の立場、権利が制約されてきた実態と改善のための取り組みについてであったと言えるだろう。

そしてもう一点、調査に答えることがよい機会となったという別の記述を紹介する。

「職場で一部かげ口など言われた事が約10年前にあり、たいへんつらい事がありました。自分の努力不足であった事が第一ですが、このアンケートで自分も少しいじめに近い経験をしていた事に気づきました。また同和問題など様々な人権問題に無頓着であった事を実感しました。コロナが落ち着いた頃、人権問題についての講演会などあれば一度参加してみようと思います。」40歳代

これは、調査に答えるなかで、自身の経験を振り返り、人権侵害を経験したことにあらためて気づいたという内容である。人権課題に気づくことは、他者についてだけでなく、自分が置かれた状況を捉え直すことでもあることがわかる。

問24で「性別によって役割を決められたり待遇に差をつけられたりした経験」について問われた際にあらためて気づいた、ということもあっただろう。そしてさらに、そうした女性たちの経験や思いを他の女性が目にする機会があれば、共通する経験や思いが抱かれていることを知り、個人的なものと思ってきた事柄が社会のあり方に関わっているものだという認識につなぐことができる。さらに男性たちが読むことで、当然の「区別」とみなしていたことがパートナーや同僚を抑圧し苦しめてきたことに気づくということにもつながるだろう。

旧来の「性役割分担」をめぐる問題は、女性への人権侵害を引き起こす原因になっているだけでなく、男性に対する差別・偏見、そして多様な性的指向や性自認をめぐる人権侵害にも通底することを付記しておきたい。

「人権というほどではないかもしれません」 と前置きしつつ、妊娠中の女性が直面する困難や不安

について記していた。「生活の為必死で働いている」という他の記述もみられた。これらはすべて、自身の人間としての権利が脅かされている事態であり、それに気づくこと、改善のための手立てを求める実現してきた歴史があることを知る機会として、人権問題の学習機会は提供されるべきである。

多様な他者の存在、置かれた状況を知り、自身の暮らしを改めて捉え直すことの意義について、自由記述欄の記載をもとに整理してきた。最後に、同和問題と出会う、学ぶことの意義について考えたい。

「大阪に来て初めて同和問題、“同和”という事を知りました。今だに何なのか意味がわかりません。」50歳代  
「同和、同和とよく耳にはするのですが、いつの時代どうして出来たのか60代ですがはっきり知りません。一度その歴史を知りたいものです。広報でも特集して下さい。」60歳代

ここに引用した「わからない」という思いは、「知りたい」という願いに通じるものであろう。

今回の調査でも明らかになった通り、かつてと比べて縮小しているとはいえる地区住民に対する差別は続いている。特に関西では身近にある存在であり、差別の当事者となってしまう可能性もある。また、部落、同和地区の存在を通して日本の歴史を学ぶことはたいへん興味深いものとなるはずであり、さらに差別を利用して社会の仕組み、差別の中で生き差別をなくそうとする人々の取り組みとその成果について学ぶことができるという点で、人権問題、差別問題を学習する際に好適なテーマであることを付言しておきたい。

### (13) 調査結果の活用に向けて

自由記述欄には、「何の為のアンケートか分からない!!」との書き込みや、コロナ禍のなかでアンケートをするのは感染を広める危険がある、という指摘もあった。

こうした「調査の意義」についての批判や疑問は、調査の成果が見えない、活用してほしい、という思いと重なるものだろう。実際に、「この調査にかかる費用をすべて公開してください。調査結果を具体的に利用・対応しているのか知らせてください。行政の自己満足で終わらせないでください」といった記述があった。さらに、「広報などで今回のアンケートにまつわる分かりやすい冊子などを配布すれば良いと思う」という提案も記していただいた。

5年前の調査では、今回と同じように性による役割、扱いに関わる経験について自由に記述してもらう欄をもうけ、日常生活のなかで多くの困難に直面している女性たちの声が記された。その他にも多様な人権課題が明らかになり、これを市民に広く伝えることを目的として、イラストを多用し、『ともに生きる』とタイトルをつけた冊子をつくり、区役所や市内施設、研修会などを通して配布している。「堺市からの人権に関する発信が全く見えてこない。周知方法の改善が必要」という、今回自由記述欄に記された苦言も踏まえて、より多くの市民に今回の調査で見えてきた傾向や課題について伝える努力が必要である。

こうした市民へのフィードバックに加えて、調査で得られた知見を市の行政施策、日々の取り組みに活かすために、市の関連するセクションだけでなく全序的に結果の検討がなされるべきであり、教育分野については、浮かび上がった数々の課題について、学校教育、社会教育の取り組みに盛り込んでいくことが求められる。

なお、堺市の人権施策、人権教育に関わる基本計画の改定が現在進められており、今回明らかになつた現状と課題を踏まえた内容が盛り込まれるべきである。

自由記述欄には、「差別はなくならない」、「人権の問題は解決できない」という書き込みもみられた。そういう思いを抱かせる現実はある。しかし、たとえば問5に記された宣言、憲法、法律や条約、条例、制度を眺めたとき、そして、それらが人々の手によって実現する以前の状況と比べたとき、そこに大き

な前進があったことに気づくはずである。多様な他者の存在と苦しみ、そして自身の暮らしを捉え直すことで、社会と暮らしをより良いものにつくりかえていく力を私たちは持っているのだということを伝える取り組みが今こそ求められている。

## 2 同和問題について

阿久澤麻理子（大阪市立大学）

堺市による前回の意識調査（2015）の後、2016年には、差別解消三法が施行された。そのことを人権法制の進展として歓迎しつつも、特に「ヘイトスピーチ解消法」と「部落差別解消推進法」（部落差別解消の推進に関する法律）が2016年のうちに立法・施行された背景には、法を必要とする社会状況—深刻化するヘイトスピーチや、部落差別を助長・誘発する情報のインターネット上の拡散など—があつたことも振り返らねばなるまい。

一方、法には、「現在もなお部落差別が存在する」と記され、改めて国は「部落差別を解消するため、必要な教育及び啓発を行うもの」、自治体は「必要な教育及び啓発を行うよう努めるもの」と記された（第5条）。そこでここでは、法施行後の教育・啓発の課題を明らかにするという視点から、部落差別に関する設問について取り上げる。

### 1. 同和問題の認知経路と学習経験

#### 同和問題についての認知経路【Q12】

同和問題や被差別部落（同和地区）があることをどのように知ったか（同和問題の認知経路）を12の選択肢から一つ選ぶよう求めたところ、全体（対象者2500人のデータ）では「学校で教わった」が3割弱、「父母や家族から」が約2割で、学校という“公的経路”をあげた者が最も多いことになる。

但し、年齢階層別にみると（対象者3000人のデータ）、かなり差があり、学校は「50歳代」以下で多く、「父母や家族」は「60歳代」以上で多い（但し「60歳代」では「家族」と「学校」の割合が拮抗する）。言い換えると、年代が高くなると私的経路、年代が下がると公的経路が多くなる。さらに「20歳代」以下では、そもそも「同和問題を知らない」という者が、3人から4人に1人いるということになる。

なお、なぜか「学校」をあげる割合が、若い年代層の中でも、「20歳代」だけがかなり低いことも注意を引く。

表 Q12 あなたは同和問題や被差別部落（同和地区）があることを、どのようにして知りましたか。

	父 母 や 家 族 か ら	近 所 の 人 か ら	友 だ ち か ら	職 場 の 人 か ら	学 校 で 教 わ つ た	ど 講 で 演 会 ・ 研 修 会 な な	の 都 広 道 報 府 紙 県 で や 市 町 村	な テ ビ ・ 新 聞 ・ 本	イ ン タ ー ネ ッ ト で	そ の 他	覚 え て い な い	い 同 和 問 題 を 知 ら な	無 回 答
20歳未満	10.6	-	0.8	-	40.7	0.8	-	4.9	3.3	-	5.7	24.4	8.9
20歳代	17.9	-	2.0	2.6	27.8	-	-	2.0	4.6	0.7	6.0	31.1	5.3
30歳代	12.0	-	3.2	3.2	44.0	0.8	-	4.0	1.6	-	5.6	12.0	13.6
40歳代	14.7	-	2.6	1.0	49.7	1.0	0.5	1.6	1.6	1.0	5.2	4.2	16.8
50歳代	18.5	-	2.8	2.2	48.3	0.6	0.6	3.9	-	1.1	3.4	1.7	16.9
60歳代	28.9	1.3	2.5	3.8	30.8	3.8	2.5	6.9	-	0.6	3.8	1.3	13.8
70歳代	27.2	5.7	5.3	5.3	4.2	3.0	5.7	9.4	-	1.9	12.1	3.8	16.6
80歳以上	22.1	6.1	6.9	5.3	6.1	1.5	2.3	13.0	0.8	3.1	11.5	4.6	16.8
全体(2500)	20.8	2.2	3.8	3.4	28.6	1.8	2.1	6.1	0.9	1.2	7.0	7.0	15.1

※年代別比較は、3000人を対象としたデータセットをもとに算出している

また、「20歳代」以下では、「学校で教わった」とあわせて「同和問題を知らない」の割合がかなり高いから、この年代は、「学校で教わらなければ、知らない」ままという状況にある。

ところで、こうした傾向の背景を考える手がかりとして、本調査が実施された2020年の年末を基準として、年齢階層別の生年、小学校・中学校入学年、1969年（同和対策事業特別特措法施行）及び2002年（地域改善対策特定事業に係る国の財政上の特別措置に関する法律の失効）の年末時点での年齢を示した表を作成してみた。同和問題の解決のために立法された、いわゆる特措法の施行（1969）から、地対財特法の失効（2002）までの期間は、一連の特別法の下で、いわば同和教育が制度化されていた時期にあたる。そこで、この時期に義務教育期を過ごした年代は、同和問題について、学校でのまとまった学習経験があると考えられる。

この表を見ると、全員が1969年から2002年の「法期限内」に小学校に入學し、中学校を卒業している年代は、「40歳代」のみであるが、「30歳代」「50歳代」も同様の者が多くを占める。しかし、「18・19歳」は全員が法期限後に小学校に入學している。それゆえ、「20歳代」以下では、学校でも部落問題を学ぶ機会がかなり減少し、「同和問題を知らない」割合が高くなつたと考えられる。

表 年齢階層別 生年・義務教育入学年・1969年・2002年での年齢

	生年	小学校入学	中学入学	1969年	2002年
18・19歳	2001～2002	2008～2009	2014～2015	～	0歳～1歳
20歳代	1991～2000	1998～2007	2004～2013	～	2歳～11歳
30歳代	1981～1990	1988～1997	1994～2003	～	15歳～24歳
40歳代	1971～1980	1978～1987	1984～1993	～	25歳～34歳
50歳代	1961～1970	1968～1977	1974～1983	～8歳	35歳～44歳
60歳代	1951～1960	1958～1967	1964～1973	9歳～18歳	45歳～54歳
70歳～	1950以前	1957以前	1963以前	19歳～	52歳以上

（2020年末時点。早生れ考慮せず）

ちなみに、以下は、内閣府による「人権擁護に関する世論調査」（2017年10月、全国の18歳以上3000人を対象に実施。有効回答1758票）において、「部落差別等の同和問題について初めて知ったきっかけ」（認知経路）を聞いた結果と、本調査の結果を比較したものである。実施時期も異なり、選択肢にも若干の違いがあるが、内閣府調査（全国）では、「テレビ・ラジオ・新聞・本等」で知った者の割合がやや多いなどの違いがみられる。また表は省略するが、内閣府調査でも、「部落差別等の同和問題を知らない」割合は、「20歳未満」で30.2%、「20歳代」で22.7%となつた。

表Q12-2 同和問題・被差別部落の認知経路(堺市・内閣府調査の比較)

堺市2020(n=1165)													
か父 ら母 や 家 族		ら近 所の 人 か	友 だ ち か ら	ら職 場の 人 か	わ学 校で たで 教	本 T な V ど新 聞 ・	ネイ シント タ ー で	修講 会演 な会 ど で研	報市都 紙町道 で村府 の県 広や	い覚 えて い な	そ の 他	知同 ら な い 題 を	回 答 な し
20.8		2.2	3.8	3.4	28.6	6.1	0.9	1.8	2.1	7.0	1.2	7.0	15.1

内閣府2017(n=1758)

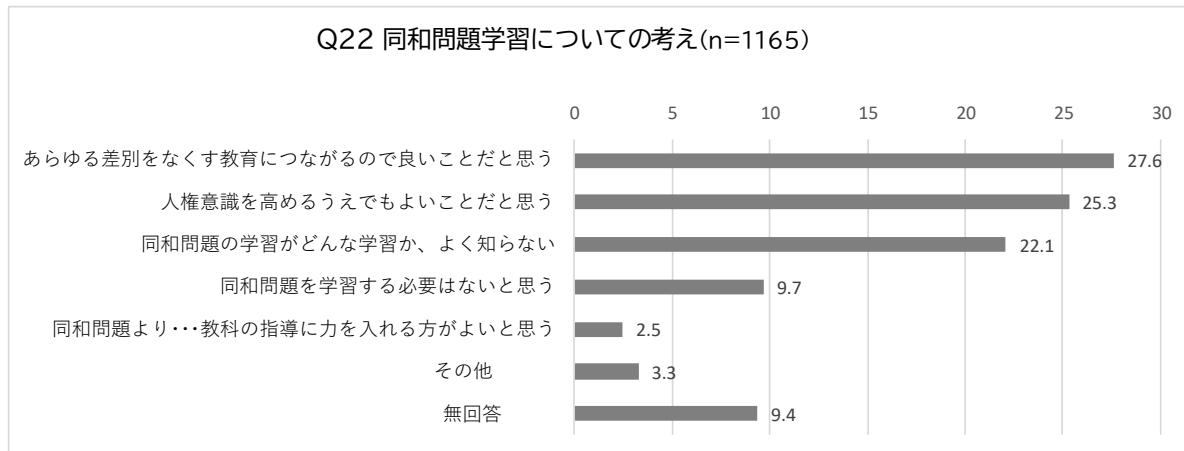
た家 族 か ら 聞 い	聞 親 い 戚 た の 人 か ら	た近 所 か ら 聞 い	い友 だ ち か ら 聞	聞 職 い 場 た の 人 か ら	教 学 わ 校 つ の た 授 業 で	等 才 T で ・ V 知 新 ・ つ 聞 ラ た ・ ジ 本		修 す 同 会 る 和 で 集 問 題 つ や に た 研 関	知 紙 区 都 つ や 町 道 た 冊 村 府 の 県 等 広 や で 報 市	え き 知 て つ つ い か て な け い い は る 覚 が	そ の 他	い部 被 て落 差 知 差 別 部 な に落 いつ や	
19.6	1.2	2.8	3.6	5.1	22.9	16.5		2.6	1.0	5.7	1.4		17.7

（「回答なし」欄なし）

## 同和問題学習についての考え方【Q22】

ちなみに、【Q22】で、学校における同和問題学習についての考え方をきいたところ、図のとおり、「あらゆる差別をなくす教育につながるので良いことだと思う」「人権意識を高めるうえでもよいことだと思う」という積極的評価を表す選択肢と共に、「同和問題の学習がどんな学習か、よく知らない」についても、それぞれ2割を超えた。

「人権意識を高めるうえでもよいことだと思う」を選択した割合は、「60歳代」以下では3割前後あり、多い。実際に、学校で同和問題についてまとまった学習経験があると考えられる年代層を中心に、同和問題学習に対する積極的評価が多いことがわかる。



## 2.「部落差別の現状認識」および「同和地区・同和地区出身者に対する意識・態度」

### 部落差別の現状認識(部落差別があると思うか)【Q13】

【問13】では、①就職、②結婚、③引っ越しや住宅の購入、④インターネット上の書き込み、⑤日頃の付き合いの5つの場面をあげ、このことについて「現在、部落差別があると思うか」を聞いている。選択肢は「明らかな差別がある」「どちらかといえば差別がある」「ほとんど差別はない」「差別はない」「わからない」である。そこで、結果を要約的に見るために、回答を以下の3つにまとめてみた。

「明らかな差別がある」 + 「どちらかといえば差別がある」 = “差別がある”

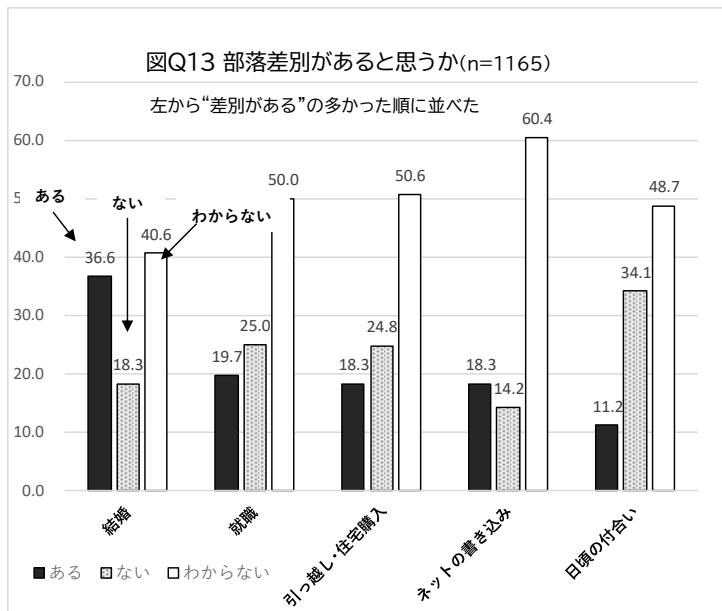
「ほとんど差別はない」 + 「差別はない」 = “差別はない”

「わからない」

結果を“差別がある”と答えた者の割合が多かった順に、上から並べたのが[表Q13]である。“差別がある”と現状認識している者の割合は、「結婚」(36.6%)が最多く、「就職」「引っ越しや住宅の購入」「インターネット上の書き込み」については同程度(18~19%)となり、「日頃の付き合い」が最も少なかった(11.2%)。また、「わからない」は、インターネット上の書き込みについて6割あり、最も多くなった。

表Q13 部落差別があると思うか(n=1165)

	ある	ない	わからない
結婚	36.6	18.3	40.6
就職	19.7	25.0	50.0
引っ越し・住宅購入	18.3	24.8	50.6
ネットの書き込み	18.3	14.2	60.4
日頃の付合い	11.2	34.1	48.7



なお、年齢階層別にみると、“差別がある”と答えた割合は、「就職」は「60歳代」以下の年代層、「結婚」は「30歳代」～「60歳代」、「引っ越しや住宅の購入」は「30歳代」～「50歳代」でやや多い。このことは、働く世代が就職差別に対して、自分自身や子どもの結婚を経験する年代が結婚差別に対して、また、住宅を購入しローンを負担することの多い世代が、住宅の購入の際に同和地区の土地を避けるという形で起こる差別に対して、より敏感に反応していると、解釈できるかもしれない。

また、この3項目については、身近に同和地区出身者がいる者（Q11で「家族や親類」「親しい友人」などがいると答えた者）に“差別がある”と答えた割合が相対的に多い（報告書の表p.38を参照）。

ところで、啓発との接触度の別でみると（Q41）<sup>1</sup>、いずれも接触度の高い者のほうが、“差別がある”が多くなるが、「就職」では、接触度が高くなると“差別がない”も増えている。

学校での学習経験（Q39）の別では、学校での学習経験のある者のほうが、“差別がある”が相対的に多くなっている。

### 同和地区・同和地区出身者に対する意識・態度

ところで、Q13では、社会には、現在も部落差別があると考えるのか、ないと考えているのか、いわば「社会の現状をどう認識しているか」（現状認識）を問うている。しかし、差別が存在するかどうかの現状認識と、回答者自身の同和地区・同和地区出身者に対する意識・態度とは、必ずしも同じではない。そこで、【Q15.1】【Q16】【Q17】【Q18】において、結婚、日頃の付き合い、住宅の購入・賃貸の際に、回答者自身が、同和地区・同和地区出身者に対してどのような態度をとるのかを、以下に検討する。

<sup>1</sup> 啓発接触度についてはQ41から変数を合成した。Q41では、6つの啓発事業や媒体をあげ、過去5年ほどの間に学習経験があるものを選ぶよう複数回答方式できいているので、回答者ごとに、選択した事業・媒体の個数をカウントして「啓発接触得点」とした。その得点の度数分布をもとに、「接触なし」855人、「1つ」230人、「2つ以上」80人の3グループに分割し、これを独立変数として利用した。

### (1)同和地区出身者に対する意識・態度—結婚【Q15.1】

【Q15.1】では、「あなたのお子さんが（いると仮定して）、恋愛をし、結婚をしたいと言っている相手が同和地区の人であった場合、親としてどのような態度をとるか」をきき、「反対する」「迷いながらも、結局は反対する」「迷いながらも、結局は賛成する」「賛成する」「わからない」から一つを選ぶよう求めている。

結果を要約的に見るために、以下のように“反対”・“賛成”にまとめてみた。

「反対する」 + 「迷いながらも、結局は反対する」 = “反対” 18.8%

「迷いながらも、結局は賛成する」 + 「賛成する」 = “賛成” 37.3%

「わからない」 (41.1%)

表 Q15.1 子どもの結婚相手が同和地区の人であった場合 n=1165

反対する	迷いながらも 結局は反対	迷いながらも 結局は賛成	賛成する	わからない	回答なし	反対	賛成	わからない
8.5	10.3	20.6	16.7	41.1	2.8	18.8	37.3	41.1

“賛成”は、「女性」、「60歳代」以下の年代層（特に「20歳未満」）、啓発との接触がある者、人権について学校で学んだ経験がある者（小学校～大学）、身近に同和地区出身者がいる者（「家族・親類」「親しい友人」にいる）が多い。

なお、“賛成”と“わからない”がほぼ同程度（4割前後）となったことも注意を引くが、「わからない」は啓発との接触がない者、人権について「学校で学んだ経験がない」「はっきりおぼえていない」者、身近に同和地区出身者が「いない、わからない」者に多い（報告書の表 p.145 を参照）。学習経験がなく、直接の出会いや付き合いがない者に「わからない」が多いということになる。

### (2)同和地区出身者に対する意識・態度—日頃親しく付き合っている人が同和地区出身であるとき【Q16】

【Q16】では、「日頃からつきあっている人が、なにかのことで同和地区出身の人であることがわかつた場合、どのような態度をとるのか」をきき、「これまでと同じように親しくつきあう」「表面的にはつきあうが、できるだけつきあいは避けていく」「つきあいはやめてしまう」「わからない」から一つを選ぶよう求めた。

全体では「これまでと同じように親しくつきあう」（=態度を変えない）が7割を越えているが、「70歳代」以上の高齢層では6割強にとどまる。態度を変えない者は、啓発との接触のある者や、学校での学習経験のある者（小学校～大学）が多い。

表Q16 日頃親しく付き合っている人が同和地区出身であるとき n=1165

これまでと同じよう に親しくつきあう	表面的にはつきあう が、できるだけつき あいは避けていく	つきあいはや めてしまう	わからない	回答なし
71.8	7.0	0.9	17.4	2.9

### (3)同和地区に対する意識・態度—住宅を選ぶ際に同和地区・同じ小中学校区の物件を避けるのか【Q17】

【Q17】では、家の購入やマンションの賃貸など、住宅を選ぶ際に、同和地区や、同和地区と同じ小中学校区にある物件なら、どのような態度をとるかをきいている。

「同和地区や同じ小中学校区にある物件は避けると思う」「同和地区である物件は避けるが、同じ小中

学校区にある物件は避けないと思う」を合算して“同和地区を避ける”とし、「いずれにあってもこだわらない」「わからない」と比べてみた。

表Q17 住宅を選ぶ際に同和地区・同じ小中学校区の物件を避けるのか n=1165

同和地区や同じ 小中学校区にあ る物件は避ける	同和地区である 物件は避 けるが同じ小中学校区に ある物件は避けない	いずれに あってもこ だわらない	わから ない	回答なし	同和地区を 避ける	いずれに あってもこ だわらない	わから ない
23.9	10.1	23.0	39.5	3.5	34.0	23.0	39.5

“同和地区を避ける”は全体で34.0%であるが、性別では「女性」に多く、年齢階層別では「30歳代」～「50歳代」（住宅購入・ローン負担世代である）に特に多くなる。

なお、啓発との接触度の別にみると、「いずれにあってもこだわらない」は接触度の高い者の方に多くなっており、逆に接触度が低いほど「わからない」が増えている。しかし“同和地区を避ける”は、接触度の有無や度合いに関わらず30%台前半となっていることも注意をひく。

また、人権についての学校での学習経験別にみると、「小学校で学んだ」者の“同和地区を避ける”割合が43.1%と最も高いこと、さらに、小学校から大学までの各段階で、“同和地区を避ける”割合が、「いずれにあってもこだわらない」を上回っていることも注意をひく（但し、「高校・高等専修学校」の層では、2つの数値はきわめて近く、ほぼ同程度となっている）。

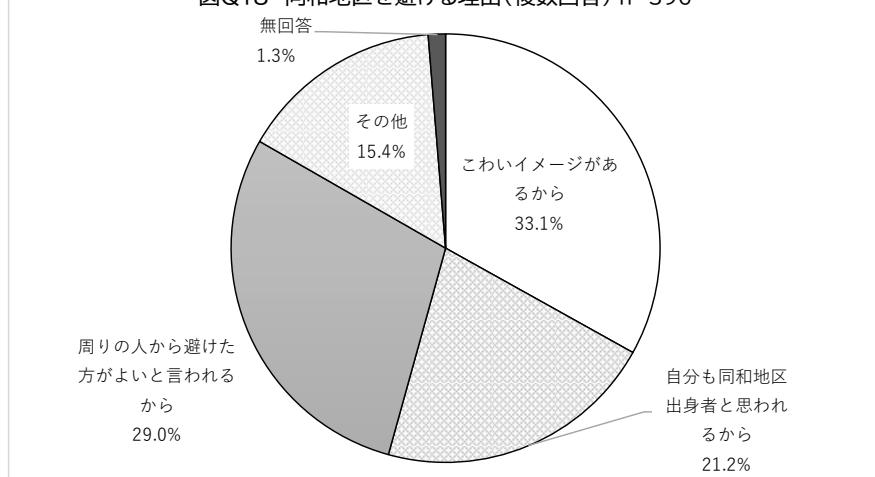
#### (4) 住宅を選ぶ際に、同和地区・同じ小中学校区の物件を避ける理由【Q18】

（前問のサブ・クエスチョン、複数回答）

ところで、前問で“同和地区を避ける”と答えた396人に、【Q18】では、同和地区を避ける理由をきいている。「こわいイメージがあるから」「自分も同和地区出身と思われるから」「周りの人から避けた方がよいと言われるから」「その他（自由記述欄あり）」から1つを選ぶよう求めた。

「こわいイメージがあるから」（偏見）と、「周りの人から避けた方がよいと言われるから」（世間同調）が、それぞれ3割前後となつたが、「自分も同和地区出身と思われるから」（「みなされる差別の回避」）も2割程度とまとまっていることが注意をひく。残念ながら、前回調査は選択肢が複数回答であったので、今回の調査とは比較できないのだが、傾向としてはかわらない。

図Q18 同和地区を避ける理由(複数回答) n=396



なお、「その他」を選んだ15.4%（61人）のうち、49人は具体的な理由を記述している。年代順にまとめると、以下の通りである。「40歳代」以下などの若い年代層では、「自分や子どもが差別を受けるリ

スク（逆差別を受けるリスクも含む）」や「環境がわるい」という主旨の意見を書いているものが、いくつかまとまっている。

20 歳代	男性	自ら差別を受けるリスクを取る必要がないから。
20 歳代	女性	まだ差別をする人がいたとして、自分の子どもがそのような人に傷つけられて欲しくないから。
20 歳代	女性	複数選択肢があり、迷うなら避ける理由にします（同価値の選択肢）。
20 歳代	女性	子供が悪く育つ可能性を指摘されたくない
20 歳代	女性	あえて、そこに住む必要はないと思うから。
20 歳代	男性	治安が悪い。
20 歳代	女性	特に親やそれ以上の年代の方。
30 歳代	女性	子どもが不当な差別をうけるリスクが 1 %でもあるなら同条件の別の物件をさがすと思う。まだまだ不当な差別をする人がいることは事実。
30 歳代	女性	子どもの育つ環境を考えて。
30 歳代	男性	治安が悪いから。
30 歳代	女性	実際に小中学校に不良が多いから（私が子どもの時の話ですが）。
30 歳代	女性	同和地区は嫌だけど、大阪で同和地区なんてそこら中にあるから、学校区ぐらいはおおめにみないと住むところなくなる。
30 歳代	女性	考えに偏りがある人が多いと思っているから。
30 歳代	女性	ガラの悪い人がいる。
30 歳代	女性	逆差別を受けそうだから。
30 歳代	女性	逆差別があることを知っているから。
40 歳代	男性	逆差別にあう事があるから。
40 歳代	女性	他にも物件はあるから、わざわざ住まない。知らなかつたら住むと思う。
40 歳代	男性	所得格差により子どもがいじめられるかもしれない。
40 歳代	女性	あえて住む必要はないから。
40 歳代	男性	不良が多い。
40 歳代	男性	周りの人間が差別しそう。
40 歳代	男性	同和地区はマナーの悪い人が多いから。
40 歳代	女性	身近で経験がなく、よく知らないので
40 歳代		治安が悪い（実際に）
40 歳代	男性	子供への影響を考慮して。
40 歳代	男性	同和地区という言葉がある限り差別はなくならないから。
40 歳代	女性	治安が悪いイメージがある。
50 歳代	女性	地域活動等手間数が多くなると思う。
50 歳代	女性	めんどうな事があるといやなので。
50 歳代	女性	自分が幼い頃に、過激な人が多いと聞いたので。
50 歳代	女性	面倒な問題を避けたい思いがあるから
50 歳代	男性	あえてつきあいたくない。
50 歳代	男性	地区内の公園で子供と遊んでいた時に石を投げられたことがある。
50 歳代	女性	生活様式や価値観の違いがあると思うから。

50 歳代	男性	あえて選ぶことはしないと思います。
50 歳代	女性	私たち世代は何とも思わないが、親世代は気にしてるので、家を購入時は他にも物件はいっぱいあるので、あえて選ばないと思う。
60 歳代	男性	売る時に早く売れない可能性があるから。
60 歳代	女性	いまでのイメージを考えてしまう。同和の人たちの方が強い。
60 歳代	男性	まだ差別は解消されていないので、あつれきが発生します。
60 歳代	女性	同和地区にいる人達は自分達の対応が悪いのではと思う もう少々、考方を右よりに考えたらと思います！
60 歳代	女性	給食費が無料であったり、医療の補助があつたり、冷暖房が整っていたり、あまりにも恩恵を受けすぎていて、母子家庭で子育てしていましたが、引っ越しました。
60 歳代	女性	物件は他にも多くあると思うから。
60 歳代	女性	現状は知りませんが、30 年以上前、教師をしていた友人から、学校の行事に同和地区の人達が集団で遅れてくると聞いた事があり、イメージが良くない。
70 歳代	男性	ガラが悪い。
70 歳代	男性	時代錯誤
70 歳代	男性	わざわざいいから。
70 歳代	女性	なんとなく
80 歳以上	女性	住んでいる所が近くだから。

### 3. 差別を見聞きした経験

#### (1) 過去 5 年間に差別的言動・落書きを見聞きしたことがあるか【Q19】【Q20】

【Q19】で、過去 5 年間に、同和地区の人々に対する差別的な言動や落書きを見聞きしたことがあるかと聞いたところ、圧倒的多数が「ない」と答え（90.2%）、「ある」は 5.6%（65 人）にとどまった。

【Q20】で、「ある」と答えた 65 人に、見聞きした時の対応をきいたところ、「差別とわかったが、気にせずそのままにした」（27 人）、「差別と気づき、何かしなければならないと思ったが、何もできなかつた」（19 人）が多い。「差別と気づき、指摘した」（8 人）、「差別と気づき、他の人に指摘してもらうよう頼んだ」（2 人）とあわせても、指摘した者は少数である。

なお、本調査の後段【Q33】では、インターネット上で見たことのある誹謗中傷や、差別を助長誘発する書き込みについてきいているので、【Q19】とのクロス表を作成してみた。以下の表のとおり、過去 5 年に部落差別にあたる言動や落書きを「見聞きしたことがある」者の約 4 割（23 人）は、ネット上での部落差別に関わる書き込みを何らかの形で見たことがわかる。

表Q19(過去5年程の間に差別的言動・落書きを見聞きしたか)×Q33(ネットでみた誹謗中傷や差別助長・誘発の書き込み)

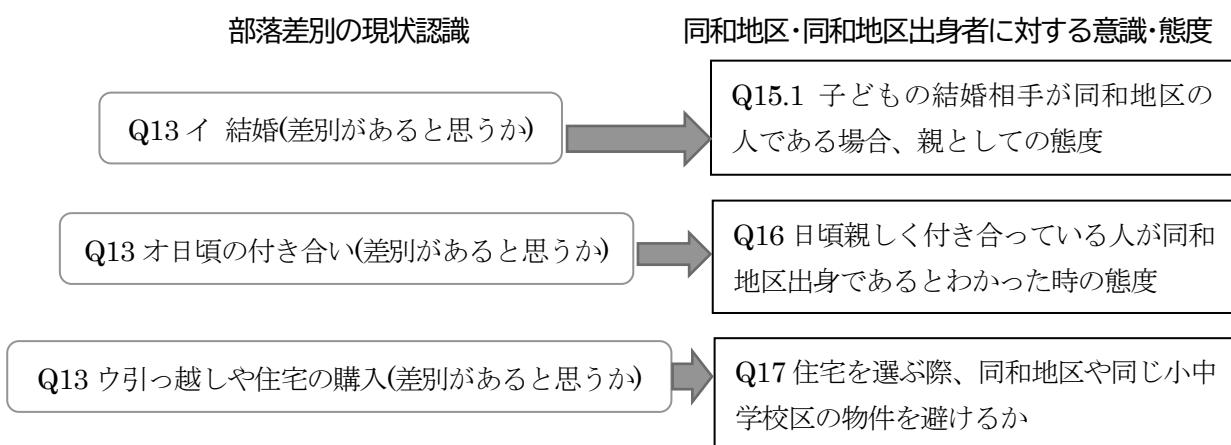
		インターネットでみたことのある誹謗中傷や差別を助長誘発する書き込み(Q33)						
		同和地区や同和地区出身者に関すること	日本に住む外国籍住民に関すること	障害者に関すること	性的指向や性自認に関すること	人・知人・教師等)に関すること	その他	回答なし
見聞きしたことがある	n=58	23 39.7%	17 29.3%	21 36.2%	13 22.4%	3 5.2%	4 6.9%	21 36.2%
見聞きしたことはない	n=1051	67 6.4%	155 14.7%	138 13.1%	121 11.5%	49 4.7%	173 16.5%	568 54.0%
回答なし	n=56	2 3.6%	3 5.4%	2 3.6%	1 1.8%	1 1.8%	5 8.9%	45 80.4%
総数	n=1165	92 7.9%	175 15.0%	161 13.8%	135 11.6%	53 4.5%	182 15.6%	634 54.4%

#### 4.「部落差別の現状認識」と「同和地区・同和地区出身者に対する意識・態度」のずれ、及び教育・啓発との関係

ところで、「部落差別の現状認識」（今の社会に、部落差別がある／ないと思っている）ことと、「同和地区・同和地区出身者に対する意識・態度」（差別をする／しない）ことは、次元が異なる。本調査では、この両方をきいている。

教育・啓発の場で、部落差別についての学習を推進すれば、「差別がある」と認識する者は、むしろ多くなると考えられるから、「差別がある」と考える者が多いということ自体が、問題とはいえない。むしろ、「差別がある」と認識していても、「自分は差別をしない」という態度をとる者がどれくらいいるのか（あるいは逆の態度をとる者が、どれほどいるか）を見る必要がある。

本調査では、Q13 で「部落差別の現状認識」をたずね、「同和地区・同和地区出身者に対する意識・態度」を Q15.1 (結婚)、Q16 (日頃の付き合い)、Q17(住宅) によって聞いている。そこで、両者の間の（次の図を参照）ずれを見てみることにする。



また、部落差別が「ある」と現状認識していても、自分は差別を「しない」（＝同和地区・同和地区出身者を忌避する態度をとらない）という態度を表明している者は、人権にかかわる教育・啓発からの、何らかの影響を受けているのであろうか。この点についても併せて考えてみたい。

##### (1)結婚に関して【Q13 イ】【Q15.1】

結婚について、部落差別が「ある」と思うか、「ない」と思うか（Q13 イ）の別に、「子どもの結婚相手が同和地区の人である場合、親としてどのような態度をとるか」（Q15.1）を集計した。すると、差別が「ある」と思っている者は、「ない」と思っている者よりも、“ともかくも「反対」”が多い。

「差別がある」と認識している者が、差別を「する」というのは、ある意味、想定しやすい。しかし、ここでは、差別が「ある」と思っている者でも、“ともかくも「反対」”（27.2%）より、“ともかくも「賛成」”（36.8%）が1割近く多いことにも、注目していただきたい。

表 結婚についての現状認識(Q13.1)×意識態度(Q15.1)

		ともかくも 「反対」	ともかくも 「賛成」	わからない	回答なし
差別が「ある」	n=427	27.2%	36.8%	34.4%	1.6%
差別は「ない」	n=213	14.6%	52.6%	30.0%	2.8%
わからない	n=473	12.5%	33.0%	52.9%	1.7%
回答なし	n=52	25.0%	17.3%	34.6%	23.1%
総 数	n=1165	18.8%	37.3%	41.1%	2.8%

では、差別が「ある」(現状認識) と思っていても、自分は差別を「しない」(=結婚に賛成する) 者については、その他の組み合わせと比べて、人権教育・啓発との接触経験に、何か違いがあるだろうか。

以下に、いくつかの組み合わせについて、学校での人権教育経験、啓発との接触経験とのクロスを出してみた。

表 結婚差別についての現状認識(Q13イ)・意識態度(Q15.1)×学校での学習経験(Q39)

		小学校で学んだ	中学校で学んだ	高校・高等専修学校等で学んだ	短大・大学・専門学校等で学んだ	はっきり覚えていない	学校で学んだ経験はない	回答なし
比較1	差別が「ある」→反対	n=116	44.0%	28.4%	11.2%	4.3%	26.7%	12.9%
	差別が「ある」→賛成	n=157	57.3%	52.9%	21.0%	12.1%	17.8%	7.6%
比較2	差別が「ある」→賛成	n=157	57.3%	52.9%	21.0%	12.1%	17.8%	7.6%
	差別は「ない」→賛成	n=112	48.2%	33.9%	16.1%	6.3%	33.9%	7.1%

表 結婚差別についての現状認識(Q13イ)・意識態度(Q15.1)×啓発接触度(Q41)

		接触なし・回答なし	1つ	2つ以上
比較1	差別が「ある」→反対	n=116	74.1%	19.0%
	差別が「ある」→賛成	n=157	63.7%	22.9%
比較2	差別が「ある」→賛成	n=157	63.7%	22.9%
	差別は「ない」→賛成	n=112	64.3%	29.5%

結婚について、【差別が「ある」(現状認識) → 結婚に賛成(意識態度)】の者は、【差別が「ある」→ 結婚に反対】や【差別が「ない」→結婚に賛成】に比べて、人権について学校で学んだ経験を持つ割合が高くなっている。

ただし、啓発接触度については、【差別が「ある」→結婚に賛成】の者だからといって、啓発と1または2回以上接觸している割合が、目立って高いということはない(但し、「接触なし・回答なし」割合は低い)。

## (2)日頃の付合いについて【Q13オ】【Q16】

日頃の付合いについて、部落差別が「ある」と思うか、「ない」と思うか(Q13オ)の別に、「親しく付合っている人が、同和地区出身だとわかった場合、どのような態度をとるか」(Q16)を集計した。差別が「ある」と認識している者では、「できるだけ付合いは避ける」と「付合いはやめてしまう」を足した割合が12.2%となり、「わからない」もやや多いことがわかる。

表 日頃の付き合いについての現状認識(Q13オ)×意識・態度(Q16)

	これまでと同じように親しく付合う	表面的には付合うができるだけ付合いは避ける	付合いはやめてしまう	わからない	回答なし	避ける+やめる
差別が「ある」	n=131	70.2%	11.5%	0.8%	16.8%	0.8%
差別は「ない」	n=398	83.7%	7.5%	0.0%	7.5%	1.3%
わからない	n=567	67.5%	5.5%	1.2%	22.9%	2.8%
回答なし	n=69	42.0%	7.2%	2.9%	30.4%	17.4%
総数	n=1165	71.8%	7.0%	0.9%	17.4%	2.9%

では、差別が「ある」(現状認識) と思っていても、自分は差別を「しない」(=これまでと同じように親しく付合う) 者は、その他の組み合わせと比べて、人権教育・啓発との接触経験に、何か違いがあるかを見るために、以下の表を作成した。但し、行ごとの回答者数(n)が少數となるところが多いので、くわしい比較は行わない。

表 日頃の付き合いについての現状認識(Q13オ)×意識態度(Q16)×学校での学習経験(Q39)

		小学校で学んだ	中学校で学んだ	高校・高等専修学校で学んだ	短大・大学・専門学校等で学んだ	はっきり覚えていない	学校で学んだ経験はない	回答なし	
比較1	差別が「ある」→これ迄同様親しく付合う	n=92	65.2%	47.8%	22.8%	15.2%	12.0%	8.7%	2.2%
	差別が「ある」→できるだけ付合いは避けていく	n=15	53.3%	46.7%	33.3%	6.7%	26.7%	0.0%	6.7%
	差別が「ある」→付合いはやめてしまう	n=1	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

比較2	差別が「ある」→これ迄同様親しく付合う	n=92	65.2%	47.8%	22.8%	15.2%	12.0%	8.7%	2.2%
	差別は「ない」→これ迄同様親しく付合う	n=333	48.6%	39.0%	16.5%	6.0%	26.4%	10.5%	2.1%

表 日頃の付き合いについての現状認識(Q13オ)・意識態度(Q16)×啓発接触度(Q41)

			接触なし・回答なし	1つ	2つ以上
比較1	差別が「ある」→これ迄同様親しく付合う	n=92	63.0%	19.6%	17.4%
	差別が「ある」→できるだけ付合いは避けていく	n=15	66.7%	26.7%	6.7%
	差別が「ある」→付合いはやめてしまう	n=1	0.0%	100.0%	0.0%
比較2	差別が「ある」→これ迄同様親しく付合う	n=92	63.0%	19.6%	17.4%
	差別は「ない」→これ迄同様親しく付合う	n=333	64.6%	27.0%	8.4%

### (3)引っ越しや住宅の購入【Q13 ウ】【Q17】

引っ越しや住宅の購入について、部落差別が「ある」と思うか、「ない」と思うか (Q13 ウ) の別に、「住宅を選ぶ際に、同和地区にある物件、同じ小中学校区の物件に対して、どのような態度をとるか」(Q17) を集計した。すると、差別が「ある」と思っている者は、「ない」と思っているものよりも“同和地区は「避ける」が多くなっている。また、差別が「ない」と思っている者では、同和地区を避ける割合は低くなると想定されるのだが、実際には、「避ける」と「こだわらない」がほぼ同じ割合となったことが注意をひいた。

表 引っ越し・住宅購入についての現状認識(Q13ウ)×Q17(意識・態度)

	同和地区は「避ける」	こだわらない	わからない	回答なし
差別が「ある」	n=213	47.9%	20.2%	31.5%
差別は「ない」	n=289	34.3%	33.9%	29.1%
わからない	n=590	30.7%	20.2%	46.3%
回答なし	n=73	19.2%	11.0%	49.3%
総数	n=1165	34.0%	23.0%	39.5%
				3.5%

さらに、差別が「ある」(現状認識) と思っていても、自分は差別を「しない」(=こだわらない) 者について、その他の組み合わせと比べて、人権教育・啓発との接触経験に違いがあるのかを見るために次の表を作成した。【差別が「ある」→ こだわらない】が少数 (43 人) で、単純に比較はできないが、高校などでの学習経験をあげる割合がやや多かったり、啓発活動との接触度がやや高い (2 つ以上) ことが見てとれる。

表 引っ越し・住宅購入についての現状認識(Q13オ)・意識態度(Q16)×学校での学習経験(Q39)

		小学校で学んだ	中学校で学んだ	高校・高等専修学校で学んだ	短大・大学・専門学校等で学んだ	はっきり覚えていない	学校で学んだ経験はない	回答なし	
比較1	差別が「ある」→同和地区を避ける	n=102	59.8%	40.2%	10.8%	9.8%	21.6%	6.9%	2.0%
	差別が「ある」→こだわらない	n=43	53.5%	46.5%	27.9%	16.3%	23.3%	4.7%	4.7%
比較2	差別が「ある」→こだわらない	n=43	53.5%	46.5%	27.9%	16.3%	23.3%	4.7%	4.7%
	差別は「ない」→こだわらない	n=98	45.9%	39.8%	17.3%	8.2%	29.6%	9.2%	4.1%

表 引越し・住宅購入についての現状認識(Q13才)・意識態度(Q16)×啓発接触度(Q41)

		接触なし・回	1つ	2つ以上
差別が「ある」→同和地区を避ける	n=102	67.6%	23.5%	8.8%
差別が「ある」→こだわらない	n=43	39.5%	30.2%	30.2%

差別が「ある」→こだわらない	n=43	39.5%	30.2%	30.2%
差別は「ない」→こだわらない	n=98	58.2%	30.6%	11.2%

## 5. 同和問題・部落差別についての考え方

### 因子分析【Q14】【Q21】

同和問題と部落差別について、【Q14】には7、【Q21】には8の「意見」が示され、それぞれ賛成～反対を5件法（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」）によってきいている。

15の意見の一つひとつに対する、属性別の回答の比較は、報告書の本文を参照していただくとして、ここでは、これらの回答（変量）の背景にある、「共通する因子」を探るために行った、因子分析の結果を示す。

因子分析にあたっては、「そう思う」～「そう思わない」まで、5～1点のスコアを与え、「回答なし」は除外した。また、因子分析の過程で、2つの因子に同程度の負荷量を示した質問を外し、因子分析を2度繰り返した（Q14ア、Q21オを除外）。その結果、意味のある因子（初期の固有値1以上）が4つ抽出された

第一因子には4、第二因子では3、第三因子では4、第四因子では2つの質問の因子負荷量が高くなっている、それぞれの質問群の共通性に注目し、以下のように名付けた。

第一因子＝「当事者（同和地区出身者）帰責」因子

第二因子＝「私たちから差別解消に向け行動しよう」因子

第三因子＝「差別反対・被差別者への共感」因子

第四因子＝「差別はない・自然になくなる」因子

### 因子分析の結果【Q14】【Q21】

	1	2	3	4
同和地区の人々は「差別がある」と声高に主張しそうだ	0.714	0.035	-0.151	0.369
同和地区の人々は差別、差別と言って被害者意識が強すぎる	0.705	-0.135	0.027	0.268
同和地区の人々が…努力しなければ、差別はなくなる	0.550	0.178	-0.137	0.141
同和地区の人々と深く関わることにためらい感じる	0.423	-0.152	0.016	-0.026
同和地区と周辺地域が交流・協働しまちづくりを進めると差別なくなる	0.027	0.689	0.148	0.075
私たちが差別の解消に向けて行動を起こしていくことが重要	-0.106	0.684	0.224	-0.224
私たちが…差別を許さない態度・行動力を身につければ差別はなくなる	-0.042	0.581	0.238	0.110
部落差別を許さない態度を身に着けることは他の人権問題にもプラスになる	-0.114	0.277	0.641	-0.061
差別について厳しく追求するのも理解できる	-0.152	0.193	0.560	-0.136
同和地区の人々は差別される悔しさを知っているだけに差別に敏感な人が多い	0.274	0.069	0.541	-0.170
ネット上に同和地区の所在地を載せるることは部落差別を助長する深刻な問題行為	-0.073	0.105	0.459	-0.042
部落差別はすでに深刻な問題ではない	0.178	0.005	-0.215	0.742
騒がないでそっとしておけば自然に差別はなくなる	0.240	0.026	-0.098	0.730
寄与率	13.144%	11.414%	11.190%	11.026%

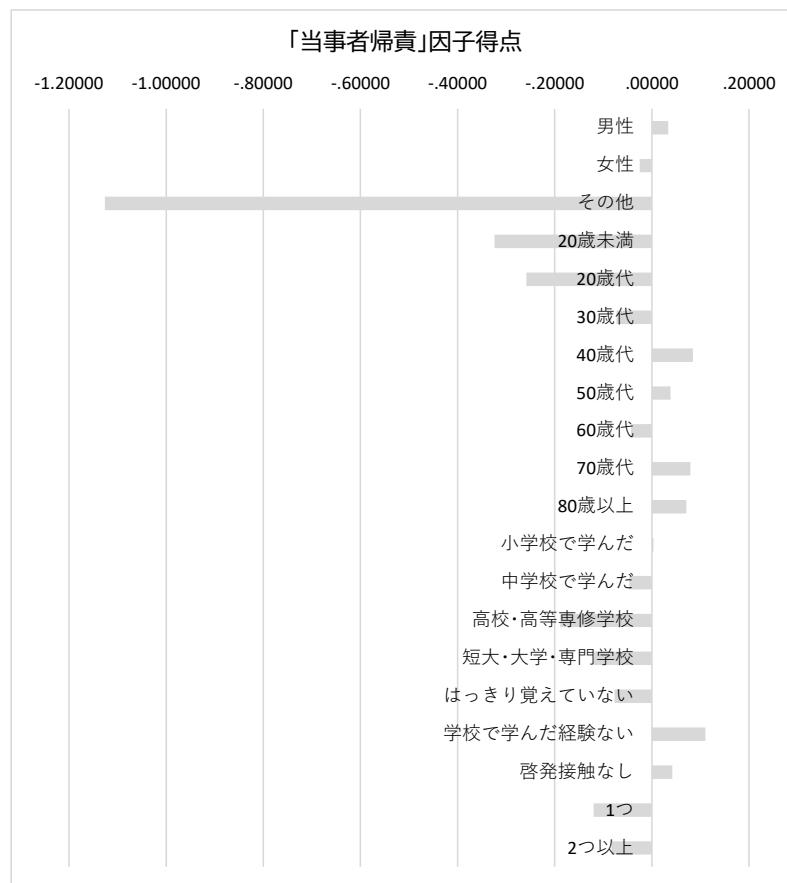
因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

(累積46.774%)

a. 7回の反復で回転が収束しました。KMOの標本妥当性測度0.770

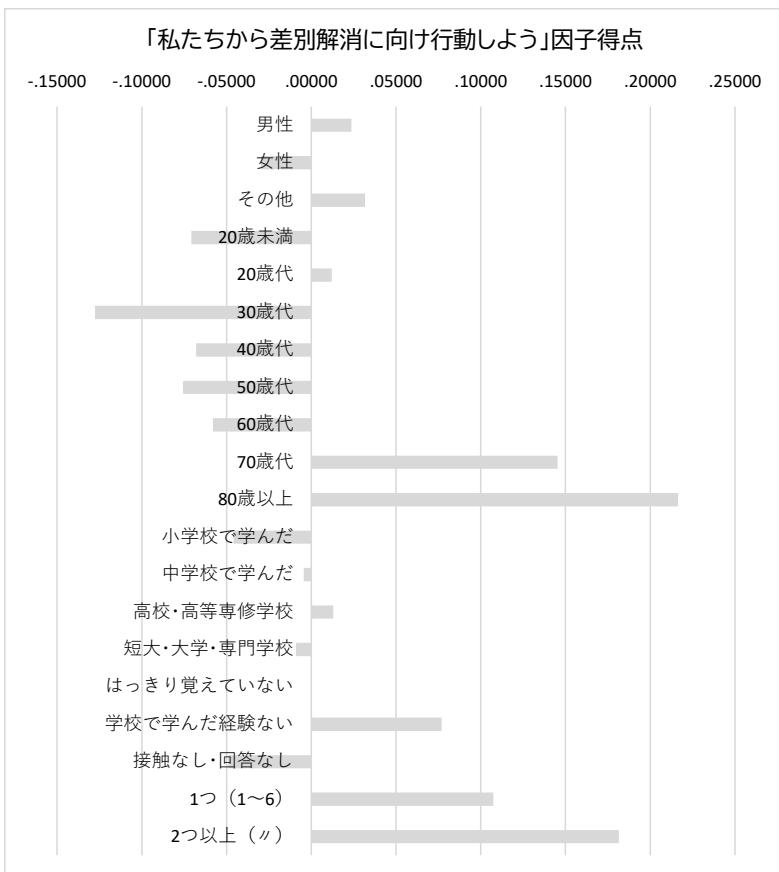
なお、第一因子に、「当事者に、部落差別の責任を帰す」（同和地区出身者の被害者意識が強すぎるとか、自助努力をもとめるといった考え方）志向性を示す因子が立ち現れたことが注意をひいた。

さらに、これらの4因子が、性別、年齢、啓発との接触度、学校での人権問題学習経験とどのような関係にあるのかを見るため、これらの属性別に因子得点を見ることにした。因子得点は、平均が0になるように標準化されていて、属性別に得点の大きさを見ることで、傾向を読み取ることができる。なお「そう思う」～「そうは思わない」に高(5)～低(1)となるようスコアを与えていたので、図を見る場合、プラスの値をとる（右側に棒が伸びている）ほうが、因子が示している傾向が、より強く現れていることになる。



### 「当事者(同和地区出身者)帰責」因子

因子得点がマイナスの大きな値をとる（左に伸びている）属性グループには、性別「その他」、「20歳代」以下の若い年代層、「学校で人権を学んだ経験のある層」【とくに高校より上の学校】、「啓発と接触した経験のある層」などがある。こうした属性グループは、「当事者に差別の責任を帰そうとする」志向性に対して、否定的な意識を持つ、ということになる。

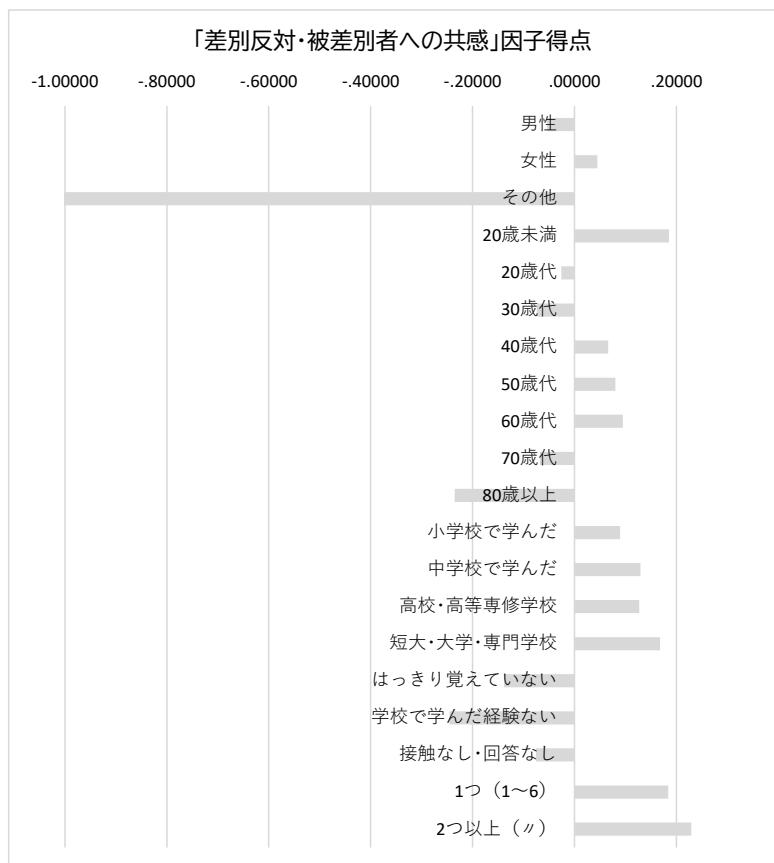


### 「私たちから差別解消に向け行動しよう」因子

因子得点がプラスに大きくなるほど（右に伸びるほど）、こうした志向性を強く持つことになる。

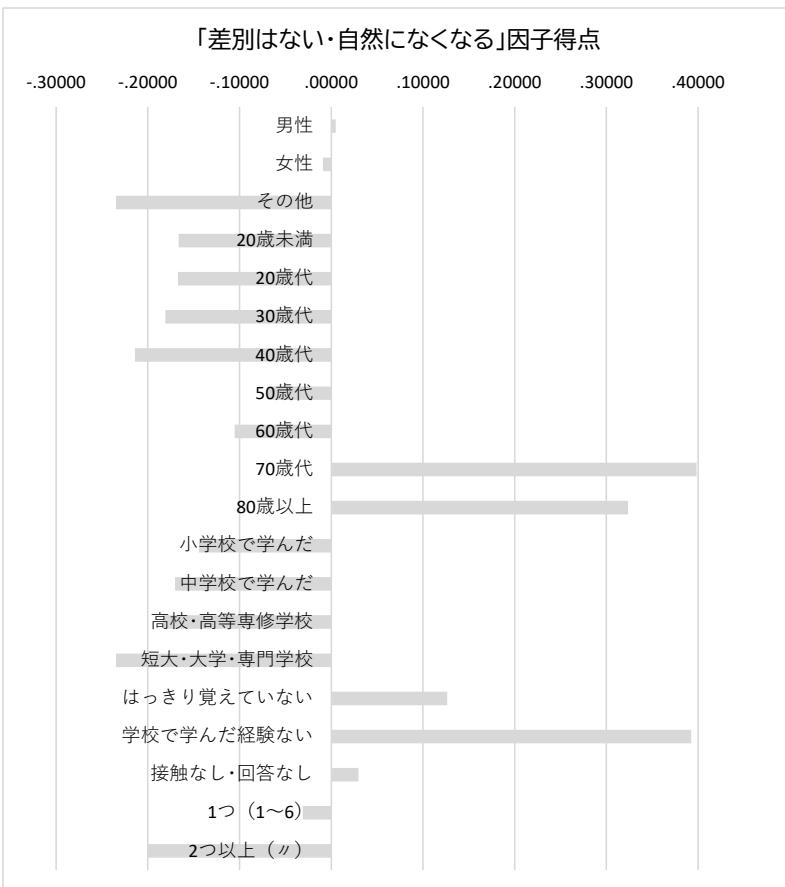
「70歳代」以上の高齢層、啓発との接觸がある層、「学校で人権を学んだ経験のない層」が、プラスとなっている。

また、なぜか、若い年代層（ただし20歳代は除く）は因子得点がマイナスとなり、「差別解消に向けた行動」に対して消極的だということになる。



### 「差別反対・被差別者への共感」因子

因子得点がプラスに大きくなるほど（右に伸びるほど）、こうした志向性を強く持つことになる。「20歳未満」や、「学校で人権を学んだ経験のある層」「啓発と接觸した経験のある層」がこれにあたる。



## 「差別はない・自然になくなる」因子

因子得点がプラスに大きくなるほど（右に伸びるほど）、こうした志向性を強く持つことになる。「70歳代」以上の高齢層、「学校で人権を学んだ経験のない」とか「覚えていない」層などである。

## おわりに

同和問題、部落差別の認知経路を見ると、「学校で習って知る」者が全体では最も多くを占めるようになった。これは年代層が下がるほど顕著な傾向であるが、「20歳代」以下では、「同和問題を知らない」も多いから、この世代にとっての同和問題は、やや極端な言い方かもしれないが「学校で習うか、さもなければ知らない」問題なのである。

ところで、学校という公的経路を通じて「正しく知る」者が、最も多いということは、歓迎すべきことである。しかし、正しい知識を得るだけでよいのであろうか。今回の調査では、20歳代以下の若い年代層では、自分の身近な人の中に「同和地区出身の人」が「いない、わからない」と答えた者が9割前後もあったから、「習っていても、顔の見える関りがあるわけではない」のである。つまり、学校で習ったことがある若者にとっても、部落差別、同和問題とは、観念的なものにすぎない。同和問題について、具体的イメージを持ちえない若者の「意識の空白」に、ネット上の部落差別を助長誘発する情報の数々は、浸透しやすいのではないか。

また、因子得点の年齢階層別比較をみると、「20歳未満」の「差別反対・被差別者への共感」度は強いが、「私たちから差別解消に向け行動しよう」という気持ちは弱い。気持ちを行動へと転化するにはどのような教育・啓発が求められているのか。検討課題である。

ところで、部落差別と一言でいっても、場面によって立ち現れ方にかなりの違いがあることが、調査結果からは見えてくる。前回調査の際にも指摘したが、「差別がある」という回答は、結婚に関して最も多いのだが、「差別がある」と思っていても「自分は差別をしない」（子どもの結婚相手が同和地区出身の場合に、その結婚に賛成する）という者は、「差別をする」（結婚に反対する）という者よりも多くなる。

しかしながら、住宅を選ぶ際に「差別がある」と答えた者は、結婚の場合よりもはるかに少ないのだが、自分が住宅を選ぶとなると、「差別がある」と思おうが、「差別がない」と思おうが、「避ける」割合にはあまり差がない。また、「避ける」割合は、啓発との接触度によっても、あまり差がない。どうも、土地に対する差別には、結婚（人）に対する差別とは違う論理が働くようである。

ところで、最後に、因子分析の結果にも触れておきたい（【Q14】【Q21】）。私は、第一因子を、「当事者帰責因子」と名付けたが、第一因子に高い相関係数を示している質問群——同和地区の人びとは「差別があると、声高に主張しすぎ」、「差別、差別と言って被害者意識が強すぎる」、「努力しなければ、差別はなくならない」——は、「新しいレイシズム」を表象しているとも言ってよい（McConahay, 1986; 高, 2015）。新しいレイシズムは次のような4つの階段を登る意識・態度である。

- 「差別なんかないように」
- 「格差があるのは、マイノリティ側の努力が足りないから」
- 「(努力もせず) 差別、差別と主張して過大な要求を行っている」
- 「それによって不当な特権を得ている」

「新しいレイシズム」は、古典的なレイシズム（例えば、マイノリティが、劣っているといった言説）とは異なり、「政治的主張」の装いをまとい、批判が困難なものである。従来の教育・啓発の主流は、どちらかといえば、マイノリティに対する「思いやり」を強調することが多かったが、こうした新しい言説には対抗できない（マイノリティが「特権」を享受していると主張する人に対して、「思いやり」を求めて、とうてい効果的とは思えない）。このことも、変容する現代社会の部落差別に向き合う教育・啓発にとっての重要な課題である。

## 補足資料（啓発接觸度ほか集計表）

問12 あなたは同和問題や被差別部落(同和地区)があることを、どのようにして知りましたか。

	回答者数	父母や家族から	近所の人から	友だちから	職場の人から	学校で教わった	講演会・研修会などで	都道府県や市町村の広報紙などで	テレビ・新聞・本などで	インターネットで	その他	覚えていない	同和問題を知らない	無回答	
全 体	1,165	242	26	44	40	333	21	24	71	11	14	82	81	176	
	100.0	20.8	2.2	3.8	3.4	28.6	1.8	2.1	6.1	0.9	1.2	7.0	7.0	15.1	
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855	177	17	39	25	228	12	13	53	10	13	69	75	124
	100.0	20.7%	2.0%	4.6%	2.9%	26.7%	1.4%	1.5%	6.2%	1.2%	1.5%	8.1%	8.8%	14.5%	
	1つ(1~6のうち)	230	50	7	4	9	77	6	7	17	1	1	9	4	38
	100.0	21.7%	3.0%	1.7%	3.9%	33.5%	2.6%	3.0%	7.4%	0.4%	0.4%	3.9%	1.7%	16.5%	
	2つ以上("n")	80	15	2	1	6	28	3	4	1	0	0	4	2	14
	100.0	18.8%	2.5%	1.3%	7.5%	35.0%	3.8%	5.0%	1.3%	0.0%	0.0%	5.0%	2.5%	17.5%	
学校での学習経験(複数回答)	小学校で学んだ	487	90	1	10	4	235	3	4	16	3	2	19	24	76
	100.0	18.5%	0.2%	2.1%	0.8%	48.3%	0.6%	0.8%	3.3%	0.6%	0.4%	3.9%	4.9%	15.6%	
	中学校で学んだ	370	73	1	12	3	165	4	1	13	3	2	16	15	62
	100.0	19.7%	0.3%	3.2%	0.8%	44.6%	1.1%	0.3%	3.5%	0.8%	0.5%	4.3%	4.1%	16.8%	
	高校・高等専修学校で学んだ	165	34	0	8	3	68	1	1	5	2	0	5	16	22
	100.0	20.6%	0.0%	4.8%	1.8%	41.2%	0.6%	0.6%	3.0%	1.2%	0.0%	3.0%	9.7%	13.3%	
	短大・大学・専門学校で学んだ	76	12	0	0	0	34	2	1	4	2	2	1	4	14
	100.0	15.8%	0.0%	0.0%	0.0%	44.7%	2.6%	1.3%	5.3%	2.6%	2.6%	1.3%	5.3%	18.4%	
	(はっきり覚えてない)	379	86	16	16	22	49	9	10	34	4	8	39	38	48
	100.0	22.7%	4.2%	4.2%	5.8%	12.9%	2.4%	2.6%	9.0%	1.1%	2.1%	10.3%	10.0%	12.7%	
	学校で学んだ経験	127	33	5	8	10	5	5	5	14	3	3	13	7	16
	100.0	26.0%	3.9%	6.3%	7.9%	3.9%	3.9%	3.9%	11.0%	2.4%	2.4%	10.2%	5.5%	12.6%	
	学習経験回答なし	50	10	3	3	3	4	0	2	2	0	0	5	4	14
	100.0	20.0%	6.0%	6.0%	6.0%	8.0%	0.0%	4.0%	4.0%	0.0%	0.0%	10.0%	8.0%	28.0%	

問13 現在、次のことについて部落差別があると思いますか。

ア. 就職について

	回答者数	明らかに差別がある	どちらかといえれば差別はない	ほとんど差別はない	差別はない	わからない	無回答
全 体	1,165	48	182	182	109	583	61
	100.0	4.1	15.6	15.6	9.4	50.0	5.2
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855	119	121	72	457	50
	100.0	4.2%	13.9%	14.2%	8.4%	53.5%	5.8%
	1つ(1~6のうち)	230	7	46	44	26	97
	100.0	3.0%	20.0%	19.1%	11.3%	42.2%	4.3%
	2つ以上("n")	80	5	17	17	11	29
	100.0	6.3%	21.3%	21.3%	13.8%	36.3%	1.3%
学校での学習経験	小学校で学んだ	487	26	84	87	46	240
	100.0	5.3%	17.2%	17.9%	9.4%	49.3%	0.8%
	中学校で学んだ	370	18	64	64	42	176
	100.0	4.9%	17.3%	17.3%	11.4%	47.6%	1.6%
	高校・高等専修学校で学んだ	165	7	31	25	21	80
	100.0	4.2%	18.8%	15.2%	12.7%	48.5%	0.6%
	短大・大学・専門学校で学んだ	76	3	14	10	10	38
	100.0	3.9%	18.4%	13.2%	13.2%	50.0%	1.3%
	(はっきり覚えてない)	379	9	48	51	32	211
	100.0	2.4%	12.7%	13.5%	8.4%	55.7%	7.4%
	学校で学んだ経験	127	5	18	17	15	58
	100.0	3.9%	14.2%	13.4%	11.8%	45.7%	11.0%
	学習経験回答なし	50	3	7	7	4	17
	100.0	6.0%	14.0%	14.0%	8.0%	34.0%	24.0%
身近な人	家族や親戚にいる	21	4	4	4	1	7
	100.0	19.0%	19.0%	19.0%	4.5%	33.3%	4.8%
	親しい友人いる	33	1	1	1	1	1
	100.0	6.1%	27.3%	24.2%	12.1%	27.3%	3.0%
	が同じい和る地	98	6	16	23	13	40
	100.0	6.1%	18.3%	23.5%	13.3%	40.8%	-
	いない、わからない	766	26	118	107	71	433
	100.0	3.4%	15.4%	14.0%	9.3%	56.5%	1.4%
	無回答	247	10	35	40	20	94
	100.0	4.0%	14.2%	16.2%	8.1%	38.1%	19.4%

イ. 結婚について

	回答者数	明らかに差別がある	どちらかといえれば差別はない	ほとんど差別はない	差別はない	わからない	無回答
全 体	1,165	96	331	141	72	473	52
	100.0	8.2	28.4	12.1	6.2	40.6	4.5
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855	60	239	96	47	368
	100.0	7.0%	28.0%	11.2%	5.5%	43.0%	5.3%
	1つ(1~6のうち)	230	21	64	37	19	83
	100.0	9.1%	27.8%	16.1%	8.3%	36.1%	2.6%
	2つ以上("n")	80	15	28	8	6	22
	100.0	18.8%	35.0%	10.0%	7.5%	27.5%	1.3%
学校での学習経験	小学校で学んだ	487	42	166	67	28	180
	100.0	8.6%	33.8%	13.8%	5.7%	37.0%	0.8%
	中学校で学んだ	370	42	125	46	20	133
	100.0	11.4%	33.8%	12.4%	5.4%	35.9%	1.1%
	高校・高等専修学校で学んだ	165	21	42	22	12	68
	100.0	12.7%	25.5%	13.3%	7.3%	41.2%	0.0%
	短大・大学・専門学校で学んだ	76	12	22	8	4	29
	100.0	15.8%	28.9%	10.5%	5.3%	38.2%	1.3%
	(はっきり覚えてない)	379	21	82	43	26	184
	100.0	5.5%	21.6%	11.3%	6.9%	48.5%	6.1%
	学校で学んだ経験	127	8	38	14	8	48
	100.0	6.3%	29.9%	11.0%	6.3%	37.8%	8.7%
	学習経験回答なし	50	2	9	5	5	17
	100.0	4.0%	18.0%	10.0%	10.0%	34.0%	24.0%
身近な人	家族や親戚にいる	21	6	2	-	7	-
	100.0	28.6%	28.6%	9.5%	-	33.3	-
	親しい友人いる	33	1	1	1	4	1
	100.0	21.2%	33.3%	15.2%	12.1%	15.2%	3.0%
	が同じい和る地	98	6	32	16	8	27
	100.0	14.3%	32.7%	18.3%	9.2%	27.6%	-
	いない、わからない	766	45	220	91	45	356
	100.0	5.9%	28.7	11.9%	5.9%	46.5%	1.2%
	無回答	247	24	62	27	14	78
	100.0	9.7%	25.1	10.9%	5.7%	31.6	17.0

ウ. 引っ越しや住宅の購入に際して

	回答者数	明らかな差別がある	どちらかといえれば差別	ほとんど差別はない	差別はない	わからない	無回答
全 体	1,165 100.0	45 3.9	168 14.4	173 14.8	116 10.0	590 50.6	73 6.3
啓発接觸度	接觸なし・回答なし 100.0% 1つ(1~6のうち) 100.0% 2つ以上(")" 100.0%	855 12.7% 230 5.2% 80 6.3%	28 14.0% 35 15.2% 5 30.0%	109 9.3% 38 16.5% 15 18.8%	120 53.7% 29 45.2% 8 100.0%	79 7.0% 104 5.2% 27 1.3%	459 47.0% 175 5.2% 1 1.3%
学校での学習経験	小学校で学んだ 中学校で学んだ 高校・高等専修学校で学んだ 短大・大学・専門学校で学んだ はっきり覚えていない 学校で学んだ経験はない 学習経験回答なし	487 6.0% 370 5.4% 165 4.2% 76 3.9% 379 1.3% 127 1.6% 50 2.0%	29 17.9% 20 18.9% 7 15.8% 3 27.6% 5 11.6% 2 10.2% 1 8.0%	87 17.0% 59 15.9% 28 17.0% 21 11.8% 44 13.2% 13 10.2% 6 12.0%	83 8.8% 40 10.8% 20 12.1% 9 9.2% 50 9.5% 13 12.6% 7 14.0%	43 48.7% 40 47.3% 20 50.9% 175 46.1% 36 56.2% 62 48.8% 20 40.0%	237 1.6% 175 1.6% 84 0.0% 35 1.3% 213 8.2% 62 16.5% 20 24.0%
身近な出発地	家族や親戚にいる 親しい友人にいる 知人に入いる いない、わからない 無回答	21 100.0% 33 100.0% 98 100.0% 766 100.0% 247 100.0%	3 14.3% 4 12.1% 6 6.1% 22 2.9% 10 4.0%	4 19.0% 4 21.2% 17 21.4% 113 13.8% 30 14.2%	4 9.5% 7 9.1% 21 12.2% 106 13.8% 35 14.2%	2 33.3% 3 42.4% 12 42.9% 77 56.4% 21 38.5%	7 4.8% 14 3.0% 42 1.0% 77 16.5% 20 22.3%

エ. インターネット上の書き込みについて

	回答者数	明らかな差別がある	どちらかといえれば差別	ほとんど差別はない	差別はない	わからない	無回答	
全 体	1,165 100.0	62 5.3	152 13.0	91 7.8	75 6.4	704 60.4	81 7.0	
啓発接觸度	接觸なし・回答なし 1つ(1~6のうち) 2つ以上(")"	855 100.0% 230 100.0% 80 100.0%	37 4.3% 12 5.2% 13 16.3%	99 11.6% 39 17.0% 13 17.5%	63 7.4% 19 8.3% 14 11.3%	53 6.2% 17 7.4% 5 6.3%	538 62.9% 128 55.7% 38 47.5%	
学校での学習経験	小学校で学んだ 中学校で学んだ 高校・高等専修学校で学んだ 短大・大学・専門学校で学んだ はっきり覚えていない 学校で学んだ経験はない 学習経験回答なし	487 6.0% 370 5.4% 165 4.2% 76 3.9% 379 1.3% 127 1.6% 50 2.0%	29 17.9% 20 18.9% 7 15.8% 3 27.6% 5 11.6% 2 10.2% 1 8.0%	87 17.0% 59 15.9% 28 17.0% 21 11.8% 44 13.2% 13 10.2% 6 12.0%	83 8.8% 40 10.8% 20 12.1% 9 9.2% 50 9.5% 13 12.6% 7 14.0%	43 48.7% 40 47.3% 20 50.9% 175 46.1% 36 56.2% 62 48.8% 20 40.0%	237 1.6% 175 1.6% 84 0.0% 35 1.3% 213 8.2% 62 16.5% 20 24.0%	
身近な出発地	家族や親戚にいる 親しい友人にいる 知人に入いる いない、わからない 無回答	21 100.0% 33 100.0% 98 100.0% 766 100.0% 247 100.0%	3 14.3% 4 12.1% 6 6.1% 22 2.9% 10 4.0%	4 19.0% 4 21.2% 17 21.4% 113 13.8% 30 14.2%	4 9.5% 7 9.1% 21 12.2% 106 13.8% 35 14.2%	2 33.3% 3 42.4% 12 42.9% 77 56.4% 20 38.5%	7 4.8% 14 3.0% 42 1.0% 77 16.5% 20 22.3%	12 1.0% 205 2.2% 13 0.0% 91 0.0% 37 2.6% 254 3.5% 54.4 2.2% 0 0.0%

オ. 日頃の付き合いについて

	回答者数	明らかな差別がある	どちらかといえれば差別	ほとんど差別はない	差別はない	わからない	無回答	
全 体	1,165 100.0	21 1.8	110 9.4	210 18.0	188 16.1	567 48.7	69 5.9	
啓発接觸度	接觸なし・回答なし 1つ(1~6のうち) 2つ以上(")"	855 100.0% 230 100.0% 80 100.0%	13 1.5% 4 1.7% 4 5.0%	74 8.7% 21 9.1% 15 18.8%	141 16.5% 51 22.2% 18 22.5%	121 52.7% 53 38.7% 14 5.5%	451 64% 89 52% 27 52%	
学校での学習経験	小学校で学んだ 中学校で学んだ 高校・高等専修学校で学んだ 短大・大学・専門学校で学んだ はっきり覚えていない 学校で学んだ経験はない 学習経験回答なし	487 6.0% 370 5.4% 165 4.2% 76 3.9% 379 1.3% 127 1.6% 50 2.0%	9 1.8% 10 2.7% 5 3.0% 0 0.0% 3 0.8% 3 2.4% 0 0.0%	69 14.2% 49 20.5% 25 20.0% 16 21.1% 18 21.3% 9 15.0% 7 14.0%	107 22.0% 76 17.6% 33 17.5% 13 17.5% 54 22.5%	73 15.0% 65 17.6% 30 17.5% 14 17.5% 61 33.8% 27 25%	220 45.2% 163 52.7% 72 0.0% 14 1.3% 214 50.0% 27 2.5%	22 1.8% 7 1.9% 8 2.1% 0 0.0% 42 1.3% 27 0.7% 16 0.5%
身近な出発地	家族や親戚にいる 親しい友人にいる 知人に入いる いない、わからない 無回答	21 100.0% 33 100.0% 98 100.0% 766 100.0% 247 100.0%	3 14.3% 4 12.1% 6 6.1% 22 2.9% 10 4.0%	7 19.0% 7 21.2% 17 21.4% 113 13.8% 30 14.2%	3 9.5% 7 9.1% 21 12.2% 106 13.8% 35 14.2%	2 33.3% 3 42.4% 12 42.9% 77 56.4% 20 38.5%	5 4.8% 14 3.0% 42 1.0% 77 16.5% 20 22.3%	12 1.0% 205 2.2% 13 0.0% 91 0.0% 37 2.6% 254 3.5% 54.4 2.2% 0 0.0%

	回答者数	明らかな差別がある	どちらかといえれば差別	ほとんど差別はない	差別はない	わからない	無回答	
全 体	1,165 100.0	11.2 10.2%	34.1 30.7%	48.7 52.7%				
啓発接觸度	接觸なし・回答なし 1つ(1~6のうち) 2つ以上(")"	855 100.0% 230 100.0% 80 100.0%	1 1.5% 4 1.7% 4 5.0%	7 8.7% 21 9.1% 15 18.8%	1 52.7% 121 52.7% 12 1.9%	1 3.0% 91 51.5% 1 3.0%	48.7 30.7% 21.2 35.0% 1 1.0%	
学校での学習経験	小学校で学んだ 中学校で学んだ 高校・高等専修学校で学んだ 短大・大学・専門学校で学んだ はっきり覚えていない 学校で学んだ経験はない 学習経験回答なし	487 6.0% 370 5.4% 165 4.2% 76 3.9% 379 1.3% 127 1.6% 50 2.0%	9 1.8% 10 2.7% 5 3.0% 0 0.0% 3 0.8% 3 2.4% 0 0.0%	69 14.2% 76 20.5% 25 20.0% 16 21.1% 18 21.3% 9 15.0% 7 14.0%	107 22.0% 76 17.6% 33 17.5% 13 17.5% 54 33.8% 19 5.5% 3 1.3% 214 50.0% 27 2.5%	73 15.0% 65 17.6% 30 17.5% 14 17.5% 61 33.8% 27 2.5%	220 45.2% 163 52.7% 72 0.0% 14 1.3% 8 2.1% 0 0.0% 42 1.3% 27 0.7% 16 0.5%	23.8 40.0% 16.0% 37.0% 15.9% 38.1% 18.2% 38.2% 21.1% 27.6% 5.5% 30.3% 9.5% 36.3% 8.0% 20.0% 47.6 23.8 15.1 57.6 15.3 54.1 10.0 31.2 9.7 33.2 36.4
身近な出発地	家族や親戚にいる 親しい友人にいる 知人に入いる いない、わからない 無回答	21 100.0% 33 100.0% 98 100.0% 766 100.0% 247 100.0%	3 14.3% 4 12.1% 6 6.1% 22 2.9% 10 4.0%	7 19.0% 7 21.2% 17 21.4% 113 13.8% 30 14.2%	3 9.5% 7 9.1% 21 12.2% 106 13.8% 35 14.2%	2 33.3% 3 42.4% 12 42.9% 77 56.4% 20 38.5%	5 4.8% 14 3.0% 42 1.0% 77 16.5% 20 22.3%	23.8 40.0% 16.0% 37.0% 15.9% 38.1% 18.2% 38.2% 21.1% 27.6% 5.5% 30.3% 9.5% 36.3% 8.0% 20.0% 47.6 23.8 15.1 57.6 15.3 54.1 10.0 31.2 9.7 33.2 36.4

## 問14 同和問題について、次のような意見がありますが、あなたはどう思いますか。

ア. 部落差別はいけないことだが、

自分とは関係のない話である

	回答者数	そう思う	どちらかといえなない	どちらともいえない	どちらかといえなない	どちらともいえない	無回答	賛成	どちらともいえない	反対	
全 体	1,165 100.0	136 11.7	249 21.4	314 27.0	156 13.4	234 20.1	76 6.5	33.1	27.0	33.5	
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855 100.0%	109 12.7%	194 22.7%	240 28.1%	100 11.7%	146 17.1%	66 7.7%	35.4%	28.1%	28.8%
1つ(1~6のうち)	230 100.0%	23 10.0%	43 18.7%	54 23.5%	42 18.3%	60 26.1%	8 3.5%	28.7%	23.5%	44.4%	
2つ以上(〃)	80 100.0%	4 5.0%	12 15.0%	20 17.5%	14 17.5%	28 35.0%	2 2.5%	20.0%	25.0%	52.5%	
学校での学習経験	小学校で学んだ	487 100.0%	45 9.2%	100 20.5%	139 28.5%	81 16.6%	115 23.6%	7 1.4%	29.7%	28.5%	40.2%
中学校で学んだ	370 100.0%	28 7.6%	76 20.5%	109 29.5%	60 16.2%	92 24.9%	5 1.4%	28.1%	29.5%	41.1%	
高校・高等専修学校で学んだ	165 100.0%	13 7.9%	38 23.0%	43 26.1%	28 17.0%	41 24.8%	2 1.2%	30.9%	26.1%	41.8%	
短大・大学・専門学校で学んだ	76 100.0%	6 7.9%	17 22.4%	19 25.0%	11 14.5%	21 27.6%	2 2.6%	30.3%	25.0%	42.1%	
はっきり覚えていない	379 100.0%	56 14.8%	94 24.8%	104 27.4%	40 10.6%	53 14.0%	32 8.4%	39.6%	27.4%	24.6%	
学校で学んだ経験はない	127 100.0%	21 16.5%	23 18.1%	29 22.8%	15 11.8%	22 17.3%	17 13.4%	34.6%	22.8%	29.1%	
学習経験回答なし	50 100.0%	3 6.0%	7 14.0%	10 20.0%	5 10.0%	9 18.0%	16 32.0%	20.0%	20.0%	28.0%	
身近にいる	家族や親戚にいる	21 100.0%	1 4.8%	3 4.8%	1 4.3%	1 4.8%	15 71.4%	—	9.6	14.3	76.2
が同じ地	親しい友人にいる	33 100.0%	1 3.0%	3 9.1%	4 12.1%	9 27.3%	3 39.4%	3 9.1	12.1	12.1	66.7
か地区	知人にいる	98 100.0%	12 12.2%	20 20.4%	15 15.3%	14 14.3%	33 33.7%	4 4.1	32.6	15.3	48.0
出身者	いない、わからない	766 100.0%	95 12.4%	173 22.6%	226 29.5%	104 13.6%	137 17.9%	31 4.0	35.0	29.5	31.5
無回答	247 100.0%	27 10.9%	52 21.1%	66 26.7%	28 11.3%	36 14.6%	38 15.4%	32.0	26.7	25.9	

## イ. 同和地区の人々と、深く関わることにはためらいを感じる

ことにはためらいを感じる

	回答者数	そう思う	どちらかといえなない	どちらともいえない	どちらかといえなない	どちらともいえない	無回答	賛成	どちらともいえない	反対	
全 体	1,165 100.0	66 5.7	142 12.2	341 29.3	179 15.4	355 30.5	82 7.0	17.9	29.3	45.9	
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855 100.0%	55 6.4%	107 12.5%	261 30.5%	122 14.3%	238 27.8%	72 8.4%	18.9%	30.5%	42.1%
1つ(1~6のうち)	230 100.0%	9 3.9%	29 10.5%	62 27.8%	36 15.7%	87 37.8%	7 3.0%	16.5%	27.0%	53.5%	
2つ以上(〃)	80 100.0%	2 2.5%	6 7.5%	18 22.5%	21 26.3%	30 37.5%	3 3.8%	10.0%	22.5%	63.8%	
学校での学習経験	小学校で学んだ	487 100.0%	27 5.5%	61 12.5%	139 28.5%	82 16.6%	168 34.5%	10 2.1%	18.0%	28.5%	51.3%
中学校で学んだ	370 100.0%	21 5.7%	39 10.5%	103 27.8%	67 18.1%	131 35.4%	9 2.4%	16.2%	27.8%	53.5%	
高校・高等専修学校で学んだ	165 100.0%	5 3.0%	14 8.5%	55 33.3%	29 17.6%	60 36.4%	2 1.2%	11.5%	33.3%	54.0%	
短大・大学・専門学校で学んだ	76 100.0%	4 5.3%	16 7.9%	21 21.1%	17 22.4%	31 40.8%	2 2.6%	13.2%	21.1%	63.2%	
はっきり覚えていない	379 100.0%	17 4.5%	45 11.9%	121 31.9%	50 13.2%	109 28.8%	37 9.8%	16.4%	31.9%	42.0%	
学校で学んだ経験はない	127 100.0%	8 6.3%	19 15.0%	32 25.2%	21 16.5%	32 29.2%	15 11.8%	21.3%	25.2%	41.7%	
学習経験回答なし	50 100.0%	2 4.0%	4 8.0%	12 24.0%	5 10.0%	11 22.0%	16 32.0%	12.0%	24.0%	32.0%	
身近にいる	家族や親戚にいる	21 100.0%	1 4.8%	3 4.8%	1 4.3%	1 4.8%	15 71.4%	—	9.6	9.5	80.9
が同じ地	親しい友人にいる	33 100.0%	2 3.0%	4 9.1%	3 12.1%	3 27.3%	6 39.4%	2 9.1	12.1	12.1	66.7
か地区	知人にいる	98 100.0%	12 12.2%	20 20.4%	15 15.3%	14 14.3%	33 33.7%	4 4.1	32.6	15.3	48.0
出身者	いない、わからない	766 100.0%	95 12.4%	173 22.6%	226 29.5%	104 13.6%	137 17.9%	31 4.0	35.0	29.5	31.5
無回答	247 100.0%	27 10.9%	52 21.1%	66 26.7%	28 11.3%	36 14.6%	38 15.4%	32.0	26.7	25.9	

## ウ. 今まで差別されてきた同和地区の人たちのくやしさを

思えば、差別について厳しく追求するのも理解できる

	回答者数	そう思う	どちらかといえなない	どちらともいえない	どちらかといえなない	どちらともいえない	無回答	賛成	どちらともいえない	反対	
全 体	1,165 100.0	149 12.8	282 24.2	465 39.9	86 7.4	91 7.8	92 7.9	37.0	39.9	15.2	
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855 100.0%	93 10.9%	199 23.3%	358 41.9%	54 6.3%	72 8.4%	79 9.2%	34.2%	41.9%	14.7%
1つ(1~6のうち)	230 100.0%	42 18.3%	63 27.4%	76 33.0%	24 10.4%	13 5.7%	12 5.2%	45.7%	33.0%	16.1%	
2つ以上(〃)	80 100.0%	14 17.5%	20 25.0%	31 38.8%	8 10.0%	6 7.5%	1 1.3%	42.5%	38.8%	17.5%	
学校での学習経験	小学校で学んだ	487 100.0%	69 14.2%	137 28.1%	192 39.4%	35 7.8%	43 8.8%	11 2.3%	42.3%	39.4%	16.0%
中学校で学んだ	370 100.0%	57 15.4%	109 29.5%	139 37.6%	28 7.6%	30 8.1%	7 1.9%	44.9%	37.6%	15.7%	
高校・高等専修学校で学んだ	165 100.0%	31 18.8%	45 27.3%	67 40.6%	7 4.2%	13 7.9%	2 1.2%	46.1%	40.6%	12.1%	
短大・大学・専門学校で学んだ	76 100.0%	15 19.7%	14 18.4%	31 40.8%	9 11.8%	6 7.9%	1 1.3%	38.1%	40.8%	19.7%	
はっきり覚えていない	379 100.0%	33 8.7%	80 21.1%	173 37.8%	26 6.9%	23 6.1%	44 11.6%	29.8%	45.6%	13.0%	
学校で学んだ経験はない	127 100.0%	16 12.6%	20 15.7%	48 37.8%	11 8.7%	12 9.4%	20 15.7%	28.3%	37.8%	18.1%	
学習経験回答なし	50 100.0%	8 16.0%	5 10.0%	16 32.0%	4 8.0%	2 4.0%	15 30.0%	26.0%	32.0%	12.0%	
身近にいる	家族や親戚にいる	21 100.0%	9 42.9%	3 14.3%	5 23.8%	1 4.8%	—	57.2	23.8	19.1	
が同じ地	親しい友人にいる	33 100.0%	4 12.1%	6 18.2%	8 24.2%	7 15.2%	3 9.1%	30.3	24.2	36.4	
か地区	知人にいる	98 100.0%	13 13.3%	22 22.4%	41 41.8%	8 13.3%	1 1.0%	35.7	41.8	21.5	
出身者	いない、わからない	766 100.0%	98 12.8%	197 25.7%	322 42.0%	51 6.7%	57 7.4%	41 5.4%	38.5	42.0	14.1
無回答	247 100.0%	25 10.1%	54 21.9%	89 36.0%	19 7.7%	13 5.3%	47 19.0%	32.0	36.0	13.0	

## エ. 部落差別を許さない態度を身につけることは、

他の人権問題にもプラスになる

	回答者数	そう思う	どちらかといえなない	どちらともいえない	どちらかといえなない	どちらともいえない	無回答	賛成	どちらともいえない	反対
全 体	1,165 100.0	214 18.4	317 27.2	370 31.8	62 5.3	94 8.1	108 9.3	45.6	31.8	13.4
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855 100.0%	135 15.8%	287 25.0%	49 5.7%	81 9.5%	89 10.4%	40.8%	33.6%	15.2%
1つ(1~6のうち)	230 100.0%	54 23.5%	83 36.1%	57 24.8%	11 4.8%	10 4.3%	15 6.5%	59.6%	24.8%	9.1%
2つ以上(〃)	80 100.0%	25 31.3%	20 25.0%	26 32.5%	2 2.5%	3 3.8%	4 5.0%	56.3%	32.5%	6.3%
学校での学習経験	小学校で学んだ	487 100.0%	104 21.4%	160 32.9%	45 29.8%	28 5.7%	36 7.4%	28.9%	29.8%	13.1%
中学校で学んだ	370 100.0%	82 22.2%	128 34.6%	101 27.3%	20 5.4%	31 8.4%	8 2.2%	56.8%	27.3%	13.8%
高校・高等専修学校で学んだ	165 100.0%	41 46.1%	41 40.6%	57 12.1%	11 9.1%	10 15.1%	3 3.0%	53.9%	30.9%	13.3%
短大・大学・専門学校で学んだ	76 100.0%	25 38.1%	25 40.8%	20 19.7%	3 3.0%	3 6.0%	1 1.3%	60.5%	26.3%	11.8%
はっきり覚えていない	379 100.0%	54 32.9%	83 27.6%	138 39.3%	25 7.9%	30 7.9%	49 13.2%	36.1%	36.4%	14.5%
学校で学んだ経験はない	127 100.0%	18 14.2%	25 19.7%	42 33.1%	5 3.9%	13 10.2%	1 1.8%	33.9%	33.1%	14.1%
学習経験回答なし	50 100.0%	8 16.0%	7 14.0%	13 26.0%	0 0.0%	4 8.0%	18 36.0%	30.0%	26.0%	8.0%
身近にいる	家族や親戚にいる	21 100.0%	11 52.4%	3 14.3%	2 9.5%	2 14.3%	3 —	66.7	9.5	23.8
が同じ地	親しい友人にいる	33 100.0%	8 12.1%	9 18.2%	7 21.1%	5 1.4%	4 4.1%	51.5	27.3	9.1
か地区	知人にいる	98 100.0%	13 13.3%	22 22.4%	41 41.8%	8 4.1%	4 4.1%	47.9	34.7	13.3
出身者	いない、わからない	766 100.0%	98 12.8%	197 25.7%	322 42.0%	51 6.7%	57 7.4%	44.9	35.1	13.7
無回答	247 100.0%	25 10.1%	54 21.9%	89 36.0%	19 7.7%	13 5.3%	47 19.0%	44.1	22.7	12.1

才. 同和地区の人々は、差別されるくやしさを  
知っているだけに、差別に敏感な人が多い

	回答者数	そう思う	どちらかといえなさい	どちらともいえない	どちらないかといえなさい	そう思わない	無回答	賛成	どちらともいえない	反対
全 体	1,165 100.0	172 14.8	289 24.8	446 38.3	63 5.4	71 6.1	124 10.6	39.6	38.3	11.5
啓発接觸度		855 100.0%	118 13.8%	197 23.0%	333 38.9%	46 5.4%	58 6.8%	103 12.0%	36.8%	38.9%
1つ(1~6のうち)		230 100.0%	42 18.3%	63 27.4%	82 35.7%	13 5.7%	12 5.2%	18 7.8%	45.7%	35.7%
2つ以上("n")		80 100.0%	12 15.0%	29 36.3%	31 38.8%	4 5.0%	1 1.3%	3 3.8%	51.3%	38.8%
学校での学習経験		487 100.0%	90 18.5%	156 32.0%	187 38.4%	19 3.9%	20 4.1%	15 3.1%	50.5%	38.4%
小学校で学んだ		370 100.0%	67 18.1%	131 35.4%	129 34.9%	17 4.6%	15 4.1%	11 3.0%	53.5%	34.9%
中学校で学んだ		165 100.0%	28 17.0%	54 32.7%	65 39.4%	5 3.0%	9 5.5%	4 2.4%	49.7%	39.4%
高校・高等専修学校で学んだ		76 100.0%	13 17.1%	28 36.8%	27 35.5%	2 2.6%	3 3.9%	3 3.9%	53.9%	35.5%
短大・大学・専門学校で学んだ		379 100.0%	37 9.8%	69 18.2%	164 43.3%	24 6.3%	26 6.9%	59 15.6%	28.0%	43.3%
はつきり覚えていない		127 100.0%	14 11.0%	15 11.8%	49 38.6%	11 8.7%	14 11.0%	24 18.9%	22.8%	38.6%
学校で学んだ経験はない		50 100.0%	7 14.0%	5 10.0%	14 28.0%	0 0.0%	3 6.0%	21 42.0%	50.0%	28.0%
学習経験回答なし		247 100.0%	38 15.4%	52 21.1%	78 31.6%	6 2.4%	14 5.7%	59 23.9%	36.5%	31.6%
身近な人		21 100.0%	7 33.3%	5 23.8%	7 33.3%	2 9.5%	2 -	- -	57.1	33.3%
家族や親戚にいる		33 100.0%	7 21.2%	11 33.3%	7 21.2%	3 9.1%	3 9.1%	2 6.1%	54.5	21.2%
親しい友人にいる		98 100.0%	21 21.4%	32 33.3%	27 27.6%	7 7.1%	7 7.1%	4 4.1%	54.1	27.6%
知人にはいる		766 100.0%	99 12.9%	189 24.7%	327 42.7%	45 5.9%	47 6.1%	59 7.7%	37.6	42.7%
いらない、わからない		247 100.0%	38 15.4%	52 21.1%	78 31.6%	6 2.4%	14 5.7%	59 23.9%	36.5	31.6%
無回答		247 100.0%	60 24.3%	61 24.7%	52 21.1%	8 3.2%	12 4.9%	54 21.9%	49.0	21.1%

力. 同和地区の人々は、「差別、差別」と言って、  
被害者意識が強すぎる

	回答者数	そう思う	どちらかといえなさい	どちらともいえない	どちらないかといえなさい	そう思わない	無回答	賛成	どちらともいえない	反対
全 体	1,165 100.0	141 12.1	229 19.7	461 39.6	105 9.0	117 10.0	112 9.6	31.8	39.6	19.0
啓発接觸度		855 100.0%	110 12.9%	163 19.1%	342 40.0%	72 8.4%	75 8.8%	93 10.9%	32.0%	40.0%
1つ(1~6のうち)		230 100.0%	24 10.4%	47 20.4%	85 37.0%	28 12.2%	29 12.6%	17 7.4%	30.8%	37.0%
2つ以上("n")		80 100.0%	7 8.8%	19 23.8%	34 42.5%	5 6.3%	13 16.3%	2 2.5%	32.6%	42.5%
小学校で学んだ		487 100.0%	64 13.1%	96 19.7%	203 41.7%	57 11.7%	50 10.3%	17 3.5%	32.8%	41.7%
中学校で学んだ		370 100.0%	38 10.3%	76 20.5%	157 42.4%	44 11.9%	43 11.6%	12 3.2%	30.8%	42.4%
高校・高等専修学校で学んだ		165 100.0%	11 6.7%	30 18.2%	74 44.8%	23 13.9%	22 13.3%	5 3.0%	24.9%	44.8%
短大・大学・専門学校で学んだ		76 100.0%	5 6.6%	18 23.7%	34 44.7%	6 7.9%	10 13.2%	3 3.9%	30.3%	44.7%
はつきり覚えていない		379 100.0%	36 9.5%	72 19.0%	156 41.2%	28 7.4%	34 9.0%	53 14.0%	28.5%	41.2%
学校で学んだ経験はない		127 100.0%	22 17.3%	23 18.1%	42 33.1%	11 8.7%	11 8.7%	18 14.2%	35.4%	33.1%
学習経験回答なし		50 100.0%	2 4.0%	10 20.0%	12 24.0%	0 0.0%	7 14.0%	19 38.0%	24.0%	24.0%
身近な人		21 100.0%	3 14.3%	4 19.0%	4 9.5%	2 38.1%	8 -	- -	33.3	19.0%
家族や親戚にいる		33 100.0%	8 21.2%	7 21.2%	5 15.2%	7 21.2%	4 12.1%	2 6.1%	45.4	15.2%
親しい友人にいる		98 100.0%	19 19.4%	22 22.4%	34 34.7%	12 12.2%	8 8.2%	3 3.1%	41.8	34.7%
知人にはいる		766 100.0%	83 10.8%	139 18.1%	340 44.4%	74 9.7%	76 9.9%	54 7.0%	28.9	44.4%
いらない、わからない		247 100.0%	28 11.3%	57 23.1%	78 31.6%	10 4.0%	10 8.5%	21 21.5%	34.4	31.6%
無回答		247 100.0%	60 24.3%	61 24.7%	52 21.1%	8 3.2%	12 4.9%	54 21.9%	49.0	21.1%

キ. インターネット上に同和地区の所在地を載せることは  
部落差別を助長する深刻な問題行為だ

	回答者数	そう思う	どちらかといえなさい	どちらともいえない	どちらないかといえなさい	そう思わない	無回答	賛成	どちらともいえない	反対
全 体	1,165 100.0	329 28.2	307 26.4	311 28.7	42 3.6	56 4.8	120 10.3	54.6	26.7	8.4
啓発接觸度		855 100.0%	209 24.4%	227 26.5%	242 28.3%	31 3.6%	48 5.6%	88 11.5%	50.9%	28.3%
1つ(1~6のうち)		230 100.0%	83 36.1%	62 27.0%	50 21.7%	10 4.3%	7 3.0%	18 7.8%	63.1%	21.7%
2つ以上("n")		80 100.0%	37 46.3%	18 22.5%	19 23.8%	1 1.3%	1 1.3%	4 5.0%	68.8%	23.8%
小学校で学んだ		487 100.0%	150 30.8%	136 27.9%	143 29.4%	21 4.3%	21 4.3%	16 3.3%	58.7%	29.4%
中学校で学んだ		370 100.0%	121 32.7%	113 30.5%	97 26.2%	14 3.8%	13 3.5%	12 3.2%	63.2%	26.2%
高校・高等専修学校で学んだ		165 100.0%	57 34.5%	46 27.8%	46 27.8%	4 2.4%	8 4.8%	4 2.4%	62.4%	27.9%
短大・大学・専門学校で学んだ		76 100.0%	30 39.5%	22 21.1%	22 28.9%	3 3.9%	3 3.9%	2 2.6%	60.6%	28.9%
はつきり覚えていない		379 100.0%	90 23.7%	92 24.3%	109 28.8%	16 4.2%	16 4.2%	56 14.8%	48.0%	28.8%
学校で学んだ経験はない		127 100.0%	39 30.7%	23 18.1%	28 22.0%	2 1.6%	12 9.4%	23 18.1%	48.8%	22.0%
学習経験回答なし		50 100.0%	6 12.0%	10 20.0%	11 22.0%	1 2.0%	1 2.0%	21 42.0%	32.0%	22.0%
身近な人		21 100.0%	12 57.1%	2 9.5%	6 28.6%	- -	1 -	- -	66.6	28.6%
家族や親戚にいる		33 100.0%	8 24.2%	13 39.4%	4 12.1%	1 3.0%	3 9.1%	4 12.1%	63.6	12.1%
親しい友人にいる		98 100.0%	31 31.6%	29 29.6%	23 23.5%	3 3.1%	7 7.1%	5 5.1%	61.2	23.5%
知人にはいる		766 100.0%	218 28.5%	202 26.4%	226 29.5%	30 3.9%	33 4.3%	57 7.4%	54.9	29.5%
いらない、わからない		247 100.0%	60 28.5%	61 26.4%	52 29.5%	8 3.9%	12 4.3%	54 7.4%	61.2	23.5%
無回答		247 100.0%	60 24.3%	61 24.7%	52 21.1%	3.2	4.9%	54 21.9%	49.0	21.1%

問15 ①もし、あなたのお子さん(お子さんがいない場合は、いると仮定してお答えください)が恋愛をし、結婚をしたいと言っている相手が同和地区の人であった場合、あなたは親として、どのような態度をとると思いますか。

	回答者数	反対する	反対しながらも、結局は	賛成する	賛成しながらも、結局は	わからない	無回答	反対	賛成	わからない	
全 体	1,165	99	120	240	194	479	33	18.8	37.3	41.1	
	100.0	8.5	10.3	20.6	16.7	41.1	2.8	19.9%	34.1%	42.5%	
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855	77	93	168	124	363	30	16.1%	45.6%	37.0%
	100.0%	9.0%	10.9%	19.6%	14.5%	42.5%	3.5%				
	1つ(1~6のうち)	230	17	20	55	50	85	3	15.1%	46.3%	38.8%
	100.0%	7.4%	8.7%	23.9%	21.7%	37.0%	1.3%				
	2つ以上(〃)	80	5	7	17	20	31	0	16.8%	44.8%	37.4%
	100.0%	6.3%	8.8%	21.3%	25.0%	38.8%	0.0%				
学校での学習経験	小学校で学んだ	487	36	46	112	106	182	5	15.7%	47.3%	35.9%
	100.0%	7.4%	9.4%	23.0%	21.8%	37.4%	1.0%				
	中学校で学んだ	370	20	38	93	82	133	4	13.4%	49.7%	36.4%
	100.0%	5.4%	10.3%	25.1%	22.2%	35.9%	1.1%				
	高校・高等専修学校で学んだ	165	9	13	38	44	60	1	14.4%	46.1%	38.2%
	100.0%	5.5%	7.9%	23.0%	26.7%	36.4%	0.6%				
	短大・大学・専門学校で学んだ	76	2	9	16	19	29	1	17.1%	32.0%	48.8%
	100.0%	2.6%	11.8%	21.1%	25.0%	38.2%	1.3%				
	はっきり覚えていない	379	30	35	73	48	185	8	26.8%	28.3%	42.5%
	100.0%	7.9%	9.2%	19.3%	12.7%	48.8%	2.1%				
	学校で学んだ経験はない	127	19	15	22	14	54	3	16.0%	28.0%	26.0%
	100.0%	15.0%	11.8%	17.3%	11.0%	42.5%	2.4%				
	学習経験回答なし	50	3	5	8	6	13	15	9.5	66.6	23.8
	100.0%	6.0%	10.0%	16.0%	12.0%	26.0%	30.0%				
身近にが同じい和る地か区出身者	家族や親戚にいる	21	2	-	4	10	5	-	12.1	63.7	18.2
	100.0%	9.5%	-	19.0	47.6	23.8	-				
	親しい友人にいる	33	3	1	9	12	6	2	24.5	46.9	27.6
	100.0%	9.1%	3.0	27.3	36.4	18.2	6.1				
	知人による	98	13	11	26	20	27	1	17.9	36.7	43.9
	100.0%	13.3%	11.2%	26.5%	20.4%	27.6%	1.0%				
	いない、わからない	766	61	76	158	123	336	12	21.1	29.1	42.5
	100.0%	8.0%	9.9%	20.6%	16.1%	43.9%	1.6%				
	無回答	247	20	32	43	29	105	18			
	100.0%	20.6%	13.0%	17.4%	11.7%	42.5%	7.3				

問 15 ②もし、あなたが結婚しようとしている相手が同和地区の人であった場合、あなたの身近な人(おじ、おば、兄弟姉妹など)は、どのような態度をとると思いますか。

	回答者数	反対する	反対しながらも、結局は	賛成する	賛成しながらも、結局は	わからない	無回答	反対	賛成	わからない	
全 体	1,165	210	163	206	83	465	38	32.0	24.8	39.9	
	100.0	18.0	14.0	17.7	7.1	39.9	3.3				
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855	159	117	131	56	358	34	32.3%	21.8%	41.9%
	100.0%	18.6%	13.7%	15.3%	6.5%	41.9%	4.0%				
	1つ(1~6のうち)	230	37	37	54	20	79	3	32.2%	32.2%	34.3%
	100.0%	16.1%	16.1%	23.5%	8.7%	34.3%	1.3%				
	2つ以上(〃)	80	14	9	21	7	28	1	28.8%	35.1%	35.0%
	100.0%	17.5%	11.3%	26.3%	8.8%	35.0%	1.3%				
学校での学習経験	小学校で学んだ	487	96	77	106	51	152	5	35.5%	32.3%	31.2%
	100.0%	19.7%	15.8%	21.8%	10.5%	31.2%	1.0%				
	中学校で学んだ	370	74	62	83	34	113	4	36.8%	31.6%	30.5%
	100.0%	20.0%	16.8%	22.4%	9.2%	30.5%	1.1%				
	高校・高等専修学校で学んだ	165	29	19	29	24	63	1	29.1%	32.1%	38.2%
	100.0%	17.6%	11.5%	17.6%	14.5%	38.2%	0.6%				
	短大・大学・専門学校で学んだ	76	16	8	17	7	27	1	31.6%	31.6%	35.5%
	100.0%	21.1%	10.5%	22.4%	9.2%	35.5%	1.3%				
	はっきり覚えていない	379	46	44	54	21	201	13	23.7%	19.7%	53.0%
	100.0%	12.1%	11.6%	14.2%	5.5%	53.0%	3.4%				
	学校で学んだ経験はない	127	30	15	18	6	54	4	35.4%	18.9%	42.5%
	100.0%	23.6%	11.8%	14.2%	4.7%	42.5%	3.1%				
	学習経験回答なし	50	6	8	3	0	19	14	28.0%	6.0%	38.0%
	100.0%	12.0%	16.0%	6.0%	0.0%	38.0%	28.0%				
身近にが同じい和る地か区出身者	家族や親戚にいる	21	4	1	6	5	5	0	23.8	52.4	23.8
	100.0%	19.0%	4.8%	28.6%	23.6%	23.8%	0.0%				
	親しい友人にいる	33	11	4	8	3	5	2	45.4	33.3	15.2
	100.0%	33.3%	12.1%	24.2	9.1%	15.2	6.1%				
	知人による	98	22	17	20	7	31	1	39.7	27.5	31.6
	100.0%	22.4%	17.3%	20.4	7.1%	31.6	1.0%				
	いない、わからない	766	122	111	134	62	323	14	30.4	25.6	42.2
	100.0%	15.9%	14.5%	17.5	8.1%	42.2	1.8%				
	無回答	247	51	30	38	6	101	21	32.7	17.8	40.9
	100.0%	20.6%	12.1%	15.4	2.4%	40.9%					

問16 もし、日頃から親しく述べている人が、なにかのことで同和地区出身の人であることがわかった場合、あなたはどうしますか。

	回答者数	親しくまできとあうじよううに	いが表は避けきにはいるはいだつけきつあきうあ	うつきあいはやめてしま	わからぬいはやめてしま	無回答
全 体	1,165 100.0	837 71.8	81 7.0	10 0.9	203 17.4	34 2.9
啓発接觸度		接触なし-回答なし 100.0%	855 67.8%	580 7.6%	65 0.7%	172 20.1%
		1つ(1~6のうち) 100.0%	230 82.2%	189 5.7%	13 0.9%	24 10.4%
		2つ以上(〃) 100.0%	80 85.0%	68 3.8%	31 2.5%	7 8.8%
学校で学習経験		小学校で学んだ 100.0%	487 79.1%	385 4.9%	24 0.6%	72 14.8%
		中学校で学んだ 100.0%	370 81.6%	302 4.1%	15 0.5%	50 13.5%
		高校・高等専修学校で学んだ 100.0%	165 78.8%	130 4.2%	7 0.6%	25 15.2%
		短大・大学・専門学校で学んだ 100.0%	76 86.8%	66 2.6%	2 0.0%	7 9.2%
		はっきり覚えていない 100.0%	379 66.2%	251 8.4%	32 1.6%	81 21.4%
		学校で学んだ経験はない 100.0%	127 66.9%	85 11.0%	14 0.0%	22 17.3%
		学習経験回答なし 100.0%	50 42.0%	21 12.0%	6 0.0%	9 18.0%
身近な地区出身		家族や親戚にいる 100.0%	21 95.2%	20 —	— —	1 4.8%
		親しい友人にいる 100.0%	33 93.9%	31 —	— —	1 3.0%
		知人による 100.0%	98 89.8%	88 6.1	6 —	4 4.1%
		いない、わからない 100.0%	766 72.2%	553 6.5	50 0.9	7 18.4%
		無回答 100.0%	247 58.7	145 10.1	25 1.2	3 22.7
						7.3

問17 もし、あなたが、家を購入したり、マンションを借りたりするなど住宅を選ぶ際に、同和地区にある物件、もしくは小中学校区に同和地区がある物件ならばどのようにすると思いますか。

	回答者数	る校同と区和思に地区あるや物同件じは小中避中學は	な校避同い区け和思あが区うる、で物同あ件じるは小中件け學は	わいらずなれいとあうてもこだ	わからぬいとあうてもこだ	無回答
全 体	1,165 100.0	278 23.9	118 10.1	268 23.0	460 39.5	41 3.5
啓発接觸度		接触なし-回答なし 100.0%	855 24.0%	205 10.5%	163 19.1%	359 42.0%
		1つ(1~6のうち) 100.0%	230 24.8%	57 8.3%	19 31.3%	79 34.3%
		2つ以上(〃) 100.0%	80 20.0%	16 11.3%	9 41.3%	33 27.5%
学校で学習経験		小学校で学んだ 100.0%	487 30.4%	148 12.7%	62 25.1%	122 31.0%
		中学校で学んだ 100.0%	370 27.0%	100 11.9%	44 25.9%	96 34.6%
		高校・高等専修学校で学んだ 100.0%	165 21.2%	35 10.3%	17 30.3%	61 37.0%
		短大・大学・専門学校で学んだ 100.0%	76 27.6%	21 9.2%	7 30.3%	23 31.6%
		はっきり覚えていない 100.0%	379 17.2%	65 7.7%	29 23.2%	88 49.3%
		学校で学んだ経験はない 100.0%	127 22.0%	29 8.7%	11 18.1%	23 44.9%
		学習経験回答なし 100.0%	50 12.0%	6 0.0%	0 20.0%	10 32.0%
身近な地区出身		家族や親戚にいる 100.0%	21 14.3	3 9.5	2 66.7	2 9.5
		親しい友人にいる 100.0%	33 33.3	11 15.2	5 36.4	4 12.1
		知人による 100.0%	98 34.7	34 11.2	11 30.6	1 22.4
		いない、わからない 100.0%	766 23.2	178 9.9	76 21.9	168 42.6
		無回答 100.0%	247 21.1	52 9.7	24 17.8	44 42.9
						106 8.5

問18 問17で、「1」「2」と答えた方にお聞きします。あなたはなぜそのように思うのですか。

	回答者数	るこ かわ ら い イ メ ー ジ が あ	者自 と分 思も わ同 れ和 る地 か区 から出 身	か方周 らがり よの い人 とか 言ら わ避 れけ るた	そ の 他	無 回 答
全 体	396	131 33.1	84 21.2	115 29.0	61 15.4	5 1.3
啓発接觸度	接触なし・回答なし	295 34.6%	102 21.0%	62 26.1%	77 16.9%	4 1.4%
	1つ(1~6のうち)	76 28.9%	22 21.1%	16 39.5%	30 9.2%	7 1.3%
	2つ以上(〃)	25 28.0%	7 24.0%	6 32.0%	8 16.0%	4 0.0%
学校での学習経験	小学校で学んだ	210 36.2%	76 16.7%	35 24.8%	52 21.4%	2 1.0%
	中学校で学んだ	144 38.2%	55 13.9%	20 29.2%	42 17.4%	25 1.4%
	高校・高等専修学校で学んだ	52 32.7%	17 13.5%	7 30.8%	16 23.1%	12 0.0%
	短大・大学・専門学校で学んだ	28 28.6%	8 14.3%	4 25.0%	7 32.1%	9 0.0%
	はっきり覚えていない	94 24.5%	23 27.7%	26 37.2%	35 8.5%	8 2.1%
	学校で学んだ経験はない	39 25.6%	10 25.6%	10 38.5%	15 10.3%	4 0.0%
	学習経験回答なし	6 50.0%	3 0.0%	0 0.0%	0 50.0%	0 0.0%

問19 あなたは、過去5年ほどの間に、同和地区の人々に対する差別的な言動や落書きを見聞きしたことありますか。

	回答者数	見 聞 き し た こ と が あ る	見 聞 き し た こ と は な い	無 回 答
全 体	1,165 100.0%	65 5.6%	1051 90.2%	49 4.2%
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855 100.0%	37 4.3%	773 90.4%
	1つ(1~6のうち)	230 100.0%	18 7.8%	209 90.9%
	2つ以上(〃)	80 100.0%	10 12.5%	69 86.3%
学校での学習経験	小学校で学んだ	487 100.0%	33 6.8%	448 92.0%
	中学校で学んだ	370 100.0%	26 7.0%	339 91.6%
	高校・高等専修学校で学んだ	165 100.0%	12 7.3%	151 91.5%
	短大・大学・専門学校で学んだ	76 100.0%	8 10.5%	67 88.2%
	はっきり覚えていない	379 100.0%	10 2.6%	355 93.7%
	学校で学んだ経験はない	127 100.0%	4 3.1%	115 90.6%
	学習経験回答なし	50 100.0%	4 8.0%	28 56.0%
				18 36.0%

問20 問19で、「1.見聞きしたことがある」と答えた方にお聞きします。その時あなたは、どうしましたか。

	回答者数	た差別と気づき、指摘し	頼に差ん指別だ摘とし気てづもきら、う他よのう人	か思な差つつけ別たかれとがば気、なづ何らきもな、でい何きとかな	に差せ別ずとそわのかまつまたにがし、た氣	その他	無回答
全 体	65	8	2	19	27	8	1
		12.3%	3.1%	29.2%	41.5%	12.3%	1.5%
啓発接觸度	接触なし・回答なし	37	2	1	10	17	6
		5.4%	2.7%	27.0%	45.9%	16.2%	2.7%
	1つ(1~6のうち)	18	2	0	6	9	1
		11.1%	0.0%	33.3%	50.0%	5.6%	0.0%
	2つ以上(〃)	10	4	1	3	1	1
		40.0%	10.0%	30.0%	10.0%	10.0%	0.0%
学校での学習経験	小学校で学んだ	33	3	0	12	12	6
		9.1%	0.0%	36.4%	36.4%	18.2%	0.0%
	中学校で学んだ	26	3	0	7	13	2
		11.5%	0.0%	26.9%	50.0%	7.7%	3.8%
	高校・高等専修学校で学んだ	12	3	0	1	7	1
		25.0%	0.0%	8.3%	58.3%	8.3%	0.0%
	短大・大学・専門学校で学んだ	8	2	1	1	4	0
		25.0%	12.5%	12.5%	50.0%	0.0%	0.0%
	はっきり覚えていない	10	0	0	5	4	1
		0.0%	0.0%	50.0%	40.0%	10.0%	0.0%
	学校で学んだ経験はない	4	1	0	0	2	1
		25.0%	0.0%	0.0%	50.0%	25.0%	0.0%
	学習経験回答なし	4	0	1	0	3	0
		0.0%	25.0%	0.0%	75.0%	0.0%	0.0%

問21 部落差別をなくすことについて、次のような考え方があります。あなたはどう思いますか。

ア. 「差別、差別」と騒がないで、そっと

イ. 部落差別はすでに深刻な問題ではない

しておけば、自然に差別はなくなる

	回答者数	そう思う	思どちらかといえなそう	どちらともいえな	思どちらかといえなそう	そう思わない	無回答	賛成	どちらともいえな	反対	回答者数	そう思う	思どちらかといえなそう	どちらともいえな	思どちらかといえなそう	思どちらかといえなそう	そう思わない	無回答	賛成	どちらともいえな	反対
全 体	1,165	224	262	279	140	189	71	41.7	23.9	28.2	1,165	131	260	400	159	131	84	33.5	34.3	24.8	
	100.0	19.2	22.5	23.9	12.0	16.2	6.1	41.0%	25.5%	26.1%	100.0	11.2	22.3	34.3	13.6	11.2	7.2	33.3%	36.0%	22.3%	
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855	173	178	218	100	123	63	41.0%	25.5%	26.1%	855	104	180	308	108	83	72	37.4%	27.0%	31.7%
	100.0%	20.2%	20.8%	25.5%	11.7%	14.4%	7.4%				100.0%	12.2%	21.1%	36.0%	12.6%	9.7%	8.4%				
	1つ(1~6のうち)	230	44	65	39	30	46	6	47.4%	17.0%	33.0%	230	24	62	62	40	33	9	26.3%	37.5%	32.6%
	100.0%	19.1%	28.3%	17.0%	13.0%	20.0%	2.6%				100.0%	10.4%	27.0%	27.0%	17.4%	14.3%	3.9%				
	2つ以上(〃)	80	7	19	22	10	20	2	32.6%	27.5%	37.5%	80	3	18	30	11	15	3	29.1%	35.5%	33.5%
	100.0%	8.8%	23.8%	27.5%	12.5%	25.0%	2.5%				100.0%	3.8%	22.5%	37.5%	13.8%	18.8%	3.8%				
学校での学習経験	小学校で学んだ	457	65	96	134	88	96	6	33.0%	27.5%	37.8%	457	40	102	173	95	68	9	28.7%	35.7%	34.3%
	100.0%	13.3%	19.7%	27.5%	18.1%	19.7%	1.6%				100.0%	8.2%	20.9%	35.5%	19.5%	14.0%	1.8%				
	中学校で学んだ	370	48	76	98	62	81	5	33.5%	26.5%	38.7%	370	25	81	132	66	61	5	26.1%	37.6%	35.2%
	100.0%	13.0%	20.5%	26.5%	16.8%	21.9%	1.4%				100.0%	6.6%	21.9%	35.7%	17.8%	16.5%	1.4%				
	高校・高等専修学校で学んだ	165	27	27	42	28	39	2	32.8%	25.5%	40.6%	165	17	26	62	30	28	2	21.1%	47.4%	29.0%
	100.0%	16.4%	24.5%	25.5%	17.0%	23.6%	1.2%				100.0%	10.3%	15.8%	37.6%	18.2%	17.0%	1.2%				
	短大・大学・専門学校で学んだ	76	9	16	15	9	25	2	32.9%	19.7%	44.7%	76	4	12	36	12	10	2	35.4%	36.7%	18.2%
	100.0%	11.8%	21.1%	19.7%	11.8%	32.9%	2.6%				100.0%	5.3%	15.8%	47.4%	15.8%	13.2%	2.6%				
	はっきり覚えていない	379	79	100	85	30	57	28	47.2%	22.4%	22.9%	379	40	94	139	39	30	37	47.3%	26.8%	13.4%
	100.0%	20.8%	26.4%	22.4%	7.9%	15.0%	7.4%				100.0%	10.6%	24.8%	36.7%	10.3%	7.9%	9.8%				
	学校で学んだ経験はない	127	45	30	25	5	8	14	59.0%	19.7%	10.2%	127	26	34	34	9	8	16	30.0%	24.0%	12.0%
	100.0%	35.4%	23.6%	19.7%	6.3%	6.3%	11.0%				100.0%	20.5%	26.8%	26.8%	7.1%	6.3%	12.6%				
	学習経験回答なし	50	11	9	6	4	3	17	40.0%	12.0%	14.0%	50	10	5	12	2	4	17	33.1%	37.2%	24.6%
	100.0%	22.0%	18.0%	12.0%	8.0%	6.0%	34.0%				100.0%	20.0%	10.0%	24.0%	4.0%	8.0%	34.0%				
身近者に同じ人いるか出身	家族や親戚にいる	21	2	2	5	3	8	1	19.0%	23.8%	52.4	21	2	4	5	1	8	1	28.5%	23.8%	42.9%
	100.0%	9.5	9.5	23.8	14.3	38.1	4.8				100.0%	19.0	23.8	4.8	38.1	4.8					
	親しい友人にいる	33	9	6	5	6	6	1	45.5%	15.2%	36.4	33	5	11	7	5	4	1	48.5%	21.2%	27.3%
	100.0%	27.3	18.2	15.2	18.2	18.2	3.0				100.0%	15.2	33.3	21.2	15.2	12.1	3.0				
	知人にいる	98	19	23	16	15	22	3	42.9%	16.3	37.7	98	10	26	32	12	15	3	36.7%	32.7%	27.5%
	100.0%	19.4	23.5	16.3	15.3	22.4	3.1				100.0%	10.2	26.5	32.7	12.2	15.3	3.1				
	しない、わからない	766	139	174	207	92	121	33	40.8%	27.0	27.8	766	84	169	285	110	78	40	33.1%	37.2%	24.6%
	100.0%	18.1	22.7	27.0	12.0	15.8	4.3				100.0%	11.0	22.1	37.2	14.4	10.2	5.2				
	無回答	247	55	57	46	24	32	33	45.4%	18.6	22.7	247	30	50	71	31	26	39	32.3%	28.7	23.1%
	100.0%	22.3	23.1	18.6	9.7	13.0	13.4				100.0%	12.1	20.2	28.7	12.6	10.5	15.8				

ウ. 私たちが、もっと人権意識にめざめ、差別を許さない態度と行動力を身につければ差別はなくなる

	回答者数	そう思う	思どうちらかといえばそう	どちらともいえない	どちらともいえない	そう思わない	無回答	賛成	どちらともいえない	反対
全 体	1,165 100.0	174 14.9	355 30.5	392 33.6	79 6.8	66 5.7	99 8.5	45.4	33.6	12.5
啓発接觸度		855 100.0%	111 13.0%	246 28.8%	302 35.3%	58 6.8%	55 6.4%	83 9.7%		
1つ(1~6のうち)		230 100.0%	46 20.0%	82 35.7%	63 27.4%	16 7.0%	9 3.9%	14 6.1%		
2つ以上(〃)		80 100.0%	17 21.3%	27 33.8%	27 33.8%	5 6.3%	2 2.5%	2 2.5%		
学校での学習経験		487 100.0%	65 13.3%	163 33.5%	184 37.8%	35 7.2%	31 6.4%	9 1.8%		
小学校で学んだ		370 100.0%	54 14.6%	127 34.3%	131 35.4%	31 8.4%	23 6.2%	4 1.1%		
中学校で学んだ		165 100.0%	26 15.8%	52 31.5%	59 35.8%	14 8.5%	12 7.3%	2 1.2%		
高校・高等専修学校で学んだ		76 100.0%	16 21.1%	23 30.3%	27 35.5%	4 5.3%	5 6.6%	1 1.3%		
短大・大学・専門学校で学んだ		379 100.0%	53 14.0%	106 28.5%	129 34.0%	24 6.3%	19 5.0%	46 12.1%		
はっきり覚えていない		127 100.0%	24 16.9%	33 26.0%	34 26.8%	5 3.9%	9 7.1%	22 17.3%		
学校で学んだ経験はない		50 100.0%	6 12.0%	12 24.0%	11 22.0%	2 4.0%	2 4.0%	17 34.0%		
学習経験回答なし		247 100.0%	39 15.8%	69 27.9%	71 28.7%	10 4.0%	13 5.3%	45 18.2%		
身近な者にいる		21 100.0%	6 28.6%	3 14.3%	4 19.0%	2 9.5%	5 23.8%	1 4.8		
親しい友人にいる		33 100.0%	6 18.2%	13 39.4%	9 27.3%	3 9.1	— —	2 6.1		
が同じい和る地区		98 100.0%	16 16.3%	33 33.7%	30 30.6%	12 12.2%	4 4.1	3 3.1		
知らない、わからない		766 100.0%	107 14.0%	237 30.9%	278 36.3%	52 6.8%	44 5.7%	48 6.3%		
出身		247 100.0%	39 15.8%	69 27.9%	71 28.7%	10 4.0%	13 5.3%	45 18.2%		
無回答		247 100.0%	39 15.8%	69 27.9%	71 28.7%	10 4.0%	13 5.3%	45 18.2%		

工. 同和地区の人々が、自らの状況を良くするよう努力しなければ、差別はなくなる

	回答者数	そう思う	思どうちらかといえばそう	どちらともいえない	どちらともいえない	思わない	無回答	賛成	どちらともいえない	反対
全 体	1,165 100.0	113 9.7	243 20.9	470 40.3	134 11.5	105 9.0	100 8.6	30.6	40.3	20.5
啓発接觸度		855 100.0%	82 9.6%	175 20.5%	363 42.5%	86 10.1%	66 7.7%	83 9.7%		
1つ(1~6のうち)		230 100.0%	23 10.0%	47 20.4%	80 34.8%	36 15.7%	29 12.6%	15 6.5%		
2つ以上(〃)		80 100.0%	8 21.3%	21 33.8%	27 33.8%	12 15.0%	10 12.5%	2 2.5%		
学校での学習経験		487 100.0%	40 8.2%	100 20.5%	211 43.3%	76 15.6%	47 9.7%	13 2.7%		
小学校で学んだ		370 100.0%	29 7.8%	80 21.6%	158 42.7%	65 17.6%	32 8.6%	6 1.6%		
中学校で学んだ		165 100.0%	9 5.5%	31 18.8%	73 44.2%	26 15.8%	23 13.9%	3 1.8%		
高校・高等専修学校で学んだ		76 100.0%	5 6.6%	21 27.6%	30 39.5%	8 10.5%	10 13.2%	2 2.6%		
短大・大学・専門学校で学んだ		379 100.0%	25 6.6%	80 21.1%	163 43.0%	36 9.5%	35 9.2%	40 10.6%		
はっきり覚えていない		127 100.0%	28 22.0%	56 19.7%	86 28.3%	9 7.1%	22 5.5%	22 17.3%		
学校で学んだ経験はない		50 100.0%	5 10.0%	8 16.0%	13 31.0%	1 3.0%	3 7.3%	20 40.0%		
学習経験回答なし		247 100.0%	30 12.0%	53 22.0%	92 40.0%	14 4.0%	15 6.0%	43 40.0%		
身近な者にいる		21 100.0%	3 14.3%	4 19.0%	6 29.3%	1 5.7%	2 9.8%	2 9.5%		
親しい友人にいる		33 100.0%	3 14.3%	8 34.4%	14 59.1%	3 1.4%	3 1.4%	2 6.1		
が同じい和る地区		98 100.0%	16 16.3%	33 33.7%	30 30.6%	12 12.2%	4 4.1	3 3.1		
知らない、わからない		766 100.0%	107 14.0%	237 30.9%	278 36.3%	52 6.8%	44 5.7%	48 6.3%		
出身		247 100.0%	39 15.8%	69 27.9%	71 28.7%	10 4.0%	13 5.3%	45 18.2%		
無回答		247 100.0%	39 15.8%	69 27.9%	71 28.7%	10 4.0%	13 5.3%	45 18.2%		

オ. 同和地区の人々が分散して住むようにすれば差別はなくなる

	回答者数	そう思う	思どうちらかといえばそう	どちらともいえない	どちらともいえない	思わない	無回答	賛成	どちらともいえない	反対
全 体	1,165 100.0	101 8.7	221 19.0	442 37.9	120 10.3	186 16.0	95 8.2	27.7	37.9	26.3
啓発接觸度		855 100.0%	70 8.2%	171 20.0%	333 38.9%	72 15.0%	81 9.5%	28.2%	38.9%	23.4%
1つ(1~6のうち)		230 100.0%	24 10.4%	33 14.3%	83 36.1%	38 16.5%	12 7.4%	24.7%	36.1%	33.9%
2つ以上(〃)		80 100.0%	7 8.8%	17 21.3%	26 32.5%	10 22.5%	2 2.5%	30.1%	32.5%	35.0%
学校での学習経験		487 100.0%	44 9.0%	92 18.9%	197 40.5%	57 11.7%	85 17.5%	27.9%	40.5%	29.2%
小学校で学んだ		370 100.0%	29 7.8%	71 19.2%	154 41.6%	44 11.9%	66 17.8%	27.0%	41.6%	29.7%
中学校で学んだ		165 100.0%	14 8.5%	26 15.8%	67 40.6%	16 9.7%	38 23.0%	24.3%	40.6%	32.7%
高校・高等専修学校で学んだ		76 100.0%	8 10.5%	18 23.7%	26 34.2%	8 10.5%	14 18.4%	34.2%	34.2%	28.9%
短大・大学・専門学校で学んだ		379 100.0%	20 5.3%	63 16.6%	155 40.9%	44 11.6%	59 15.6%	21.9%	40.9%	27.2%
はっきり覚えていない		127 100.0%	17 13.4%	29 22.8%	35 27.6%	8 6.3%	17 13.4%	36.2%	27.6%	19.7%
学校で学んだ経験はない		50 100.0%	6 12.0%	8 16.0%	11 22.0%	3 6.0%	3 6.0%	28.0%	22.0%	12.0%
学習経験回答なし		247 100.0%	22 8.9%	48 19.4%	85 34.4%	22 8.9%	28 11.3%	23.8%	23.8%	47.7%
身近な者にいる		21 100.0%	2 9.5%	3 14.3%	238 23.8%	5 4.8%	2 4.8%	23.8%	23.8%	47.7%
親しい友人にいる		33 100.0%	5 15.2%	4 12.1%	139 39.4%	3 9.1%	2 15.2%	27.3%	39.4%	32.7%
が同じい和る地区		98 100.0%	16 16.3%	19 19.4%	29 29.6%	10 10.2%	20 20.4%	35.7%	29.6%	30.6%
知らない、わからない		766 100.0%	56 7.3%	147 19.2%	310 40.5%	84 11.0%	123 16.1%	26.5%	40.5%	27.1%
出身		247 100.0%	22 8.9%	48 19.4%	85 34.4%	22 8.9%	28 11.3%	28.3%	34.4%	20.2%
無回答		247 100.0%	22 8.9%	48 19.4%	85 34.4%	22 8.9%	28 11.3%	28.3%	34.4%	20.2%

力. 同和地区の人々は、「差別がある」と声高に主張しそうだと思う

	回答者数	そう思う	思どうちらかといえばそう	どちらともいえない	どちらともいえない	思わない	無回答	賛成	どちらともいえない	反対	
全 体	1,165 100.0	146 12.5	236 20.3	452 38.8	118 10.1	114 9.8	99 8.5	32.8	38.8	19.9	
啓発接觸度		855 100.0%	108 12.6%	346 20.5%	80 40.5%	68 8.0%	75 8.8%	33.1%	40.5%	16.8%	
1つ(1~6のうち)		230 100.0%	28 11.1%	44 17.3%	80 42.7%	36 14.6%	28 12.2%	31.3%	34.8%	27.9%	
2つ以上(〃)		80 100.0%	10 12.5%	17 27.1%	26 66%	14 27%	11 25%	33.8%	32.5%	31.3%	
学校での学習経験		487 100.0%	60 12.3%	95 19.5%	200 41.1%	63 12.9%	56 11.5%	13 2.7%	31.8%	41.1%	24.4%
小学校で学んだ		370 100.0%	41 11.1%	64 17.3%	158 42.7%	54 14.6%	45 12.2%	8 2.2%	28.4%	42.7%	26.8%
中学校で学んだ		165 100.0%	17 10.3%	27 16.4%	66 40.4%	27 16.4%	25 15.2%	3 1.8%	26.7%	40.0%	31.6%
高校・高等専修学校で学んだ		76 100.0%	8 10.5%	10 13.2%	30 39.5%	14 18.4%	12 15.8%	2 2.6%	23.7%	39.5%	34.2%
短大・大学・専門学校で学んだ		379 100.0%	31 8.2%	85 22.4%	157 41.4%	30 7.9%	37 9.8%	39 10.3%	30.6%	41.4%	17.7%
はっきり覚えていない		127 100.0%	29 12.7%	24 22.4%	39 22.4%	8 7	7 20	21.7%	30.7%	11.8%	
学校で学んだ経験はない		50 100.0%	5 8.0%	8 11.0%	11 31.0%	3 9.6%	2 6.0%	21 42.0%	26.0%	22.0%	10.0%
学習経験回答なし		247 100.0%	36 14.6%	53 21.5%	33.2 37.2%	16 6.5%	18 7.3%	23.8 33.2	33.2	33.2	13.8
身近な者にいる		21 100.0%	2 9.5%	3 14.3%	333 33.3	7 9.5%	6 8.8%	1 4.8%	23.8	33.3	38.1
親しい友人にいる		33 100.0%	5 15.2%	4 12.1%	139 39.4%	3 9.1%	2 6.1%	2 6.1%	39.4	24.2	30.3
が同じい和る地区		98 100.0%	16 16.3%	19 19.4%	22 26.5%	11 11.2%	9 9.2%	6 6.1%	46.9	26.5	20.4
知らない、わからない		766 100.0%	56 7.3%	147 19.2%	310 40.5%	84 11.0%	123 16.1%	40.5%	29.9	43.0	20.9
出身		247 100.0%	22 8.9%	48 19.4%	85 34.4%	22 8.9%	28 11.3%	28.3%	36.1	33.2	13.8
無回答		247 100.0%	22 8.9%	48 19.4%	85 34.4%	22 8.9%	28 11.3%	28.3%	36.1	33.2	13.8

## キ. 同和地区と周辺の地域の人々が交流を深め、協働して

差別のない「まちづくり」を進めると差別はなくなる

	回答者数	そう思う	うど思ちらかといえばこそ	どちらともいえばそ	どちらともいえばそ	うど思ちらかといえばそ	うど思ちらかといえばそ	うど思ちらかといえばそ	うど思ちらかといえばそ	無回答	賛成	どちらともいえな	反対
全 体	1,165	146	370	422	66	65	96						
	100.0	12.5	31.8	36.2	5.7	5.6	8.2						
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855	104	246	331	42	51	81					
	100.0%	12.2%	28.8%	38.7%	4.9%	6.0%	9.5%						
	1つ(1~6のうち)	230	31	86	69	20	11	13					
	100.0%	13.5%	37.4%	30.0%	8.7%	4.8%	5.7%						
	2つ以上("n")	80	11	38	22	4	3	2					
	100.0%	13.8%	47.5%	27.5%	5.0%	3.8%	2.5%						
学校での学習経験	小学校で学んだ	487	53	164	190	39	29	12					
	100.0%	10.9%	33.7%	39.0%	8.0%	6.0%	2.5%						
	中学校で学んだ	370	41	135	144	29	14	7					
	100.0%	11.1%	36.5%	38.9%	7.8%	3.8%	1.9%						
	高校・高等専修学校で学んだ	165	26	56	65	8	6	4					
	100.0%	15.8%	33.9%	39.4%	4.8%	3.6%	2.4%						
	短大・大学・専門学校で学んだ	76	5	31	28	5	5	2					
	100.0%	6.6%	40.8%	36.8%	6.6%	6.6%	2.6%						
	はっきり覚えてない	379	44	111	151	12	22	39					
	100.0%	11.6%	29.3%	39.8%	3.2%	5.8%	10.3%						
	学習経験はない	127	25	32	36	8	6	20					
	100.0%	19.7%	25.2%	28.3%	6.3%	4.7%	15.7%						
	学習経験回答なし	50	3	16	9	1	2	19					
	100.0%	6.0%	32.0%	18.0%	2.0%	4.0%	38.0%						
身近にいる人	家族や親戚にいる	21	7	4	4	1	3	2					
	100.0%	33.3%	19.0%	19.0%	4.8	14.3	9.5						
	親しい友人にいる	33	4	12	9	1	5	2					
	が同い和いる地	100.0%	12.1%	36.4%	27.3	3.0	15.2	6.1					
	か地区出	98	14	35	27	14	5	3					
	いない、わからない	100.0%	14.3%	35.7%	27.6	14.3	5.1	3.1					
	出身者	766	85	253	302	40	38	48					
	100.0%	11.1%	33.0%	39.4%	5.2	5.0	6.3						
	無回答	247	36	66	80	10	14	41					
	100.0%	14.6%	26.7	32.4	4.0	5.7	16.8						

## ク. 私たちが差別の解消に向けて、行動を

起こしていくことが重要である

	回答者数	そう思う	うど思ちらかといえばこそ	どちらともいえばそ	どちらともいえばそ	うど思ちらかといえばそ	うど思ちらかといえばそ	うど思ちらかといえばそ	うど思ちらかといえばそ	無回答	賛成	どちらともいえな	反対
全 体	1,165	203	363	410	41	51	97						
	100.0	17.4	31.2	35.2	3.5	4.4	8.3						
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855	130	248	328	27	39	83					
	100.0%	15.2%	29.0%	38.4%	3.2%	4.6%	9.7%						
	1つ(1~6のうち)	230	53	85	60	11	9	12					
	100.0%	23.0%	37.0%	26.1%	4.8%	3.9%	5.2%						
	2つ以上("n")	80	20	30	22	3	3	2					
	100.0%	25.0%	37.5%	27.5%	3.8%	3.8%	2.5%						
学校での学習経験	小学校で学んだ	487	89	173	176	18	19	12					
	100.0%	18.3%	35.5%	36.1%	3.7%	3.9%	2.5%						
	中学校で学んだ	370	77	116	146	9	15	7					
	100.0%	20.8%	31.4%	39.5%	2.4%	4.1%	1.9%						
	高校・高等専修学校で学んだ	165	41	45	65	3	9	2					
	100.0%	24.8%	27.3%	39.4%	1.8%	5.5%	1.2%						
	短大・大学・専門学校で学んだ	76	13	32	22	2	5	2					
	100.0%	17.1%	42.1%	28.9%	2.6%	6.6%	2.6%						
	はっきり覚えてない	379	56	112	142	12	15	42					
	100.0%	14.8%	29.6%	37.5%	3.2%	4.0%	11.1%						
	学習経験はない	127	20	30	42	8	8	19					
	100.0%	15.7%	23.6%	33.1%	6.3%	6.3%	15.0%						
	学習経験回答なし	50	6	13	10	0	1	20					
	100.0%	12.0%	26.0%	20.0%	0.0%	2.0%	40.0%						
	無回答	41.3	32.4	9.7									

## 問22 堺市では、学校で人権教育の一環として同和問題の学習が行われていますが、あなたはどう思いますか。

	回答者数	人 も 権 も 調 査 を 高 く 思 う	要 同 和 問 題 と い う こ と が 高 く 思 う	い 教 あ ら に い う こ と が 高 く 思 う	思 力 教 入 ど き の 問 題 が 高 く 思 う	い な 同 和 問 題 が 高 く 思 う	その 他	無回答
全 体	1,165	285	113	322	29	258	38	110
	100.0	25.3	9.7	27.6	2.5	22.1	3.3	9.4
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855	194	83	230	21	204	29
	100.0%	22.7%	9.7%	26.9%	2.5%	23.9%	3.4%	11.0%
	1つ(1~6のうち)	230	76	23	64	8	40	5
	100.0%	33.0%	10.0%	27.8%	3.5%	17.4%	2.2%	6.1%
	2つ以上("n")	80	25	7	28	0	14	4
	100.0%	31.3%	8.8%	35.0%	0.0%	17.5%	5.0%	2.5%
学校での学習経験	小学校で学んだ	487	165	60	143	11	61	25
	100.0%	33.9%	12.3%	29.4%	2.3%	12.5%	5.1%	4.5%
	中学校で学んだ	370	124	40	103	5	57	22
	100.0%	33.5%	10.8%	27.8%	1.4%	15.4%	5.9%	5.1%
	高校・高等専修学校で学んだ	165	53	12	49	4	29	11
	100.0%	32.1%	7.3%	29.7%	2.4%	17.6%	6.7%	4.2%
	はっきり覚えてない	379	69	28	109	13	118	6
	100.0%	18.2%	7.4%	28.8%	3.4%	31.1%	1.6%	9.5%
	学習経験はない	127	21	14	23	3	44	2
	100.0%	16.5%	11.0%	18.1%	2.4%	34.6%	1.6%	15.7%
	学習経験回答なし	50	5	2	11	0	6	0
	100.0%	10.0%	4.0%	22.0%	0.0%	12.0%	0.0%	52.0%
	無回答	247	52	23	63	9	53	8
	100.0%	21.1	9.3	25.5	3.6	21.5	3.2	15.8

### 3 新型コロナウイルス感染症・SDGsについて

阿久澤麻理子（大阪市立大学）

ここでは、今回の調査で新しく盛り込まれた「新型コロナウイルス感染症」と「SDGs」（持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals））に関わる質問をとりあげる。

本調査の実施年（2020）には、新型コロナウイルスの感染が拡大し、不確かな情報の拡散や、特定の国・地域の出身者、感染者や感染リスクが高いと見なされた人びとの偏見・差別が深刻化し、感染対策への影響も懸念される事態となった。新たな感染症に関わる差別・排除等の問題は、人権教育・啓発の新たな課題である。

一方、SDGsとは、2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられた行動目標（17の目標と169のターゲット）を指す。持続可能でよりよい世界を作っていくための国際的な目標であり、その前文には「誰一人取り残さない」こと、「すべての人々の人権を実現する」ことが明記されている。

#### 1.新型コロナウイルス感染症について

コロナウイルス感染症については、10の意見を示し、賛成～反対を5件法（「どう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」から1択）によってきいている。10の質問は、内容からみて、以下の3つのグループと2つの質問に分けることができるので、以下、グループごとに回答の傾向を検討していくこととする。

##### 感染者・感染リスクが高いと見なした人への忌避

- ア. 日常生活において、特定の国の出身者との接触は避けたい
- イ. 日常生活において、医療従事者との接触は避けたい
- ウ. 一度感染した人やその家族とは、たとえ回復しても付き合いたくない
- エ. 陽性患者を治療している病院で働く人の子どもが、別の教室で授業を受けさせられるのはしかたがない

##### 感染防止をモラル・責任の問題としてみる意見

- オ. 若者世代が感染を広げないよう、もっと責任ある行動をすべきだ
- カ. マスクをつけていない人はモラルが低い

##### デマ・陰謀論に対する考え方

- キ. インターネットやソーシャルメディア上のデマ情報を見分けるのは難しい
- ク. 新型コロナウイルスについては、世界的にまだ公にされていない「真実」がある

##### 公権力による人権の制限についての考え方

- ケ. 感染防止を理由に、過度に人権が制限されないよう、私たちは国や自治体の方針を注意深くチェックする必要がある

##### ストレス

- コ. 感染防止のため、自分の生活の様式が変化したことで、ストレスが増えたと思う

### 感染者・感染リスクが高いと見なした人への忌避【Q36】ア～エ

「恐れるべきはウイルスであり、人ではない」にも関わらず、感染への不安から、感染リスクが高いと見なされた「人」の忌避・排除が深刻な問題となった。ア～エでは、「特定国の出身者」「医療従事者」「一度感染した人やその家族」「陽性患者を治療している病院で働く人の子ども」に対する忌避意識を聞いている。回答を要約的にみるために、以下の3つにまとめて比較することとした。

「そう思う」 + 「どちらかといえばそう思う」 = “賛成”

「どちらともいえない」

「どちらかといえばそう思わない」 + 「そう思わない」 = “反対”

忌避意識を示す回答の割合が多かった順に並べ替えると以下の通りとなる。

感染者・感染リスクが高いと見なした人への忌避	賛成	どちらともいえない	反対
ア. 日常生活において、特定の国の出身者との接触は避けたい	23.8	27.9	43.9
エ. 陽性患者を治療している病院で働く人の子どもが、別の教室で授業を受けさせられるのはしかたがない	11.9	20.1	64.1
イ. 日常生活において、医療従事者との接触は避けたい	5.4	18.3	72.4
ウ. 一度感染した人やその家族とは、たとえ回復しても付き合いたくない	2.9	14.4	78.9

なお、2020年を振り返ると、最初に感染症が広がり始めた国・地域の出身者に対する忌避意識が表出し、海外との往来が規制され、国内での感染が広がるにつれ、国内の医療従事者をはじめとするエッセンシャル・ワーカーとその関係者、感染者やその家族などへの忌避意識が強まっていった。本調査が実施されたのは2020年12月であるが、その時点でも、最も忌避意識が強く見られるのは「特定の国の出身者」となっており、ほぼ4人に一人が、「接触を避けたい」という意見に“賛成”をしていることが注意をひく。

その他の項目については、“反対”が圧倒的に多いものの、例えば「医療従事者との接触は避けたい」に“賛成”は5.4%に留まるのに、「病院で働く人の子ども」の別室授業は仕方がないと考える者は1割を超えていることは注意をひく。これだけで断言はできないが、個別的な接触ではなく、教室という「集団的空間」という場面設定のために、感染の広がりを危惧し、こうした回答が相対的に多くなったのかもしれない。

なお年齢階層によって、忌避意識の強さに差がはつきりとあらわれる。忌避的意見に“反対”する割合は、ア～ウについては「70歳代」以上で低くなり、エ（「病院で働く人の子ども」の別室授業）では、「80歳以上」で低くなっている。

### 感染防止をモラル・責任の問題としてみる意見【Q36】オカ

「若者世代が感染を広げないよう、もっと責任ある行動をすべきだ」「マスクをつけない人はモラルが低い」については、どちらも“賛成”が7割を越えて圧倒的多数を占めた。但しその割合は、前者の場合「20歳代」「30歳代」、後者の場合「30歳代」でやや低い。

感染防止をモラル・責任の問題としてみる意見	賛成	どちらともいえない	反対
オ. 若者世代が感染を広げないよう、もっと責任ある行動をすべきだ	73.0	16.7	6.9
カ. マスクをつけていない人はモラルが低い	74.9	15.7	6.2

### デマ・陰謀論に対する考え方【Q36】キク

コロナウイルス感染症に関しては、誤情報、有害情報の拡散が大きな問題となってきた。ウイルスや感染症に関わるものばかりでなく、「トイレットペーパーがなくなる」という「噂」も広まるなどし、日常生活に大きな影響があった。そこで本調査では、ネットに出回る情報と、「陰謀論」についてきいていく。

まず、「インターネットやソーシャルメディア上のデマ情報を見分けるのは難しい」には、全体として“賛成”が圧倒的多数を占めた。「80歳以上」の割合がやや低くなっているのは、インターネット利用率とも関係があろう。

一方「新型コロナウイルスについては、世界的にまだ公にされていない『真実』がある」については、“賛成”は5割台であるが、「どちらともいえない」が3割あることが注意をひいた。

デマ・陰謀論に対する考え方	賛成	どちらともいえない	反対
キ. インターネットやソーシャルメディア上のデマ情報を見分けるのは難しい	75.2	15.5	4.3
ク. 新型コロナウイルスについては、世界的にまだ公にされていない「真実」がある	55.9	31.3	7.2

### 公権力による人権の制限についての考え方【Q36】ケ

ところで、感染症の「重大な脅威」に対して、国が緊急の措置をとることは、国際法によっても認められているが、本来は私たちの「人権を実現する責務を持つ」国が、私たちの人権を制限する場合、「制限はリスクに見合い、必要なものであって、誰にでも同じように適用されねばならず、制限の範囲や期間が明らかにされ、制限の度合いはできるだけ低いものでなければならない」というルールがある（国連人権高等弁務官事務所「COVID-19 ガイダンス」<sup>i)</sup>。

このことに関わって、「感染防止を理由に、過度に人権が制限されないよう、私たちは国や自治体の方針を注意深くチェックする必要がある」についてきいたところ、全体では賛成が7割弱となった。「80歳以上」が5割台でやや低いが、その他の年齢階層では7割前後ある。

公権力による人権の制限についての考え方	賛成	どちらともいえない	反対
ケ. 感染防止を理由に、過度に人権が制限されないよう、私たちは国や自治体の方針を注意深くチェックする必要がある	68.1	22.1	4.1

### ストレス【Q36】コ

「感染防止のため、自分の生活の様式が変化したことで、ストレスが増えたと思う」については、全体の6割賛成”となった。但し、性別では「女性」、年齢階層別では「60歳代」以下のストレスが、総体的に高い。

ストレス	賛成	どちらともいえない	反対
コ. 感染防止のため、自分の生活の様式が変化したことで、ストレスが増えたと思う	63.0	17.6	16.2

最後に、参考までに、10項目間の相関係数（Spearmanの順位相関係数）を示しておく（回答なしは除く）。濃灰色は0.3以上、薄灰色は0.2以上の相関係数を示しているところである。同じグループ内の質問間の相関が高くなる以外にも、例えば「陰謀論」（世界的にまだ公にされていない真実がある）と「特定の国の出身者との接触は避けたい」に0.2以上の相関、「国や自治体の方針を注意深くチェックする必要がある」と0.3以上の相関があることなどは、注意をひく。

Q36 Spearmanの相関係数

	日常生活において特定の国の出身者との接触は避けたい	日常生活において医療従事者との接触は避けたい	一度感染した人やその家族とはたとえ回復しても付合いたくない	陽性患者を治療している病院で働く人の子が別教室で授業…しかたがない	若者世代が感染を広げないようもっと責任ある行動をすべきだ	マスクをつけていない人はモラルが低い	インターネットやソーシャルメディア上のデマ情報を見分けるのは難しい	新型コロナウイルスについては世界的にまだ公にされていない「真実」がある	感染防止を理由に過度に人権が制限されないよう…國・自治体の方針を注意深くチェックする必要がある	感染防止のため、自分の生活の様式が変化したことで、ストレスが増えたと思う
日常生活において特定の国の出身者との接触は避けたい	1.000	.495**	.433**	.334**	.200**	.180**	.005	.219**	.106**	.067*
日常生活において医療従事者との接触は避けたい	.495**	1.000	.648**	.490**	.073*	.080**	-.105**	0.058	-.040	0.016
一度感染した人やその家族とはたとえ回復しても付合いたくない	.433**	.648**	1.000	.467**	0.038	.082**	-.125**	.072*	-.065*	-.015
陽性患者を治療している病院で働く人の子が別教室で授業…しかたがない	.334**	.490**	.467**	1.000	.062*	.104**	-.066*	0.058	-.057	0.045
若者世代が感染を広げないようもっと責任ある行動をすべきだ	.200**	.073*	.038	.062*	1.000	.428**	.255**	.350**	.284**	.148**
マスクをつけていない人はモラルが低い	.180**	.080**	.082**	.104**	.428**	1.000	.216**	.248**	.165**	.172**
インターネットやソーシャルメディア上のデマ情報を見分けるのは難しい	0.005	-.105**	-.125**	-.066*	.255**	.216**	1.000	.303**	.257**	.105**
新型コロナウイルスについては世界的にまだ公にされていない「真実」がある	.219**	0.058	.072*	.058	.350**	.303**	.1.000	.320**	.162**	.162**
感染防止を理由に過度に人権が制限されないよう…國・自治体の方針を注意深くチェックする必要がある	.106**	-.040	-.065*	-.057	.284**	.165**	.257**	1.000	.213**	.213**
感染防止のため、自分の生活の様式が変化したことで、ストレスが増えたと思う	.067*	0.016	-.015	.045	.148**	.172**	.105**	.162**	.213**	1.000

## 2.SDGsについて

### 認知度【Q37】

「あなたは SDGs (持続可能な開発目標) のことを知っていますか」と聞いたところ、「よく知っている」「少しあは知っている」を合わせた認知度は 23.6% にとどまり、71.9% が「ほとんど知らない」または「まったく知らない」と答えている。

認知度は「20 歳未満」のみで 5 割を越え、高い割合となっているが、その他の年齢階層では、1~2 割台に過ぎない。学校での学習や啓発の影響が大きいこともわかる。

### 17 の目標とつながる普段の行動【Q38】

SDGs の 17 の目標をあげ「あなたが普段の行動の中で、SDGs の目標につながっていると思われるものはどれですか」と複数回答方式できいた。選択した者の多かった順に並べたのが、以下の左側の図である。

ちなみに、前問で SDGs を「よく知っている」「少しあは知っている」と答えた 275 人のみについて、再集計をした結果も参考までに示しておく（下図）。

「すべての人に健康と福祉を」「住み続けられるまちづくりを」が高い順位となり、「ジェンダー平等を実現しよう」「パートナーシップで目標を達成しよう」「産業と技術革新」などが低い割合となった（とくに、世界的に日本のジェンダーギャップ指数の順位が極めて低いことに鑑みると、この結果は注意をひく）。

また、年齢階層別にみると、例えば「ジェンダー平等」は「20 歳代」以下の年代に、「働きがいも経済成長も」は「30 歳代」に、「貧困をなくそう」「すべての人に健康と福祉を」は「60 歳代」「70 歳代」、「気候変動に具体的な対策を」は「70 歳代」に相対的に多いなどの特徴がみられる。

図 Q38 SDGs につながる普段の行動 (n=1165)

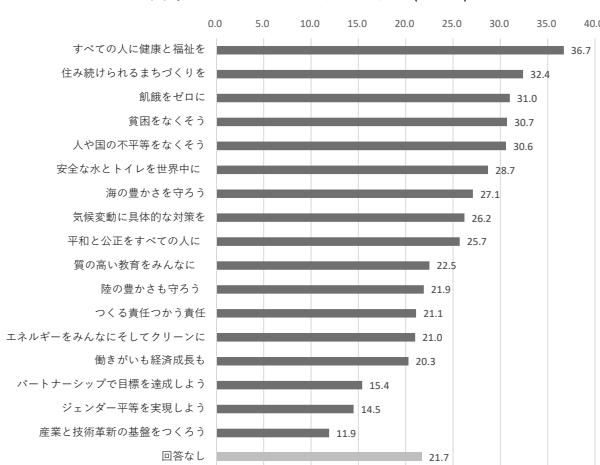
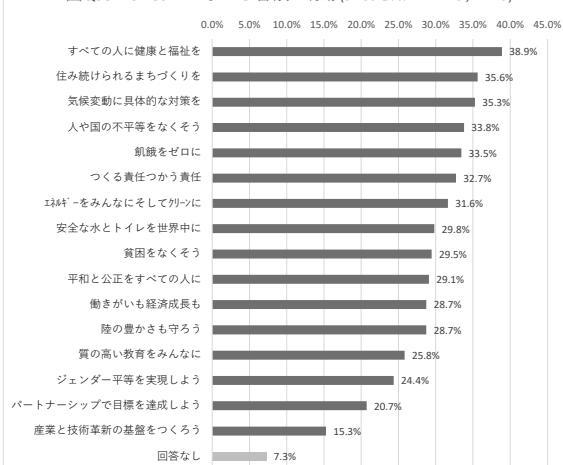


図 Q38-2 SDGs につながる普段の行動 (SDGs を知っている, n=275)



## 補足資料（SDGs 関連項目 啓発接触度ほか集計表）

### 問37 あなたはSDGs(持続可能な開発目標)のことを知っていますか。

	回答者数	よく知っている	少しは知っている	ほとんど知らない	まったく知らない	無回答	YES	NO
全 体	1,165 100.0	71 6.1	204 17.5	306 26.3	531 45.6	53 4.5	23.6	71.9
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855 100.0%	38 4.4%	110 12.9%	230 26.9%	433 50.6%	5.1%	
1つ(1~6のうち)		230 100.0%	20 8.7%	63 27.4%	63 27.4%	77 33.5%	7 3.0%	
2つ以上(〃)		80 100.0%	13 16.3%	31 38.8%	13 16.3%	21 26.3%	2 2.5%	
学校での学習経験	小学校で学んだ	487 100.0%	52 10.7%	97 19.9%	123 25.3%	211 43.3%	4 0.8%	
	中学校で学んだ	370 100.0%	40 10.8%	73 19.7%	107 28.9%	147 39.7%	3 0.8%	
	高校・高等専修学校で学んだ	165 100.0%	24 14.5%	33 20.0%	37 22.4%	67 40.6%	4 2.4%	
	短大・大学・専門学校で学んだ	76 100.0%	9 11.8%	21 27.6%	17 22.4%	29 38.2%	0 0.0%	
	はっきり覚えていない	379 100.0%	8 2.1%	61 16.1%	99 26.1%	193 50.9%	18 4.7%	
	学校で学んだ経験はない	127 100.0%	2 1.6%	19 15.0%	35 27.6%	64 50.4%	7 5.5%	
	学習経験回答なし	50 100.0%	0 0.0%	6 12.0%	11 22.0%	15 30.0%	18 36.0%	
							12.0%	52.0%

### 問38 SDGsでは、下記の17のゴールを目標としています。あなたが普段の行動の中で、SDGsの目標につながっていると思われるものはどれですか。(複数回答)

	回答者数	貧困をなくそう	飢餓をゼロに	祉すべての人間に健康と福	に質の高い教育をみんなに	しじょうエンダーパー平等を実現	界安全にな水とトイレを世	そエヌリギーをみんなに	働きがいも経済成長も	を産業くどろ技術革新の基盤	そ人や国の不平等をなくす	く住みを続けられるまちづくり	つくる責任つかう責任	策気候変動に具体的な対	海の豊かさを守ろう	陸の豊かさも守ろう	人平に和と公正をすべての	橋をバートナーシップで目	無回答	
全 体	1,165 100.0	358 30.7	361 31.0	428 36.7	262 22.5	169 14.5	334 28.7	245 21.0	237 20.3	139 11.9	357 30.6	378 32.4	246 21.1	305 26.2	316 27.1	255 21.9	299 25.7	179 15.4	253 21.7	
啓発接觸度	接触なし・回答なし	855 100.0%	248 29.0%	251 29.4%	289 33.8%	181 21.2%	113 27.1%	232 17.9%	153 18.6%	159 11.8%	101 29.0%	248 30.9%	264 19.6%	168 23.7%	203 24.7%	211 19.3%	165 23.9%	204 14.4%	123 25.4%	
1つ(1~6のうち)		230 100.0%	82 35.7%	93 35.2%	61 40.4%	58 25.2%	34 14.8%	76 33.0%	65 28.3%	56 24.3%	27 11.7%	73 31.7%	80 34.8%	49 21.3%	74 32.2%	62 27.0%	66 28.7%	63 14.3%	33 12.6%	
2つ以上(〃)		80 100.0%	28 35.0%	29 36.3%	46 57.5%	23 28.8%	22 27.5%	26 32.5%	27 33.8%	22 27.5%	11 13.8%	36 45.0%	34 42.5%	29 36.3%	28 35.0%	31 38.8%	29 35.0%	23 36.3%	27 28.8%	
学校での学習経験	小学校で学んだ	487 100.0%	137 28.1%	148 30.4%	176 36.1%	121 24.8%	90 18.5%	131 26.9%	100 20.5%	117 24.0%	65 13.3%	150 30.8%	151 31.0%	121 24.8%	110 22.6%	143 29.4%	111 22.8%	120 24.6%	78 16.2%	83 17.0%
	中学校で学んだ	370 100.0%	115 31.1%	124 33.5%	140 37.8%	93 25.1%	74 20.0%	104 28.1%	77 20.8%	94 25.4%	45 12.2%	121 32.7%	120 32.4%	96 25.9%	93 25.1%	111 30.0%	90 24.3%	116 31.4%	65 17.6%	53 14.3%
	高校・高等専修学校で学んだ	165 100.0%	42 25.5%	46 27.9%	58 35.2%	41 24.8%	38 23.0%	47 28.5%	33 20.0%	38 23.0%	20 12.1%	54 32.7%	59 35.8%	49 29.7%	37 22.4%	42 25.5%	48 21.2%	32 29.1%	32 19.4%	24 14.5%
	短大・大学・専門学校で学んだ	76 100.0%	18 23.7%	23 30.3%	29 38.2%	19 25.0%	21 27.6%	12 15.8%	15 19.7%	19 25.0%	10 13.2%	27 35.5%	28 36.8%	19 30.3%	21 27.6%	21 19.7%	143 22.4%	120 11.8%	78 22.4%	83 11.8%
	はっきり覚えていない	379 100.0%	122 32.2%	117 30.9%	139 36.7%	67 17.7%	39 10.3%	74 27.7%	79 20.8%	60 15.8%	39 10.3%	116 30.6%	122 32.2%	71 18.7%	102 26.9%	92 24.3%	76 20.1%	99 26.1%	49 12.9%	101 26.6%
	学校で学んだ経験はない	127 100.0%	41 32.3%	39 30.7%	43 33.9%	37 29.1%	16 12.6%	45 35.4%	30 23.6%	22 17.3%	18 14.2%	43 33.9%	46 36.2%	24 18.9%	44 34.6%	41 32.3%	35 27.6%	32 25.2%	32 18.9%	32 25.2%
	学習経験回答なし	50 100.0%	14 28.0%	9 18.0%	15 30.0%	4 8.0%	1 2.0%	10 20.0%	6 12.0%	6 12.0%	3 6.0%	11 22.0%	12 24.0%	4 8.0%	10 20.0%	9 18.0%	8 16.0%	7 14.0%	3 6.0%	24 48.0%

i 国連高等弁務官事務所 COVID-19 Guidance(英文):

<https://www.ohchr.org/EN/NewsEvents/Pages/COVID19Guidance.aspx>